



Handwritten Japanese text on the left side of the cover, including the characters '水戸' (Mito) and '藩' (藩, domain).

特別  
A13  
4304  
3



八犬傳第三集叙

響庭文庫

響庭文庫

門前有狂狗。其酒不沽。而主人不曉。猶且  
 恨酒之不沽。痴情若是者。謂之衆人。衆人  
 有清濁。猶酒有醜與醜也。而清者其味淡  
 薄。雖醉易醒。濁者其味甘美。而醜酖矣。奚  
 思今者之衆。懼後者之寡也。是故瞿曇氏  
 說法。以為有地獄。果天堂。樂。於是。不思後  
 者。懼矣。又何貴耳者之衆。不賤目者之寡  
 也。是故南華子齊物論。以欲禁爭訟。於是

八犬傳三集卷一

山崎堂藏

貴耳賤目者愧矣。然若彼寂滅之教。媚者衆。悟者彌寡矣。宜其媚者。口誦經而不能釋其義。其迷者。心禱利益而不知所以欲之。凡如之之禪兜。雖度無有其功。昔者震旦有烏髮善智識。推因辨果。誘衆生以俗談。醒之以勸懲。其意精巧。其文奇絕。乃方便為經。寓言為緯。是以其美如錦繡。其甘如飴蜜。蒙昧蟻附。不能去焉。既而有所之煩惱。化為屎溺。遂解脫糞門。則不覺到漿。

善之域。暫時為無垢之人。云不亦奇乎哉。余自少愆事。戲墨然。狗才追馬尾。老於閭巷。唯於其勸懲。每編不讓。古人敢欲使婦幼到漿善之域。嘗所著八犬傳。亦其一書也。今嗣其編。三而刻。且成。因題數行於簡端。嗚呼。狗兒佛性。以無為字眼。人則愛媚。掉其尾。我則懼。悞吠。帝堯冀為瞽者。獵煩惱狗。以開一條。迷路。閱者幸勿外其無根。文政元年九月盡日。 簑笠漁隱



南總里見八犬傳第三輯摠目錄

卷之壹

第二十一回

額藏間諜全信乃

犬塚懷舊觀青梅

同卷

第二十二回

濱路竊悼親族

糠助病思其子

卷之貳

第二十三回

犬塚義諾遺託

網乾漫賣歌曲

同卷

第二十四回

軍木妹說莊官

蕃六偽渙神宮

卷之參

第二十五回

含喑濱路訟憂苦

告灯額藏還主家

同卷

第二十六回

弄權墨官促婚夕

示殺頑父羞再醮

卷之四

第二十七回

左母二郎夜豪奪新人

寂寞道人見火定圓塚

同卷

第二十八回

罵仇濱路死節

認族忠與譚故

卷之五

第二十九回

相換雙玉額藏識類

相遇兩敵義奴報怨

同卷

第三十回

芳流閣上信乃血戰

坂東河原見八頭勇

統計三十回其第一回迄第二十四回既録于前板兩輯



犬飼見八信道

風の柳

劍術ハ  
極秘ト



犬山道節  
忠與

田單破燕之日  
火燎平原  
阿難亦寂之幸  
煙和兩杆

犬山道節

山三郎

碓もあつと心はぬきせん  
綱さうねえびとふら乃  
船く味ゆき終



大塚墓六

庄客糠助

斬れつまに  
あらぬ乃貝乃

奴隷北月

片ちゆむ  
力夜  
ほ  
ま  
ま  
ま  
ま

殿上官六



出像二頁浅倉伊八則

大虚容實 創自鴻濛  
渾沌未分 孰主人公  
氣如... 乃... 後...  
山... 水... 乃... 七

乾坤一草亭のありし信天翁題詠

南總里見八犬傳第三輯卷之一

東都 曲亭主人編次



第廿二回

額藏間 謀信乃を全せ  
犬塚懐 舊青梅を觀眺

却説犬塚犬川の両童子信乃額藏ハ送ハ志を告義を結びて久  
後を相譚ふ折是然と足音して外面より來りぬありけり信乃を耳を  
側目注をしけり額藏ハ中より狐の鳴子を尾落めしと二三四  
被死て臥せ程は片折戸小掛より引板の鳴子を尾落めしと二三四  
うち咳死和子よ宿所より牧糠助がよありしと恙ふれやと呼門  
障子の破隙より覗れ支木朽る竹縁は掛る片醫片胡坐背ぎぬ  
ひをつれと其の新樹をかえとを當下信乃ハ身を起してかを障

子を引用つ阿爺致してをまき。これ且たあえとひ帚を把く塵芥を  
 掃よるまじく見入りて頭をうち掉す。いふ措も土足あり。年このことたがら  
 蜀魂鳥の啼比ハ早稲も晩稲も種浸し。畑水田と渡かま稼いともく  
 多らふふらく不沙汰をつらうぬ莊官殿より隸らる。立重男ハいつ小  
 そや。と聞き信乃ハ後方を見入り。額花ハきのみより心地はふらとてうち  
 臥す。風むらさふてそとありひく。賣茶求めく勸まとも。早小瘡るべくと  
 あらむ。とひめを糠助使あへむ。その困ドあふあうん母屋へいぬて。しを告  
 餘の人をこくと替せん。さうさうあふまきのみぬ。あててまらせぬらる。まら  
 十五も足らぬとも異あらむともあづつあはれ。嬰僕が資小なむ。あん  
 刃は看病ささん。と鬼のやうある小父小母也。あひうけあきてあべ。吾  
 信乃任しひ糸と獨四圍早合点鹿忽あがりの信ある。諺の端居を著る。

そがま。まき。外面へ忙しげぬふより。まき。又墓六龜條ハ信乃が。あは。朝  
 夕の薪水のまきを資けよとく。小厮額藏を遣し。人目なうりハ三四日毎  
 飯のあらせ物あが。小坏ふ盛て饋り遣し。又まき。音つれて門より  
 安否を問ひあう。その初てを屢まき。素より愛はる心かまれば。植はけ  
 時のいそがし。まき。そのふたやうち忘れく。久く訪せむせうり。小父の  
 日糠助が来く。まき。と告し。龜條使て眉を擧め。この比ハ人一個を三人  
 めても使ひ足らぬふ公あ。の丁見奴が。風むらさうとて。つらむ。ありの。さやハ  
 あり。とせ。口を鉗め。うら微笑。と。まき。告く。あうり。まき。かくと  
 まき。れ。と。糠助をかく。あ。夫は相譚へ。墓六使て舌うち鳴ら。い。  
 是首と彼首ハ間近くとも。寔あ。あ。まき。これバ。入。かりて不便なれ。  
 けのより信乃を呼びとり。まき。類へくハ。あ。童でこそあ。親は似て。偏





直うちもあ。さか戲家奴と罵。はる龜篠ほ。とうち笑ひさ。ふの目をも  
 のと叱せま。あ信乃。いあは。総角あれども。心ご。ぬハ老はけ。殊は執念  
 腹た。あ。は。筋の。あ。め。と。ん。死。や。額藏。より。や。氣。入。ま。ん。と。た。  
 日来。彼。あ。と。り。か。ひ。は。使。は。る。の。あ。る。う。秋。信。乃。ハ。ま。あ。成。ひ。と。ま。う。  
 怒。ま。あ。え。さ。も。あ。れ。秋。様。子。を。告。よ。い。ふ。そ。や。と。儻。類。と。同。落。と。  
 梓。の。弦。は。あ。ね。も。水。向。ら。れ。く。虚。と。六。邊。を。否。目。今。も。ま。う。せ。し。  
 如。く。適。物。を。い。ひ。う。け。て。も。生。心。の。せ。せ。れ。い。は。ま。う。と。い。ひ。う。と。怒。ま。  
 とも。今。ハ。伯。舟。津。の。外。は。う。る。な。あ。れ。人。あ。ま。い。り。て。う。あ。ね。て。み。  
 ろ。ん。初。め。の。似。を。慕。く。あ。ら。う。る。疑。ひ。あ。只。某。小。強。面。に。ハ。過。世。の  
 雙。飲。さ。も。あ。く。ハ。氣。質。の。あ。ら。う。る。ゆ。あ。ら。ん。身。小。と。り。く。憎。ま。る。の。と。て  
 多。え。ゆ。り。と。い。は。暮。六。ち。額。は。假。深。の。主。後。も。五。性。の。相。刺。あ。る。と。う。

い。は。う。あ。と。い。難。け。れ。も。假。病。せ。ハ。不。覺。あり。信。と。懲。ま。へ。く。と。ど。も。  
 此。度。ハ。枉。く。許。と。あり。よ。ふ。い。そ。が。り。た。折。あ。ら。う。西。三。人。が。古。友。を。り。て。その。愆。と  
 賞。ま。い。その。度。は。辛。た。め。ん。存。ん。立。後。く。と。い。そ。が。せ。ハ。額。藏。頻。り。不。頼。つ。れ。く。  
 庖。偏。の。く。え。退。死。多。り。龜。篠。要。時。目。送。り。く。こ。う。使。ハ。何。と。ま。ま。い。人。乃  
 氣。質。ハ。さ。あ。ぐ。あ。り。総。角。ハ。總。角。と。ら。し。れ。友。と。飲。び。て。使。れ。も。せ。ん。使。ひ。も  
 せ。ん。と。あ。あ。い。似。と。額。藏。が。信。乃。ハ。鬱。悒。せ。ら。う。一。日。二。日。の。る。あ。ま。か。れ。ハ  
 い。く。怒。る。悪。口。を。利。さ。秋。若。ま。い。氣。質。の。合。さ。ら。あ。ら。ん。さ。あ。あ。い。と。て。耳  
 唇。ハ。暮。六。頭。を。傾。け。く。否。そ。れ。の。こ。小。限。さ。べ。い。と。信。乃。ハ。あ。い。と。あ。は。疑。か。く。  
 額。藏。を。鞭。う。る。隱。監。あ。ら。ん。秋。と。く。心。放。さ。ぬ。る。も。あ。り。あ。ん。ん。と。侮。る。べ  
 くと。額。藏。が。代。り。ぬ。誰。を。遣。し。ま。い。る。誰。と。く。早。の。り。あ。ら。ん。脊。奴。の。い。け  
 と。遣。し。ゆ。り。渠。ハ。齡。也。六。十。ハ。あ。ま。り。て。人。あ。ら。ぬ。傷。う。も。積。け。ら。ハ。二。里。の

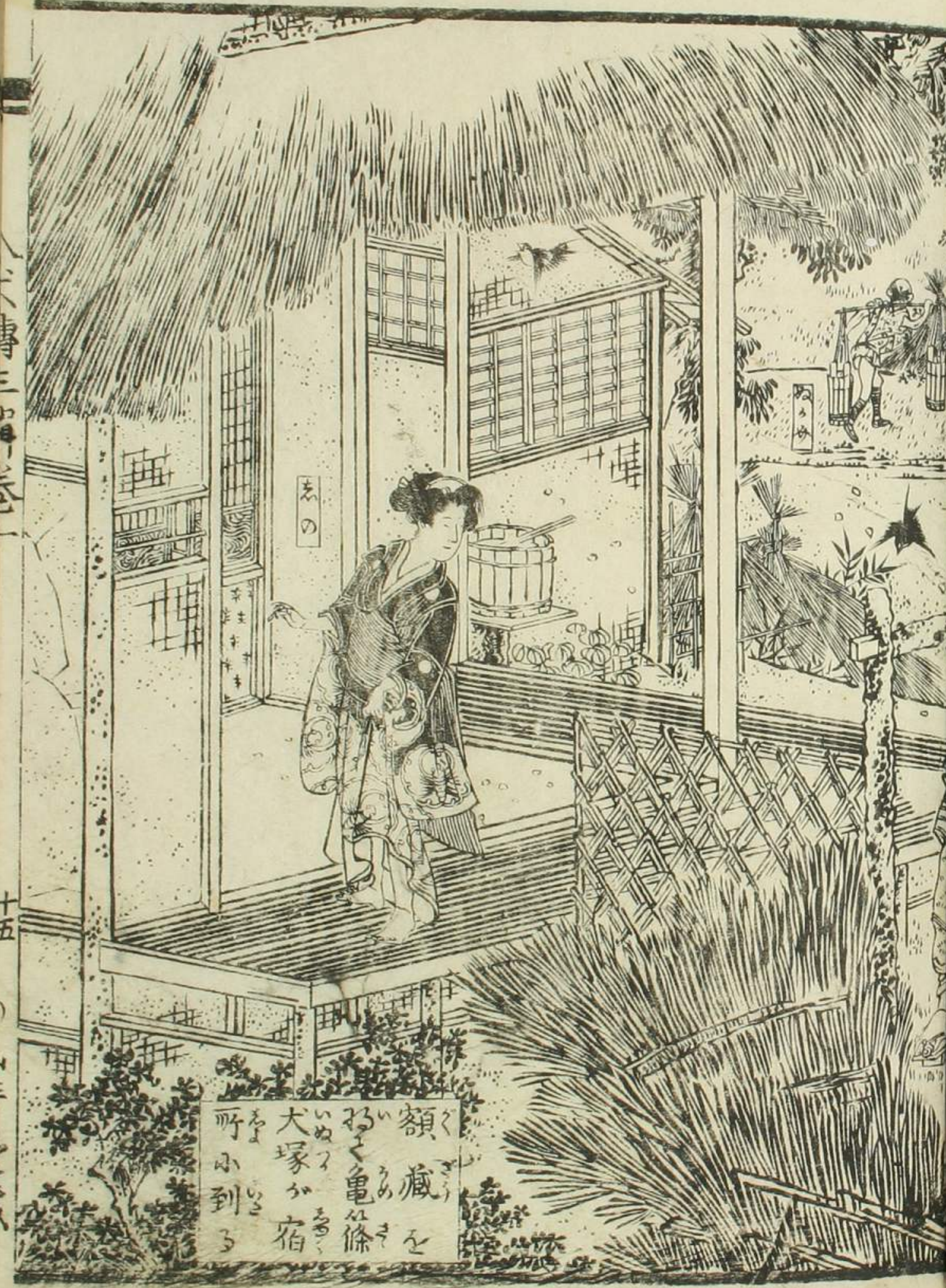
灸を燻し。起居も不自由なり。額藏と引替り損なれぬの小侍をばやと  
 又ハ志ぶくうち点頭微妙計りてあひゆれまゝ一兩日遠く四五日程と  
 壁を竊ふ背助を招きよせ渠も信乃が心成りや事の中を向ふ渠も  
 心をむくまふ吾侍夫婦を疑ふ又額藏をのぞ嫌ひて背助を厭ふとたゞハ  
 丁見一人がうめりてまゝを疑ふ故にあふまゝ事の虚実を撈りて後計  
 策はるはあふまゝのろろと額を令りて相譚果く起小けり。さう西三日  
 経れば亀條ハみづる信乃が宿所へいゆれてさう氣も安否を同事の  
 為体を窺ふ信乃の背ぬを厭ふとさう背ぬも亦真成り進止むといふ  
 ところ亀條曾も物あれば及四表八表の物ぐる小時を移り今ハかど  
 ころハ告別しかへりまゝと夫ハ納戸ふを折しそよけとむりハ  
 いゆれと曩も背ぬをむびよせと竊も問へと宣ひて信乃が疑ふとや  
 とせよけまゝ吾侍のゆれと喪中の安否を問ひて日あまり彼奴も  
 残る隈もく見究めたり。その為体ハ如此と箇様とと潜す告れハ墓  
 六且く尋思。さうとて信乃が心なる九庸の少年も後ハ虚と肌膚を  
 せよ。まづ額藏を召近つけ。箇様と小あつらへる成らば云々あり。  
 かの如く計んよ。後悔もさうあふまゝ氣色は晴々さあと言ちらも  
 ち説示せ。亀條も管歎賞。現針ハ細小でも吞れむといふ諺ハそ  
 らのふゆりも。夏ハ心屋にけり。少年もバ用心。あは用心をさうそ  
 よみとさうのびくは相譚ハ折竹縁を踏鳴り。障子のあふこと過るの  
 あり。亀條ハいちや。その額藏ハあふまゝや。と問ハ。さうと答り。竊  
 のめ。た。丁をあふ。す。たの。入。ま。と。む。び。止。ま。ま。か。を。さ。障。子。を。推。開。つ。  
 顔。入。ま。つ。の。わ。る。成。其。れ。引。開。く。さ。あ。ま。よ。と。膝。の。ほ。り。招。き。よ。せ。

かろ打揃くおくくろく死るるよるねども折のよみ告るん信乃ハ正  
 妻く怪れども番仕が僻る心の鬼を譲り受る果が氣質ハ汝も老れり  
 飽まで小慈む伯母を不足小どらむのるふとく遣せ入嫌ひとら  
 わらどささざら汝が口さふあておらぞ信乃は腹を恨まれたるおらん  
 こそまのまかかもおれ世間舅姑の置しふよるもころ死も彼子のうハ  
 こと口つらむいどらこの故のみ氣成受る揚足とそぬ用心をける外またハ  
 るにぞとよ汝ハ六つ七歳より生涯使小厮あるに任ぬよりくおぼる  
 かの養三月一主の恩大々たるほどとあるあはれや強面くめておれとも終  
 め信乃は馴近つ死くゆるくとあふ竊ま告よその苟且のるかた信  
 乃をよめるえんびとりて養の月日ハ限りあると未いと遙まこのあは  
 らのいのり小耳は狭くと念ども主のふるあまよふそれ秘の利生ハあは

あまはるるやとよららも幕六ハ髯抜きけ子を取つて願藏額藏  
 汝ハ果報あるに任ぬもきて憑りくおらるるぬ糸ハ機密を告べき  
 かれハ汝を遣りく亦復背ぬとかうせん志の程ぞ辛防せよとい人ぞ  
 額藏小膝と捺りかまでとらえなる御恩をいぞ仇めくおらるるを  
 忘るに前日私語をうせじと犬塚とのあふ外より外よりおれ人かれハ  
 野心あぶるもの終るともかちおらと馴近つ死るるかたは秘ハ竊ハ  
 告やさん上いふのるぬを思召れよと真しく回答をされハ主  
 夫婦ハいり言をぬ甘くして嫌を成るる賺さるる又彼背ぬは替らん  
 とくまんとはまぬ條ハ遠く推禁め童どもちで背あせせ彼子の宿  
 所へ独らんハ今ささ小面もせさん吾侪が後ハ跟く来よといはて躬く  
 身を起しとれ合せ衣の前うろ結びの帯の端推拵あから作縁よ

額藏より立ち極金剛を取らせり。龜條裳を引揚て納戸の方を  
 見入りつちよと往て還す侍らんとしめ夫、領くの冠ハあぬ苗草は親小  
 劣ぬ任の宿背門の畠の畦傳ひ捷徑よりを進むける。かく龜條ハ信  
 の宿所へ赴れり。常由あむさうちほく笑ひ信乃よきそ後然かあ  
 所要るけむるも妨む。このふけは歩が親さふ何しおまると思われん  
 けの別の談も侍らむ。この額藏さるるか。情由ハ後と機嫌小悟りて  
 使つてのあむさう虚病起し還り。と明地入人小告り成使てハ伯母が  
 たるも済む。や昔ハ疎くとも今ハ親死任り伯母あり小厨水水  
 煎まる。飯の中る湯麥。眞歯は物が夾す。心かり小侍るか。墓六  
 どのも腹立ち。額藏をいとせり。叱懲り。むひハ渠ハ忽地非を悔て  
 勸解したと。ちほはめれよりて再びぬき来り。むつたるめり。のこめ

れと足らぬれハ云々と教諭し使さんハ渠が為ハ幸ひえ伯母中びこの  
 う。あむさうと見えれば額藏愧る面色。頭を掻けり。小藤を  
 勧め今阿家さあ宣言ふ。心小物のあふ。後と朝の炊もさせめり。を  
 曇つた。ろろの鍋の尻用る。居置く。故又頭顱病。くひれ。それ由  
 已か思る。僻る。ろふ。人許させめ人と勸解けり。す。の。の。ハ豫  
 てる。謀合せ。る。れば信乃ハ此彼。あ。を。ち。敬馬。る。面。して  
 ち。ひ。ひ。も。あ。勸解。る。や。親の在かり。日よ。薪水。の。夏。大  
 日。の。熟。る。資。の。人。ハ。あ。て。り。と。思。ひ。あ。ら。は。疎。り。く。わ。せ。あ。ら。う。それ。さ。う  
 覚む。か。る。る。の。母。屋。侍。夫。婦。出。る。か。け。られん。ハ。皆。是。あ。の。が。罪。よ  
 一。を。疎。意。あ。ぶ。く。も。い。つ。と。の。り。小。亀。條。を。ち。笑。く。あ。う。ん。め。さ。あ。ち。あ  
 ち。中。直。り。せ。る。あ。れ。ハ。額。藏。を。留。め。る。背。ぬ。を。返。し。こ。め。これ。よ



額藏を  
 いぬの  
 ちんちん  
 大塚が宿  
 町小  
 所子



就ても亡人の忌果るまで二鞆の家城隔て俟あふふらふ不便はゆかり。  
 願ふ五七の忌日限りおん身を母屋へ艱ひとらば。後中をくゆるかなん墓  
 六の初より。あつせまなほくさひ多しと。おん身を汲みて月日はるを  
 待たし。そのあふ不致のゆを。と。回さく信乃ハ嘆息し。白屋をぞ。俣  
 るま。親を思へハ。今又。離さくハ。竹まどの。四十九日由別まふあ。百  
 日。その期ふるふ。な。去か。く。は。おのが公の随。りて。物成思  
 り。せ。ま。日。を。過。げ。罪。あ。く。と。お。か。の。討。ひ。又。仰。は。情。り。ゆ。と。  
 愉。く。諾。ひ。う。ハ。電。條。あ。く。致。び。く。吁。賢。と。や。と。け。り。か。上。死。子。ぞ。然  
 ら。五七の逮夜。ま。都。丸。里。人。を。招。れ。よ。と。佛。の。ぬ。物。を。態。進。ひ。その  
 次。の。日。小。戸。を。鎖。て。お。ん。身。ハ。母。屋。へ。親。と。多。詞。歌。ふる。ま。と。女。兒。濱。路。の  
 竹。か。渠。を。お。ん。身。が。妹。も。お。上。さ。る。と。も。見。ひ。後。と。い。ひ。く。独。ち。笑。ハ。バ。

信乃ハ果ましく。心せぬ。電條の。機嫌よく。指。俣。へ。く。ち。点。頭。る。丸。人。の  
 三十五日ハ。け。り。僅。は。四。日。が。程。あり。葦。六。の。ゆ。中。歡。せ。翌。より。逮。夜。の。准。後  
 せん。ま。吾。倚。ハ。罷。る。額。藏。よ。母。事。よ。ろ。を。付。く。仕。へ。い。つ。ま。一  
 ことを。忘。る。か。信。乃。も。ろ。づ。心。く。ま。う。火。あ。れ。水。あ。れ。使。ひ。最。上。の。川。よ  
 曳。と。い。ふ。舟。漕。ぐ。乗。一。鬼。と。打。懲。ま。も。け。く。ハ。お。ん。身。を。彼。背。ぬ。奴。ハ。此。月  
 門。を。を。額。藏。を。お。ん。身。ま。つ。れ。ば。お。ん。身。供。へ。母。屋。へ。還。是。と。い。は。や。の。中。の。心  
 直。ま。ま。は。つ。り。と。危。漏。る。障。子。を。か。を。引。開。れ。ば。お。ん。身。が。落。著。負。る。る。  
 其。知。ふ。を。り。ん。靴。や。門。へ。お。ん。身。の。そ。が。く。と。お。ん。身。を。止。め。あ。む。信。乃。ハ  
 い。そ。く。席。を。避。日。ハ。と。長。く。つ。ら。る。今。且。く。語。せ。多。人。飪。の。素。湯。ゆ。佛。竹。と  
 び。頭。を。ち。掉。く。茶。を。た。ん。ど。を。る。間。ハ。竹。を。曲。突。下。の。鹿。采。麥。の。お。納  
 危。响。と。は。損。ま。り。又。こ。ま。め。と。い。ひ。け。く。お。ん。身。を。送。り。信。乃。額。藏。腹。か。え





謀現一雙の賢童あり。さるねふ番作が二十五日の速夜ふるるる電篠ホハ  
 きりのり。美子贈の用意く。碗家具さふ母屋より運ぶ小厨が幾矢り。  
 寔は足ハ榑棒も。ちく働く臺所物大さふ整へるや黄昏なつるまふる。  
 この日も信乃ハ亡親の墓参りせり叙は菩提院るる法師を伴ひ遠く  
 立久れば法師ハ家畜よりち對ひ木魚敲るる看經も。一口茄子と澄  
 汁料供の菓を數へく。浩如小糠助ホ里人夥詣来つ。寒暖の時宜  
 口誼或はる死入のりひも。昨けのやうるる。二十五日小當りさふ飲  
 を常迅速はるのり。さるる浮世ハ夢助の孰もか浩るるこれとや若く  
 御免さるるさる。あま上坐ぶ不躰千萬叔く遠慮し及ぶぬ。さるる  
 取ふ飲とさる。迷惑嫌平ぬ。ち年役さ宣ふ。六十の延破さといふあり。  
 鐵鞘把ても若衆小一畝と後さ。さるる。ち別懇る。糠助の

上坐るる。お坐をさる。起つ居つ謙退辞讓散動る。稍二側は  
 坐を占ま。信乃がさる。並居る。飯中酒は挨拶紛紜由断を見  
 済し額藏が碗を奪る。浮盛ハ鼻よ支へ。又胸よ支ぬ。ぬと汁  
 破く。半減く。自戒吻く。下戸の恨を冷笑ハ宗旨違の上戸客法  
 師ハ上坐ハ六歎仙歌膝崩し。置さる。時分を計りて墓六ハ縁類  
 より遠り来く。上座の障子推さる。孰も揃る。よくさる。進  
 らる。のハさる。と寔は。相譚多し。進きて席ハ著る。首  
 入さく引伸き。袴の碎衣積も菱織のい。稜わ主態は衆皆齊一著を  
 措さる。ひる。れ。應鎧武者ゆ。あ。ち。屈伸さ。不自由小額  
 つ。の。あ。ぬ。さ。下。さ。く。ひと。人。か。ハ。皆。咄。と。笑。ひ。小。堪。む。噴。散。る。  
 飯粒脂は花雪吹これ。く。と。さ。る。と。小。拾。ふ。は。餘。る。粒。辛。苦。背。月。の

菴がよ宿む六助くくま下と唧ちる。かまけきた墓六六苦切て見もかまを  
 且くくま下と唧ちる。各位よまをかく。か妻ハ舊の地頭大塚匠作ぬ  
 の嫡女ま番作が婿なる嘉吉の結城合戦小その家一旦滅亡と  
 子孫氏同小後て後再興せし電條が縁又繋るが功えりてぬ  
 正か死せりと作番作が妻をぬく還りてついで所成引とけく  
 莊官之小讓くと甲斐支る人身の不自由小心と直く松なる  
 坊ひもまが婿を恨めくくまをふたの不雙言敵の如罵るの生涯抱をい  
 ざりてむろくくま下と唧ちる。有繋小役義重けまのまをさげて  
 勸解ゆるよのあまを。か各各各位渠を憐れ構を結びて残を集め  
 家を購ひ田園を隸て生涯養れし舊とあひ羨る信なり。これ口口口  
 出くくま下と唧ちる。酸鼻ま辱く年来感嘆浅くも。か各各位口口口

迹ぬ六役義ののさ些し推量せられよう。これは是遇の彼偏意  
 地をまを。墓なるり番作が黄泉の迷ひハ信乃のまこの孤と  
 養ひとて人とあまの先祖へ不孝。こ亦人といふんや。よりく電條と  
 相禪。渠が親の果より日より。小厨ホを冊せ送代夫婦をりく歩を  
 運ぶ心成添く。五七の逮夜のけみか日やで等閑小せざるの各位も知  
 てぞあま。あまのれも十五よも足さる任をのりて。か各各位  
 置死母屋ハ母屋へ迎へく。適丈夫小守三育。女兒濱路を妻く。大  
 塚氏の世嗣と。就て彼番作田ハ各位よ返さん致又信乃小與ん致  
 と同ハ衆皆頭を擡。その宣つるもあま。親の物ハ子小讓る貴賤上  
 下の差別あり。件の田園の主とりの息子の外あり。吾們がらんで  
 まいよ死小計せむ。か墓六六ち笑く。あま信乃が成長つて

八代傳三轉卷一  
 十九

估券ハ其領クシ又この家ハ床を拂テ彼番作田の箱城とせん各位美  
 知せん信めしと信めしとあが田へ引くとさうや水飲百姓頼見あふ  
 応難れハ庖偏のくさり亀篠ハ相槌撃んと進入りて信乃がむり  
 推並ひけの仏ハとまればこれの子ハ吾侍が婿と子あり子と奉ぬ  
 めハ人の子を養ふとさう慈む不致死のるれ任不讓る田園俊美あり  
 と并成彼番作田を何ゆせん信乃も如此とろろ人田上りして宿の  
 竈の下の灰までも果ハおんが物ありか憎しとさひ弟でも今かうあり  
 てハ最惜れ小東をんても西足ても伯母より外ハ親類もれこの子ハ久  
 後想像れハ襪襪の中より字と濱路小まて不便之可愛くさりと  
 いひけ頻り小持の袖の雨降るとさえて濡さるる上亀篠は泣き泣き  
 諸鬼うちむ里人ホおんが存一嘆息一寔小親ハ憂苦會ゆ人乃

誠と今ぞ知る伯母君の述懐ハ連夜の追善の上り番作とみ御子息と  
 皆が心と宣はる一郷の人入とゆりかくて何で疑ふべん件の田園を杜  
 官大人且く管領せられんる勿論ふいと異口同音ふ心ハ昔六龜篠欵  
 ひくけの冷う成盛えさせ盃を勧め飯を浮ひく歎待を免小御あり  
 かくてその夜初更の比饗膳やる果ハ法師ハ布施の二杖頭脛のあ  
 つまろりゆくと尻小跟く莊客們皆謝辞を述竭ハ漸く小御門廻向紙  
 燭も法の燈火と後と先と一口念仏南を阿弥反飯と轆まのたと上戸を  
 扶かり去迹ハさかた大風の風さう如く蕭々小洗ひ浄めて拭ひ納る五  
 器のまじのゆえたりかくその詰朝信乃ハ亡父母の墓ハ香花ハ向んて  
 菩提院へ赴りて還るをもちで暮六夫婦ハ小厨ホを駈まると大塚が家の  
 調度を取運せ竈下の物席蘆戸障ハ物大さな沽却とさや空二房ハ





けり。かくそのみ。さる宿所。近くさる。まふ信乃。ハ。つ。舊宅の棟をつく  
 うち眺望。遠くもあ。ぬ程。あれども。下。び住む。りて。暮月。小。鄰。里  
 ころ。か。か。ぬ物。ハ。重。葎。庭。の。草。木。を。丸。く。ゆ。ん。と。傾。顔。れ。片。折。戸。を。  
 推。く。主。後。進。入。る。檐。小。昔。を。あ。の。が。草。柱。斜。に。壁。落。て。藁。の。外。小。物。も  
 め。と。現。人。去。く。趾。の。と。あり。物。亦。り。と。訪。ふ。由。り。さ。ら。は。さ。る。涙。の。媒  
 ろ。ふ。去。歳。の。その。月。与。四。郎。が。後。の。世。の。為。榦。を。削。く。如。是。畜。生。云。三。の  
 經。文。を。書。つ。け。る。梅。ハ。殊。更。茂。り。その。削。痕。ハ。瘡。文。字。ハ。滅。て。昔。梅。子  
 夥。生。よ。り。この。梅。樹。の。下。小。埋。彼。狗。が。肥。ふ。り。軟。この。花。落。紅。梅。は。  
 子。の。薨。去。稀。り。小。枝。毎。に。結。子。り。これ。ぞ。今。茲。が。め。あ。る。彼  
 見。多。人。と。指。さ。せ。額。藏。も。ま。ま。と。あ。ま。く。つく。と。うち。瞻。め。吁。め。た。この  
 梅。ハ。その。條。毎。小。ハ。生。り。ぬ。世。小。八。房。の。梅。と。い。ひ。の。あり。と。い。ひ。又。と。四。子。ゆ。と

ん。ご。り。れ。と。八。房。小。ゆ。り。ん。と。い。れ。く。信。乃。ハ。心。つ。れ。寔。小。と。八。房。り。ご。ら  
 抱。ご。り。代。知。る。比。より。斯。條。毎。小。八。生。る。と。い。ひ。ゆ。め。と。傳。人。ぬ。と。う。り。畜。生  
 あ。が。り。主。を。知。る。彼。と。四。郎。が。名。小。負。り。四。房。小。を。生。る。べ。れ。小。八。房。を。え  
 り。ふ。ご。ら。と。い。ひ。さ。け。く。又。と。い。か。う。ん。と。奇。る。か。か。と。ハ。八。房。る。の。と。あ。あ。ら。ど  
 見。多。人。實。毎。小。摸。様。あり。何。ふ。似。る。と。枝。引。よ。せ。く。その。實。を取。て。共。侶。よ  
 寄。小。乗。せ。日。影。向。ひ。く。見。ま。ふ。自。然。と。文。字。あり。一。箇。ハ。仁。一。箇。ハ。義。この  
 他。礼。智。の。文。字。あり。又。忠。信。孝。悌。の。四。个。字。何。と。その。實。毎。小。一。字。々。  
 顕。然。と。し。と。読。ま。る。と。ま。ふ。小。至。く。兩。賢。童。ハ。毛。骨。竦。ま。で。驚。嘆。し。榦。と  
 削。り。て。写。つ。け。了。如。是。畜。生。云。三。の。ハ。乃。文。字。ハ。消。滅。く。今。又。その。實。ハ。仁。義  
 礼。智。八。行。の。文。字。あり。さ。ら。く。い。ふ。と。な。り。小。る。疑。ひ。釋。ら。り。け。り。且。し。と  
 額。藏。ハ。膚。護。の。囊。る。秘。藏。の。玉。を取。出。し。若。子。と。見。え。ん。多。う。梅。の。實。と。

青梅  
香も亦  
花よ  
やまうり危  
巴克亭鶏忠



この玉とその形相似り。その文字も異なり。故あええりなれども  
曉りかきゆ。とのめ小有理。とよも亦護身囊小秘あれ。玉をどう出  
あせカウふその小大も文字も等。寔小然り。因秋果秋玉といひ梅と  
いひ符郎をあらせくまき。奇に試と推と死ハこの玉原ハ八顆あり。  
仁義八行の文字を具足あるや。まふ貴なる六の玉世ふあとの小なる  
らどこの梅笑ぞ八房小生る。この玉とこの梅子小頭とる文字何ぞ死  
同ども草木非常あり。叩けども玉石答ま必しも因縁あふ。後小あひあ  
せんの人ハ只奇をぬむりの人あつらふ。知ま。これらこれを告げま。  
努秘とべし。と密語あつ。その八房の梅子を紙小捻アま。玉あり共小  
各囊小納め。荒る庭を走ア出。腕く宿所。環ア。されハその  
年鼻月の比伴の梅の熟せりと。墓六が家の小厮ハさる。と。し。里

人ホハそめてその八房の成見著つ。世ホめづらあるとたのふとそくある。夫婦小告るもあり。又彼此小語りつた。風聞高くあるのさ。その梅熟。よろふ及びくハ彼八行の文字ハ滅さ。この故小里人ホハ只ハ房を賞。の文字のるハあるのめさ。毎歳又その実ハ八宛生々れ。文字ハこの春のそり。後ハ竟ハ頭とぞ。墓六亀條ハ。ゆを彼とよども。風雅のそ小疎け。花果の樂を念とせ。只彼梅子のヨ。年々又塩藏。酒食の菜小える。この梅漸く小人小知。名木小たのふ。与四部が。八房の梅。故老の口碑小傳。後年數度の兵火小係。梅も枯。塚ハ鋤。今ハその蹟も。猫又橋の遺。

第十二回

濱路 竊小親族を悼む  
糠助 病く其子と思ふ

而説ハ塚墓六ハ信乃を迎とりてより。女房龜條共侶小いと愛。待まめ。只外聞を飾るの。小刃を磨ぐる。小尋れハ墓六既小里人ホを欺。番作田を横領。信乃が。小一毫も用ひざれども。村兩の大刀を得。小入。後彼少年を結果。小宝刀小よりて。遺跡。又濱路ハ佳背招。身。老樂。願小信乃が。魂凡庸の童。小早。事。吹。痲を求め。果ハ原價小。只真成。歎待。由。小。腹裡小深念。龜條小の。機密を告て。斯謀。



あやとろ。かれハ信乃ガ危死ト石の下小生成と雞卵新小巢龍と離小  
 異さる後とも親の先見送訓あり加ふ才器勇悍牛若をも欺くべく  
 正行ゆもあさる。稀有の少年たのむけさバその情をよく知アて片晌も  
 心を放さざ。舊宅小あり一日より伯母の宿所小移り一日より件の宝刀ハ  
 腰小離さ。坐ると死ハ傷小とり措き臥すと死ハ枕小よせ。護るる等  
 剛さ。後ハ偷児の隙あり。主客の勢ひかくの如くあり。下とせあり  
 送り。奸智小長。墓六あれども熱ふ心をうけ。見咎められ。六年  
 未日。心尽し。泡と消て。かえり。んと陥む。福小偷む。あろの稍  
 懈ア。今茲又。小ハ中。村雨の大刀。小落とも。信乃ガ安穩て。ま小  
 と。それを管領家へ進。は。由形。より。彼宝刀。今。有。小。さ  
 る。主。物。も。あ。小。あり。物。も。あ。小。あり。家。小。あり。あ。れ。終。ま。六

日。有。と。あ。る。一。口。管。あ。ろ。早。と。ア。そ。の。謀。施。か。く。と。ろ。不。便。め。り。  
 あ。く。小。危。女。兒。濱。路。ハ。尚。稚。死。小。今。より。十。年。待。とも。その。途。途。小  
 わ。と。遠。く。謀。さ。長。く。利。あり。短。慮。ハ。切。を。あ。か。く。と。漸。小。ひ。え。り。亀  
 篠。も。その。ろ。成。ゆ。さ。そ。く。且。く。盗。む。の。身。を。藏。め。口。を。り。く。額。流。小。信。乃。ガ  
 意。中。を。撈。ら。は。し。も。これ。お。け。り。を。ゆ。さ。も。あ。む。さ。れ。ハ。亦。額。流。ハ。件。の。状  
 主。夫。婦。小。向。る。毎。日。陽。光。信。乃。を。識。さ。し。も。害。ふ。ま。る。べ。死。る。を。は。り。さ。す。  
 その。問。れ。る。答。し。よ。を。竊。小。告。さ。る。工。の。あ。け。さ。信。乃。ハ。ち。ち。く。由。お。せ。は。  
 こ。も。陽。光。伯。母。を。慕。ひ。く。小。厨。又。ひ。く。使。れ。り。か。く。二。三。氣。在。持。し。く。  
 春。と。明。け。妹。と。暮。れ。流。る。月。日。小。委。ま。あ。け。さ。六。文。明。も。も。九。年。小。あ。り。ん。  
 この。年。信。乃。ハ。八。八。歳。濱。路。ハ。二。つ。あり。ま。て。二。八。の。春。を。迎。へ。六。花。然。人。と。し。く。  
 月。の前。小。芳。しく。柳。翠。を。ま。す。く。霞。霞。の。間。小。戦。ぐ。又。似。り。彼。公。奇。才。此。弱。冠

あり此八嬋婿さる少女あり。その器その色鄙み稀之この夫ありこの婦ありんハ  
 寔小天縁ありとく里人こゝに弑答さるりのあり。莊官夫婦を忍る毎小その  
 婚姻を催促も墓六由亀條中。豫くいひつるのあり。この返答の迷惑中  
 害心あり小再發し。竊小信乃を結果んとす。急がのせられども。十二歳の  
 時ふも謀りかた才子あり。今ハそと丈夫よりて身長五尺八九寸。臂力も  
 定め強く。二葉小く摘み。竟小谷を用ると。そのふたつ。とやう  
 あり。悔しける。泣きけり。と脣を啜も。その甲斐あり。言せま。かくや  
 せま。と業し。煩ひり。折鄰郷忽地騷動し。不慮の合戦起り。小けり。  
 縁故を尋る小豊小武藏。豊嶋郡豊嶋の領主小豊嶋勘解由左衛  
 門尉平信盛といふ武士あり。さやう大名あり。さよととも志村十條尾久  
 神宮あり。數郷を管領し。その弟煉馬平左衛門信盛。八則煉馬の弟。

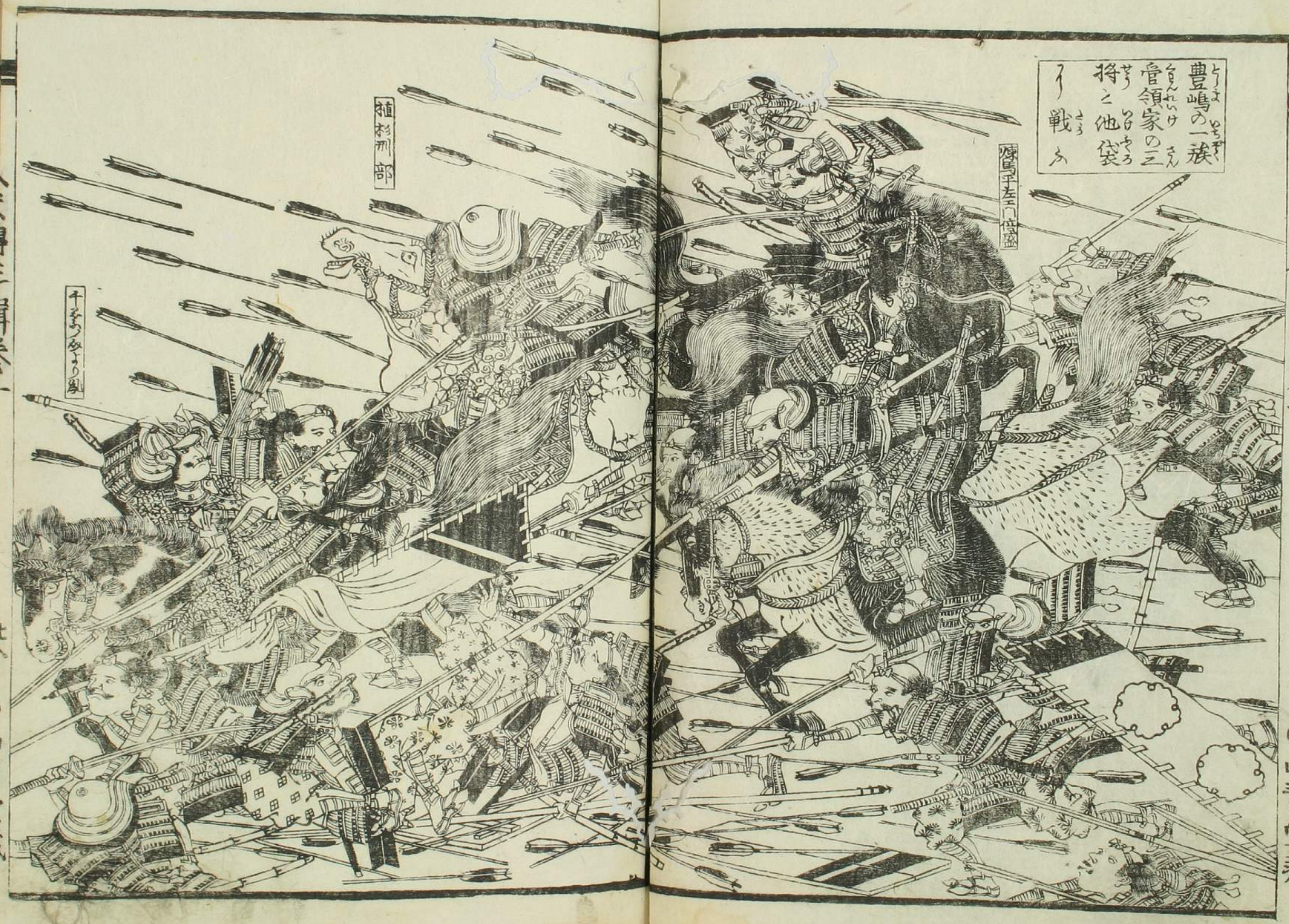
中。二餘平塚圓塚の一族。蔓火し。榮め。され舊家あり。信盛兄弟。その  
 初ハ兩管領小後ひ。小聊怒り。あつて。遂小胡越のあひをさせり。今小  
 こ。此管領山内家の老臣長尾判官平景春。越後上野兩國を伐。靡て  
 既小自主の志あり。よろしく豊嶋を相譚り。信盛立地小一味同意し。と  
 け。管領小後ひ。と。山内扇谷の兩管領。あひびく。小軍議を凝り。  
 敵の威勢微る。うち小先。と。豊嶋を討んと。文明九年四月十二日。巨田  
 備中。必持資。植杉刑部少輔。千乗。必自胤。小を大將あり。軍勢九千  
 餘騎。不意小發。と。ま。と。池袋。ま。推寄せ。豊嶋。が。由。小。  
 敵寄。と。へ。ひ。後。一族。い。れ。在。小。鎧。被。け。馬。騎。走  
 ら。彼此。より。集會。と。搦。大將。信盛。の。一陣。小。煉馬。平塚。圓塚。乃。軍。兵。合  
 せ。と。二百餘騎。江古田池袋。小。馳。向。ひ。と。関。を。咄。と。あ。り。と。征。箭。を。射。る。

豊嶋の一族  
管領家の三  
將之他袋  
不戦ふ

塚馬子左門盛盛

植木三郎

千早の敵討の旗



八代傳三轉卷一

千早の敵討の旗

後、そのれ西軍入寮れ遣違、（敵を）撃れつ火花をちりちりして、（日）日わたり戦ふ  
 う。豊嶋小勢あるにけしきも、（初）初度の戦ひ小千葉植杉を殺崩とて、（頻）頻小提小  
 の乗るものも、（更）更不用意め、（腰）腰兵糧を推し、（士）士率漸く小飢渴小勞れ、  
 引退くんとする程、（寄）寄りの大将備中ぬ持資、（麾）麾くち揮く味方を激し  
 短兵急攻立、（豊）豊嶋が、（辟）辟易しく、（敵）敵をその數瓜を、（千）千原植  
 杉も、（小）小氣成ゆる、（魚）魚鱗は備へ、（十）十文字小駝散し、（息）息を吻せ、（接）接する  
 け、（豊）豊嶋の士率八算を素、（悉）悉砍伏ら、（刺）刺信盛倍盛と、（乱）乱軍の  
 中、（勢）勢い成揃らむ、（一）一族郎黨数を、（彈）彈しく、（舊）舊家忽小亡び、（多）多とこれよりて  
 世間且く静まき、（菅）菅菰大塚の里を、（中）中入の、（の）の、（穩）穩ち、（移）移り、（又）又只墓  
 六龜篠ホ、（と）と、（成）成幸ひの、（る）る、（小）小、（か）か、（て）て、（子）子、（の）の、（婚）婚姻、（今）今茲、（は）は、（心）心

難、（と）と、（明）明年、（波）波風、（か）か、（さ）さ、（ら）ら、（必）必濱路を、（妻）妻、（ハ）ハ、（信）信乃、（小）小村、（長）長を、（諒）諒んと、  
 里入、（ホ）ホ、（も）も、（よ）よ、（を）を、（告）告、（且）且、（一）一鬼を、（逃）逃れ、（り）り、（さ）さ、（ま）ま、（六）六、（亦）亦墓、（六）六、（が）が、（養）養女、（濱）濱路、（ハ）ハ、（九）九歳  
 の比、（より）より、（二）二親の、（口）口づ、（信）信乃、（ハ）ハ、（夫）夫、（よ）よ、（汝）汝、（ハ）ハ、（婦）婦、（よ）よ、（と）と、（い）い、（難）難、（一）一、（言）言葉、（葉）葉、（花）花、  
 実ると受て、（海）海士、（が）が、（没）没む、（る）る、（ま）ま、（と）と、（ろ）ろ、（つ）つ、（死）死し、（り）り、（よ）よ、（小）小、（恥）恥しく、（飲）飲、（く）く、（そ）それ、（ハ）ハ、（の）の、（小）小  
 その人、（は）は、（お）お、（し）し、（ら）ら、（も）も、（樂）樂しく、（て）て、（心）心、（小）小、（入）入、（し）し、（仕）仕、（さ）さ、（と）と、（介）介、（も）も、（彼）彼、（二）二親、（ハ）ハ、（養）養ひ、（女）女、（と）と、（い）い、  
 よ、（を）を、（濱）濱路、（ハ）ハ、（告）告、（も）も、（さ）さ、（と）と、（只）只、（生）生、（三）三月の子、（の）の、（と）と、（く）く、（は）は、（る）る、（と）と、（穴）穴、（竊）竊、（小）小、（生）生、（る）る、（の）の、  
 ありて、（実）実の親、（ハ）ハ、（煉）煉馬の家臣、（某）某、（と）と、（い）い、（の）の、（ゆ）ゆ、（と）と、（同）同胞、（も）も、（あ）あ、（る）る、（よ）よ、（を）を、（濱）濱路、（ハ）ハ、（灰）灰、  
 傳、（仲）仲、（ハ）ハ、（年）年、（十）十、（三）三の、（比）比、（る）る、（と）と、（ま）ま、（と）と、（そ）そ、（の）の、（あ）あ、（は）は、（現）現在の、（親）親、（達）達、（ハ）ハ、（入）入、（ハ）ハ、（愛）愛  
 る、（と）と、（口）口、（ハ）ハ、（公）公、（ハ）ハ、（表）表裏、（中）中、（傷）傷、（小）小、（人）人の、（ま）ま、（を）を、（折）折、（は）は、（さ）さ、（も）も、（る）る、（は）は、（る）る、（の）の、（成）成、（罵）罵、（辱）辱、  
 捺、（と）と、（見）見、（せ）せ、（く）く、（撮）撮縮、（と）と、（推）推、（れ）れ、（と）と、（た）た、（ら）ら、（ま）ま、（ぐ）ぐ、（な）な、（り）り、（は）は、（そ）その、（字）字、（の）の、（思）思、（浅）浅、（ま）ま、  
 わ、（と）と、（現）現、（生）生、（さ）さ、（ぬ）ぬ、（親）親子、（を）を、（り）り、（い）い、（も）も、（悲）悲、（し）し、（た）た、（め）め、（は）は、（る）る、（抑）抑、（が）が、（実）実の、（親）親、（ハ）ハ、（煉）煉馬

殿の家臣ゆく。何とゆゑ人か入又同胞もあつたといふ。こがるゆを兄  
 弟軟姉もあつた。軟妹さへありや。やと人傳小回より絶て涙の袖を親  
 兄せき親をあひかたう。筑紫の果るぬ故郷ハ三里小足とゆへく  
 ちるあれどもこがるぬ。鞍馬の九折たると近く遠れ物ぬ。春の儲  
 牽き馬の背がす。土蘿蔔煉馬とゆへ。恋しは。多ひひけ。夏  
 倍々今茲煉馬家滅亡。一族豊嶋平塚ハ。後類士率大。こがる  
 撃れ。とゆへ。一。横路ハ。良。と。ち。さ。か。つ。こ。あ。ん。ん。こ。が。る。親  
 兄弟も脱きあつた。あは母。人の。ち。ゆ。軟。婦。女。子。ハ。助。け。ら。る。た。る。べ。く  
 とも。襦。袢。の。中。より。養。れ。因。恩。愛。を。化。小。や。ち。さ。か。つ。た。あ。つ。さ。つ。と。日。ハ。足。派。も  
 あり。親。胞。兄。弟。の。あ。り。を。所。小。ゆ。め。名。も。あ。つ。た。その。陣。殺。の。迹。を。も。吊。か



八犬傳三轉卷一

犬塚信乃

とるぬハ身印ハ小係ハ過世の悪報歎きて何と存人とむろ小啼音憚る  
白刃の草虫唧つや袖の露乾く位良人小んま下とる厚ま化粧も朝霜  
の解るぬハ涙入るる程小濱路ハつくと心の中愛中うとみまど右と  
又ても左をりても相譚ふれ人ハあま吾侪の為更犬塚ののまど昏烟ハ  
せさむらひ幼なり二親の詩一多ひ夫也そその心ご多精悍く浮くま  
一息のよ小憑れ人といつれば為の憂るを明く地小告てその智を借らん  
更実の親の姓名もその存亡もあよりありその陣殺の迹をいも  
為小吊多るるあま思ふので告入とまのびく小人ま折と突ふ  
有一日信乃ハ子舎小籠ま独札ハ臂を倚り訓読集を流てその濱路ハ  
穴竊く飲びく足を翹ほり小いあま抱らんとる程小怖くあまめあ  
路ハ吐嗟と走り出るとこれ彼の足音小信乃ハ小あめて見えは後よあま

龜條ハ當下信乃ハ札を搔遣り起迎んとつとまも龜條ハ隔亮と用る  
隨小裡面より入るる走り餘る濱路ハ背を訴け小目送るや信乃よ和  
敬も豫てあまも糠助阿爺が長死病著昨け小いと危く湯液も咽喉小  
下とと四鄰の人小今やむいハ和敬が宅小鄰りて親く交参らるめれば  
息の内小今トとびアもあといめとるそが花井のるるまハ醫師の藥礼ハと  
のり飲いられれ貧人小親め徳ハえつとあま益ととあまあまあま  
告るえ訪んとあま疾ゆれ移といめ小信乃ハうち敬馬死そ苦ミれろ小侍り往小  
安否を問いとれさまで小いんえさりりり齡六十小餘る人の時疫あれ心け  
とく往てかへゆくと心と馳て刀を引提起をいりて龜條ハ納戸の之赴きり畢竟  
糠助犬塚信乃小對面しとるあまのり送せるその次の卷小解分るをいりてま  
里見八犬傳第三輯卷之一 終

南總里見八犬傳第三輯卷之二

東都 曲亭主人編次

第廿三回 犬塚義遺託を諾く

犬塚信乃成孝ハ伯母夫犬塚暮六ガ家ニ移居シヨリ。嫌忌の中、小日  
 弥リ年を送レバ、里人ガ多ク親クモ拘ルレド、只彼百姓糠助ノモ、舊馴  
 傑ト伯母モ許シテ、信乃ガ故ト疑フモ、その性愚直ラレハ、現この老人ハ  
 信乃ガ為メ、不言棄敵シ、その為メ、思ハル隨偽ラレド、よろづ小實意、あ  
 められバ、信乃ハ、その本訥ノ仁、小ち死を愛シ、その門邊を過リ、日ハ、  
 安否を向ヒ初メ、かゝるモ、文參ケリ。かゝる、招小糠助ガ女房ハ、去歲ノ秋、  
 長死病著ル、け、小究、寒家小、あるレハ、果ハ、藥價續、このと、

八犬傳三輯卷之二

山青堂藏

信乃ハ糠助ハ圓金一両を贈與ス。藥料の資ふまゝなり。あつれども。墓六龜  
條ホハこれをもちきこむ。信乃が今あり。これらの貯禄あり。ハ父番作が  
送せる。番作貪かり。かど刃さうり。後ハ父ハ不鑑櫃の底ハ圓金十兩  
あり。この金三ツが。一ツハ。こが。花井の。ふ充よ。その他ハ竊ハ腰ハ纏て刃の  
又友の。ふ肝要の。ふ。用ひ。書送。亦。是。後。の。後。を。慮。り。  
親の恩戴。金ハ湯と沸。人涙と共。袖ハ藏。龜條ホハこれを告む。貯  
禄ありや。と。向。ま。う。れ。その。金。三。兩。を。出。棺。擲。墓碑の料。又。父。の。二十  
五日を吊ひけ。宵。復。一。兩。を。伯。母。小。流。與。法。筵。酒。食の料。と。せ。り。墓  
六。由。龜。條。も。これ。ら。の。金。三。兩。我。を。折。る。有。り。や。と。向。ま。う。れ。是。の。と。と  
答。一。う。い。は。と。思。ひ。つ。の。後。ハ。向。ま。う。り。か。こ。の。七。八。年。伯。母。夫。婦。と。同  
居。ま。あ。ま。彼。番。作。田。八。名。の。と。ゆ。く。こ。が。あ。る。え。え。あ。る。こ。こ。ま。あ。る。舊。衣。を

の被せ。不自由。と。い。ひ。つ。の。後。ハ。向。ま。う。り。か。こ。の。七。八。年。伯。母。夫。婦。と。同  
遺財を減ら。と。と。か。い。ま。れ。も。彼。糠。助。ハ。こ。が。大。と。四。郎。が。の。小。就。く。真。愛。を  
俱。せ。一。日。も。あり。け。り。その。艱。難。を。救。ふ。我。只。彼。小。負。く。と。す。ろ。ろ。と。ふ  
思。ひ。と。く。竊。小。金。を。贈。一。ハ。糠。助。夫。婦。ハ。感。涙。を。禁。め。あ。く。と。只。管。信。乃。と  
伏。拜。と。て。その。信。義。を。賞。嘆。一。茶。劑。を。求。く。用。ひ。つ。と。も。定。業。あ。れ。バ。あ。や。  
その。妻。ハ。た。う。ち。あり。ぬ。れ。ま。る。ふ。今。茲。七。月。の。比。よ。り。糠。助。亦。時。疫。ま。く。う。ち  
臥。せ。よ。り。頭。揚。を。と。流行。病。ハ。傳。染。を。懼。ま。く。人。大。々。ふ。う。り。け。と。と。ま。あ。る。も  
信。乃。ハ。あ。の。び。く。小。糠。助。が。宿。野。小。の。ゆ。れ。湯。液。を。煎。じ。食。更。を。勸。め。又。こ。が  
暇。あ。れ。時。ハ。額。藏。は。あ。ろ。ゆ。と。竊。ま。これ。を。遣。し。看。と。ま。る。日。も。あり。け。ふ。  
今。その。病。危。一。ハ。龜。條。が。告。一。ハ。信。乃。も。と。ろ。め。取。あ。む。處。一。ハ。い。ぢ。て  
ん。ふ。邪。熱。中。う。る。裏。小。入。と。り。乱。し。る。る。は。る。け。と。と。その。衰。日。ふ。あ。り。

八ノ書三ノ章二ノ  
二

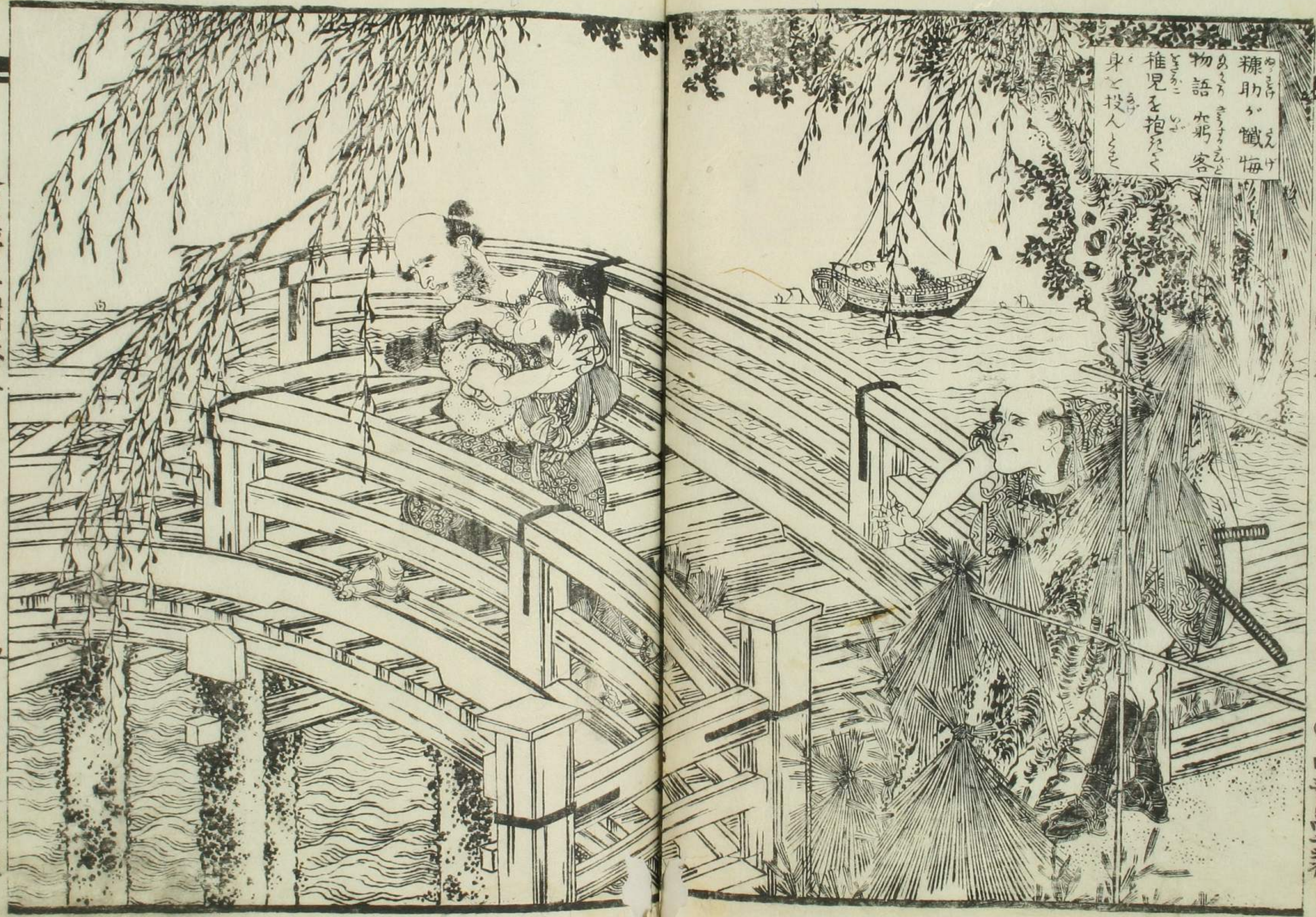


ころ枕方小膝を進めく心地ハハ小糠助阿爺信乃が来くゆハとゆふ  
 臥し熟視く起るあんとほろろかろふといと苦しげうち咳き犬塚  
 ぬよぞ来まき。年来日ハ後懇小愛憐被くあつり。報ひゆせむ  
 別ふるぬ某今茲ハ六十一歳女房ハ後まじり。貯禄もあ。氏族も  
 る多ハ後まじり。似まじり。心かりが只むら。といひあむさ。塞く。  
 痞小息をとむむ信乃ハむを中湯液を煖め。只管小勸。小糠助  
 咽喉を潤く。心かりハ在りゆ人ハ告さる。子の子の。某原ハ安  
 房園洲崎のほろろの土民あり。耕作と漁獵とふ。かゆて世と流るふ  
 長禄三年十月下旬先妻小男児出生く。玄吉と名つけり。いと健  
 けんえ。小母ハ産後の倦ハ肥まむ。乳小乏かり。是ハ兒ハ脾瘕の病つて  
 母の看病。その子のぬ抱耕作細引を外み。とや二と母ふり。ハ物大ハ

售彈。刺女房ハ遂小むる。くなり小けり。迹ハ残る。借錢と。この年僅小  
 二歳の稚児。かむむろ。ハ字。か。の。を。養。人。も。か。と。度。幾。へ。と。由  
 賞乳の。辛く育る。稚児。ま。瘦。脆。ひ。餓。鬼。の。如。養。三。月。後。を  
 贈ら。貫人。とい。小。人。の。ま。け。と。ハ。せん。ま。盡。る。出。来。あ。ろ。洲。崎。の。浦。ハ。霊  
 地。と。く。伎。行。者。の。窟。あ。ま。殺。生。禁。断。せ。れ。たり。この。故。小。ハ。鱗。其。処。こ  
 集。り。て。細。代。る。れ。生。洲。小。似。り。竊。ハ。細。を。下。さ。る。ハ。一。夕。み。と。数。貫。の  
 銭。を。獲。る。と。易。し。と。思。ひ。く。偽。り。く。稚。児。と。霎。時。鄰。家。小。豫。け。く。鳥  
 夜。小。紛。と。く。彼。禁。断。所。ハ。舟。漕。入。り。て。曳。鯛。ハ。む。か。さ。る。と。終。と。人。小。あ。り  
 れ。く。忽。地。と。捕。ら。れ。國。守。の。廳。へ。牽。れ。小。り。脱。る。べ。れ。路。の。ま。れ。ハ。柴。漬。の。刑。と。定。れ  
 且。く。獄。舎。小。繫。れ。小。折。ゆ。よ。く。その。杖。ハ。國。守。里。見。殿。の。奥。さ。る。五。十。子。の  
 上。及。む。愛。女。伏。姫。の。三。回。忌。と。當。ら。せ。る。ハ。俄。頃。小。大。赦。を。行。き。く。

吾侪も死罪を宥られ歸く追放せらるる日廻守のめん慈悲心より村  
長小領れらる小児玄吉を返下させたり々々六鄙言ふ小難有迷  
憐己工を得む稚児を負り抱つ安房を追上總を過る下  
總より行徳まぐらつ途の艱難乞食熟後親も子も飢勞れて  
せんまをそを役行者の惜せむゆ鱗を渾り一冥罰はる厚かくて中  
脱とぞ途小休も死恥を曝んより親子共侶身を投るをよを  
らめと思決めて名ゆらぬ橋の欄干小足を踏み跳没んとする  
折武家の飛脚とぞ死人件の橋を渡しかりと遠く抱れ禁め推引  
居る懇も縁故を問れらる懺悔のみ恥を忍びて一五一と告ゆふ  
るんその人ゆらぬ憐れ原來汝ハ素より悪人ゆらぬけり。これハ  
鎌倉殿足利成氏の御内ゆら小禄卑職のめらる下も聊慈善の志願

あり。その故ハ年今四十餘るまで子ハ奉あが子三月あり。こぼ年  
夫婦心を立あふ。神仏を祈念し奉り又小稱あふれりハ人乃  
艱苦を救んと心小誓ふゆありぬ命ふ汝ハ殊より一子をわく  
あり。親子ほく死んとせらるる。浮世え然らばその子を日れよ  
ゆせよ。ともかくもさる養人とよ小懇く。つれり。その時の委息  
絶くとも。ぬる。説盡さるも察し。地獄で逢。仁神歎と  
多ハ更。一議。及が。そが。小兼引く。只感涙を推拭へ。彼人  
か。これハ敷のめん飛脚もて安房の里見へ赴れ。か。さ。れ。  
私小稚児を推り。この。り。定宿あり。家あり。相譚。且く  
その子を預け置鎌倉へ。妻の女ゆ。告日。これ。一  
迎。入。その子ハ焦悴。武藏。神奈川。小児五疳



糠助の懺悔  
物語の客  
稚児を抱く  
身と投入と

八代三軒巻一

八代三軒巻二

五

○山崎屋蔵

○山崎屋蔵

の妙茶あり。これを用ひば、效驗あり。既に親子と云ふ人あり。これ等、同小  
 字云月人や。けり。後中をく。志さう。あふ。と。赴たね。と。喻。つ。  
 路費。おせよ。と。懐中。ある。方。金。二顆。より。出。各。餉。の。料。は。軟。腰。は。纏。と。  
 割。籠。と。共。は。賜。し。ふ。辞。さ。る。小。う。あ。受。納。め。重。く。の。恩。義。を。謝。し。く。  
 玄。吉。を。賺。あ。り。久。遠。と。甘。み。を。抱。た。り。く。舊。來。の。か。え。立。房。と。つ。  
 つ。と。入。送。り。さ。る。款。く。も。悲。し。く。て。是。あ。る。親。子。一。生。涯。の。別。あ。れ。ば。も。養  
 親。の。名。を。も。は。回。り。ご。と。も。名。生。り。ご。と。あ。ふ。る。あ。く。恩。愛。の。重。荷。を。ふ  
 ち。り。て。も。竭。ぬ。名。残。の。葛。飾。の。行。徳。潰。り。便。船。し。く。江。戸。の。津。小。妙。た。り。  
 聊。相。識。る。人。あ。ら。ぬ。この。大。塚。は。流。と。ま。く。農。家。小。奉。公。さ。る。程。よ。その。冬。和  
 君。ハ。生。ま。れ。た。り。か。く。次。の。年。この。家。の。先。住。る。初。七。と。い。ふ。め。の。方。ち。り。て。  
 後。家。小。八。夫。を。招。り。と。あ。る。人。小。媒。め。せ。し。れ。その。名。跡。を。續。け。る。も。一。十

瓢。ハ。何。で。も。一。斗。年。中。未。進。を。債。ら。れ。く。水。飲。め。ぬ。瘦。百。姓。人。ハ。嗚。呼。  
 白。物。と。賤。し。め。ら。し。て。も。腹。く。も。故。郷。で。醸。せ。禍。ハ。貧。の。盜。の。台。あ。れ。心。を  
 切。く。食。う。ご。只。正。直。を。宗。と。し。朝。あ。く。ふ。を。合。せ。小。角。さ。る。罪。障。と。  
 勸。解。さ。る。由。十。八。年。その。毎。月。の。會。日。ハ。塩。鯛。で。も。箸。あ。ら。わ。け。ご。其。精。進。も  
 年。數。送。り。誰。が。玄。吉。ハ。恙。さ。る。生。育。か。人。あ。ら。ぬ。の。人。小。あ。れ。願。ふ  
 め。う。く。去。歳。分。ち。り。妻。小。告。さ。る。子。の。人。を。今。臨。終。口。走。り。和  
 君。小。告。さ。る。九。庸。さ。る。ぬ。信。美。を。豫。さ。る。さ。る。り。か。り。と。く。風。を。追。ひ  
 影。を。捕。り。る。果。敢。さ。る。子。の。人。を。さ。る。あ。ら。ね。と。鎌。倉。の。前。官  
 領。家。持。氏。成。氏。を。ハ。番。作。ぬ。の。主。筋。さ。る。さ。る。や。され。バ。亦。成。氏。朝。臣。ハ。兩。管。領  
 山。内。顯。定。ぬ。扇。谷。定。正。ぬ。と。不。和。あ。り。鎌。倉。の。お。ん。住。ひ。か。あ。ら。せ。め。ら。ご。  
 許。我。の。城。小。根。と。せ。玉。ひ。其。如。を。追。て。迫。し。ろ。ハ。千。葉。の。城。さ。る。ま。あ。ら。ご。

世の風俗は傳へたり。あつぱら子玄吉もその養親も役も後ひ下總千  
 葉ふあふんきとん和君の許我殿成氏をへまひ玉のありきその便宜を  
 りて玄吉を識るとあふこれらのをおのの借申ふ傳へくごご子ハ其の  
 親あるよをおのの是非をか灰は傳へくするあふ此ハ心ふかる  
 べしや目今環會とも親子込面忘とく名告よはあふざめど  
 渠ハ生れあふめと右の頬尖又痣ありて形牡丹の花ふ似たり又渠が  
 生とる七夜も祝たのるあふ釣せ鯛を庖丁とるあふ魚の腹小玉  
 あふ文字のふれめえとる取る産婦は讀せよこれまとる訓む  
 信の字ふ似るやとるあふ渠が脰帯ゆる共護身囊ふ納め  
 長祿三年十月廿日誕生と安房の住民糠助が子玄吉が初毛脰帯  
 並は感得秘藏の玉と母がふがうう写しつけるあふ國字ふく釘乃折

曲りあるよも讀めべし渠物情を知る比まぐ失いども今かのわあ  
 これらを證據はまひてよ紛れあふくもあふどのあふ益あたるのふ  
 了を傷痛くはれけめ今朝まの舌強りくこれ程は抱ひられざりよ  
 今和君が面をこく心地清くく見るも燈將ふ滅んととる光と倍の  
 類あふ末途なる弱冠ふとるあふ勉くあふ跡多うとのひら頬ふ落  
 涙をいふ賢者の言の葉ふ鳥の將は死んととるとれその鳴とあふ  
 人の將は死んととるとれそのいふと善とりの糠助が今般の辞も生平  
 少く大くまをりてありれ賢くやえたり信乃ハ彼玄吉が痣の玉の  
 こそが力ふ多ひあはせり大さるる感嘆一噫阿爺よあろぬさけの  
 多くくまをりて素生恨と改めろ年未の深信精進人及ぶるふふん  
 加旃子息のふふと暗合とるあり過世の契りと見えればとんぬ

兄のさちもさち折をぬ下總へ赴た。その宿所を素人の養父の姓名と  
 考へていふも證據なく分明なれば環會するところあり。これらと  
 念とせど、まづ湯劑を用ひ夜由まき看病せまほしけれと親類小  
 寄宿をたれば、いふ小任せぬるまき。され下とび諾する辞ハ金石不改  
 り。ちろやとて思ひ多と応つるはさあしく小勅を慰めたりけれハ糠  
 助ハ堂をもち合しと拜むの哀情宵月小塞りてや復りふるとあうり  
 けり。かくてや黄昏小なるまふけは信乃ハ行燈の火を点し再び湯劑を  
 勧めふと別を告ぐ宿所小還り。その夜額藏小の糠助が送言の  
 よを物かたり。玄吉が痣の玉のりを告ふけは額藏小の敬驚嘆し  
 こと必吾黨の人と疑ひる。この刃が随はたるる今ふ其処へ  
 赴た。見まほしくと密詰めと立別と詰朝と起。糠助は

とせぬその近鄰の莊客詰まき。糠助ハこの曉小刃かりたるよと告ふ  
 けは信乃ハ殊さふこれを悼みてまづ墓六は説勧め永樂錢七  
 百文貸與。その夜道場へ棺を送らせ日子歴。その家と售と死小  
 件の七百文を返し納させ。残る錢と最禰ある田圃ハ彼道場へ寄進  
 せし。糠助夫婦が代々の香花の料めたりけり。このる莊官墓六が  
 計ひてその鄰人小指揮せし。實ハ信乃が墓六は説勧めたるよと誰  
 のふとる。僉知り。この人莊官とていふ。慈悲善め下を伸云る。これ  
 らが為の父母あり。とて代りあう。といふざるめハたるとけり。不題管領  
 家の退糧人小細乾左母二郎といふ壯伎ありけり。近江比まて扇谷修理  
 大夫定正は仕く扈後。便佞利口のめるとはトとびハ寵用せられ。こ  
 人を成んとヨかり。よけて傍輩小強訴せられ。忽地小その非を覺れ

軀<sup>やが</sup>追放<sup>おろ</sup>せられけり。そが又母<sup>ちち</sup>ハ往<sup>ま</sup>ふ世<sup>よ</sup>を逝<sup>さ</sup>す。のまご妻子<sup>やう</sup>もあふごご遠<sup>とほ</sup>  
 縁<sup>えん</sup>のみのをよふ大塚<sup>おほつら</sup>の郷<sup>さと</sup>ハ流<sup>なが</sup>浪<sup>なみ</sup>ひまの糠<sup>ぬか</sup>助<sup>すけ</sup>が舊<sup>ふる</sup>宅<sup>たく</sup>を購<sup>かひ</sup>得<sup>え</sup>る形<sup>かたち</sup>の  
 五<sup>い</sup>膝<sup>ひざ</sup>を容<sup>ゆる</sup>る。さしハこの左母<sup>さま</sup>二郎<sup>にらう</sup>ハ今<sup>いま</sup>茲<sup>こゝ</sup>二十五<sup>にじゅうご</sup>歳<sup>さい</sup>あり。面<sup>おもて</sup>も素<sup>すく</sup>く眉<sup>まゆ</sup>  
 目<sup>め</sup>秀<sup>ひで</sup>る。鄙<sup>ひび</sup>も稀<sup>まれ</sup>なる美<sup>み</sup>男<sup>おとこ</sup>なり。迹<sup>あと</sup>ハ大師<sup>おほし</sup>様<sup>さま</sup>とんえて草<sup>くさ</sup>書<sup>かき</sup>拙<sup>つた</sup>を  
 加<sup>か</sup>禰<sup>ね</sup>遊<sup>あそ</sup>藝<sup>ぎ</sup>ハ今<sup>いま</sup>様の<sup>よ</sup>艶<sup>えん</sup>曲<sup>きょく</sup>細<sup>こ</sup>骨<sup>ほね</sup>鼓<sup>つづみ</sup>一<sup>ひと</sup>郎<sup>らう</sup>切<sup>き</sup>る。ど目<sup>め</sup>ひうう多<sup>おほ</sup>くといふ  
 大塚<sup>おほつら</sup>番<sup>ばん</sup>作<sup>さく</sup>り。後<sup>のち</sup>里<sup>さと</sup>ふる跡<sup>あと</sup>の師<sup>し</sup>匠<sup>じやう</sup>たけし。左母<sup>さま</sup>二郎<sup>にらう</sup>ハ毎日<sup>まいにち</sup>  
 目<sup>め</sup>子<sup>こ</sup>を集<sup>あつ</sup>め生活<sup>せいかつ</sup>と。又<sup>また</sup>女<sup>め</sup>の子<sup>こ</sup>ハ歌<sup>うた</sup>舞<sup>まひ</sup>今<sup>いま</sup>様<sup>さま</sup>を誨<sup>おし</sup>る。浮<sup>うき</sup>き技<sup>わざ</sup>と  
 好<sup>この</sup>む。都<sup>みやこ</sup>も鄙<sup>ひび</sup>もまゐる。迹<sup>あと</sup>ハ小<sup>こ</sup>す。遊<sup>あそ</sup>藝<sup>ぎ</sup>の弟<sup>あな</sup>子<sup>こ</sup>日<sup>ひ</sup>々<sup>びび</sup>取<sup>と</sup>りあふ。  
 打<sup>うち</sup>囃<sup>ばし</sup>舞<sup>まひ</sup>ハ程<sup>ほど</sup>ハ見<sup>み</sup>首<sup>くび</sup>の少<sup>せう</sup>女<sup>によ</sup>彼<sup>か</sup>首<sup>くび</sup>の嬌<sup>せう</sup>婦<sup>ふ</sup>と仇<sup>あだ</sup>ある名<sup>な</sup>立<sup>た</sup>ちもあれど。  
 龜<sup>かめ</sup>條<sup>じょう</sup>ハころれ時<sup>とき</sup>より。漫<sup>ま</sup>好<sup>この</sup>む技<sup>わざ</sup>ある。左母<sup>さま</sup>二郎<sup>にらう</sup>かる。いハ。と。夫<sup>おとこ</sup>  
 夫<sup>おとこ</sup>執<sup>と</sup>成<sup>なり</sup>ふより。渠<sup>ち</sup>を憤<sup>い</sup>る。めあ。と。人<sup>ひと</sup>ども墓<sup>はか</sup>六<sup>む</sup>ハ使<sup>つか</sup>うぬ態<sup>たい</sup>。と。遂<sup>つい</sup>ハ  
 細<sup>こ</sup>乾<sup>けん</sup>を追<sup>お</sup>さる。けり。か。その年<sup>とし</sup>の終<sup>はつ</sup>り。城<sup>しろ</sup>主<sup>ぬし</sup>大<sup>おほ</sup>石<sup>いし</sup>兵<sup>へい</sup>衛<sup>ゑ</sup>尉<sup>じ</sup>が陣<sup>ちん</sup>代<sup>だい</sup>兼<sup>かね</sup>  
 蛇<sup>へび</sup>太<sup>おほ</sup>夫<sup>おとこ</sup>といふ。め。身<sup>み</sup>ま。り。次<sup>つぎ</sup>の年<sup>とし</sup>五<sup>いつ</sup>月<sup>げつ</sup>の比<sup>ひ</sup>蛇<sup>へび</sup>太<sup>おほ</sup>夫<sup>おとこ</sup>が長<sup>なが</sup>男<sup>おとこ</sup>兼<sup>かね</sup>上<sup>じやう</sup>宮<sup>みや</sup>六<sup>む</sup>七<sup>しち</sup>  
 父<sup>ちち</sup>の職<sup>しやく</sup>禄<sup>ろく</sup>を賜<sup>たま</sup>ふ。新<sup>あらた</sup>陣<sup>ちん</sup>代<sup>だい</sup>ハな。ふ。け。ハ。その属<sup>ぞく</sup>役<sup>やく</sup>軍<sup>ぐん</sup>本<sup>ほん</sup>五<sup>ご</sup>倍<sup>ばい</sup>二<sup>に</sup>率<sup>そつ</sup>川<sup>がわ</sup>  
 菴<sup>いん</sup>八<sup>はち</sup>ホと共<sup>とも</sup>。縣<sup>あま</sup>の若<sup>わ</sup>黨<sup>とう</sup>奴<sup>に</sup>隸<sup>れき</sup>を。彼<sup>か</sup>此<sup>こ</sup>を巡<sup>めぐ</sup>檢<sup>けん</sup>。その夜<sup>よ</sup>ハ。莊<sup>せう</sup>官<sup>くわん</sup>墓<sup>ぼ</sup>六<sup>む</sup>  
 許<sup>ゆる</sup>止<sup>と</sup>宿<sup>しゆく</sup>。と。け。墓<sup>はか</sup>六<sup>む</sup>ハ豫<sup>よ</sup>て。饗<sup>けう</sup>食<sup>じやく</sup>膳<sup>ぜん</sup>の准<sup>じゆん</sup>備<sup>び</sup>。て。佞<sup>ねい</sup>媚<sup>めい</sup>賄<sup>わい</sup>賂<sup>ろ</sup>。と。い。ふ  
 と。と。勸<sup>かん</sup>盃<sup>さい</sup>と。て。礼<sup>れい</sup>小<sup>せう</sup>過<sup>か</sup>。折<sup>せり</sup>ハ。庚<sup>かう</sup>申<sup>しん</sup>なり。け。ハ。龜<sup>かめ</sup>條<sup>じょう</sup>ハ夫<sup>おとこ</sup>ハ勸<sup>かん</sup>え。と。  
 細<sup>こ</sup>乾<sup>けん</sup>左<sup>さ</sup>母<sup>ぼ</sup>二<sup>に</sup>郎<sup>らう</sup>を招<sup>まね</sup>よ。せ。庚<sup>かう</sup>申<sup>しん</sup>守<sup>まも</sup>り。假<sup>かり</sup>托<sup>たく</sup>。歌<sup>うた</sup>曲<sup>きょく</sup>の遊<sup>あそ</sup>樂<sup>がく</sup>を催<sup>もよほ</sup>さ。小<sup>せう</sup>女<sup>によ</sup>兒<sup>じ</sup>  
 自<sup>みづか</sup>慢<sup>まん</sup>の癖<sup>くせ</sup>。ハ。濱<sup>はま</sup>路<sup>ぢ</sup>。ハ。殊<sup>こと</sup>更<sup>さら</sup>。花<sup>はな</sup>ハ。中<sup>なかつ</sup>た。方<sup>かた</sup>の。羅<sup>ら</sup>衣<sup>い</sup>被<sup>ひ</sup>せ。と。り。た。く  
 その席<sup>せき</sup>小<sup>せう</sup>侍<sup>じ</sup>。せ。或<sup>ある</sup>ハ。酌<sup>しやく</sup>を執<sup>と</sup>らせ。又<sup>また</sup>洗<sup>せん</sup>紫<sup>し</sup>琴<sup>ぎん</sup>を奏<sup>そう</sup>させ。左<sup>さ</sup>母<sup>ぼ</sup>二<sup>に</sup>郎<sup>らう</sup>ハ。例<sup>れい</sup>ハ  
 艶<sup>えん</sup>曲<sup>きょく</sup>を誦<sup>よみ</sup>せ。と。と。く。血<sup>ち</sup>。ハ。そ。え。小<sup>せう</sup>侍<sup>じ</sup>。濱<sup>はま</sup>路<sup>ぢ</sup>ハ。か。席<sup>せき</sup>小<sup>せう</sup>侍<sup>じ</sup>。り。て。ん。も。せ。ぬ  
 人<sup>ひと</sup>ハ。小<sup>せう</sup>馴<sup>じゆん</sup>。く。物<sup>もの</sup>を。い。ひ。け。れ。積<sup>つ</sup>細<sup>こ</sup>乾<sup>けん</sup>と。臂<sup>うで</sup>を。連<sup>つ</sup>ね。て。お。の。が。拙<sup>つた</sup>き。絃<sup>げん</sup>の。ま。り

人<sup>ひと</sup>ハ。小<sup>せう</sup>馴<sup>じゆん</sup>。く。物<sup>もの</sup>を。い。ひ。け。れ。積<sup>つ</sup>細<sup>こ</sup>乾<sup>けん</sup>と。臂<sup>うで</sup>を。連<sup>つ</sup>ね。て。お。の。が。拙<sup>つた</sup>き。絃<sup>げん</sup>の。ま。り

龜實客達不聽せん。信乃が思ふんとのをりて。心裏恥しき限りあるれ  
 とも。親の争ふべくもあまき。困りて。縛ひ一曲を奏つる。陣代兼上宮六ホハ  
 醉顔蕩けく燈燭と光をあらしむも愧む。眼と細く。潰路とわたり見  
 声を太く。その節奏と答ひ。扇を短く。拍を拍し。鼻下と  
 長く。涎の流るるを。長短細大我と忘る。賑然と笑ひ。この  
 ち。真今宵の管待ハ美酒のいま。美を盡さ。膳部もい。善と  
 盡さ。唯令弱の一曲の。玄の又玄。玄實僧都も。聴聞せ。墮落せん。  
 妙の又妙。妙音天女も。合奏せ。撥を投ん。吁有か。この音楽や。わりの  
 今の音楽や。訛声合。謡ふ。溜路ハ慚。且腹。其  
 此よ。堪む。散動。紛と。滅る。如く。退れ。さ。亦左母二郎ハ管  
 領家の退糧人。官六ホハ。鎌倉へ。在番せ。の。ハ。

浪子。虚辯。媚を。手。盃を。勸。又。秀  
 向を吐。笑ひを催。宮六ホ。稱。と。檀那と。唱。墓六と。大人と  
 稱。龜條を。奥方。給事。の。奴婢。を。娯。様。と。喚。び。下男。を。て。先生と  
 稱。呼。續。徳。操。る。是。輕。薄。兒。の。習。俗。あり。さ。か。り。乃  
 席。声。色。を。嗜。む。老。實。者。ハ。愚。形。が。如。し。彼。紂。王。が。比。于。を。り。て。不  
 肖。又。儻。忽。が。混。沌。を。不。具。と。思。ひ。こ。と。同。じ。か。信。乃。の。夜。さ。り。  
 子。舎。引。籠。く。燈。下。小。兵。書。を。繕。く。の。そ。の。席。小。入。な。も。墓。六。も  
 亦。互。代。同。じ。故。より。あ。り。あ。る。陣。代。の。信。乃。が。る。を。一。句。も。披。露。せ  
 ざ。り。か。く。鶏。鳴。曉。を。告。る。程。小。稍。盃。盤。を。とり。納。め。墓。六。ハ。宮。六。ホ。小  
 忝。と。敬。ひ。謝。し。更。早。飯。を。勸。る。宿。酒。い。ま。醒。ざ。れ。ハ。各。よ。く。と。食





八世八世

八世八世

十一  
山青堂藏



艶曲を  
催す墓  
六権家と  
管待と

ひろ宮六

ひろ宮六

ひろ宮六

ひろ宮六

八世傳三車卷二

山青堂藏

ほど。き度。彼此を巡る。三人。齊一。出れ。八。暮六。遠く。その後者。
 うら。難。村。盡。如。や。を。送り。けり。是。より。先。小。亀。條。日。待。月。待。の。折。
 觸。れて。細。乾。左。母。二。郎。を。招。え。り。豊。曲。を。聴。く。箱。小。左。母。二。郎。早。晚。小。濱。路。と
 着。て。思。ひ。を。售。一。人。目。の。團。然。あ。の。び。く。小。言。葉。の。露。を。結。ひ。か。け。く。深。う。き
 色。を。ん。せ。或。ハ。亦。鳥。の。跡。を。媒。灼。う。く。筆。は。お。を。ぞ。い。ら。せ。ら。る。う。あ。ら。う。の。を
 書。う。う。け。ん。濱。路。ハ。い。ふ。い。ふ。と。觸。れ。ど。て。い。と。い。さ。う。罵。辱。し。め。後。う。小。細。乾。が。あ。る
 毎。小。避。く。再。び。面。を。對。へ。て。現。人。の。性。を。う。り。習。ひ。う。も。う。さ。う。さ。う。け。り。され。ば。この
 少。女。ハ。その。心。を。親。ハ。似。む。行。ひ。よ。う。づ。み。貞。く。て。信。乃。小。親。の。口。づ。ら。豫。て
 許。せ。し。う。あ。れ。ども。それ。を。う。い。ま。ご。婚。姻。を。う。り。結。ぶ。夫。あ。れ。ば。送。小。親。
 お。り。り。を。況。く。浮。う。風。流。士。小。名。を。ま。ら。う。う。あ。ら。う。女子。の。恥。辱。この。う
 あ。ら。う。と。あ。く。念。じ。く。ま。ら。う。の。人。を。引。入。ま。る。母。親。と。心。つ。れ。あ。ら。う。い。う。

ち。ゆ。よ。り。敷。上。宮。六。ホ。が。止。宿。せ。り。夜。二。親。が。こ。り。あ。く。も。濱。路。を。給。仕。小。侍
 ら。く。左。母。二。郎。共。侶。よ。琴。よ。曲。子。と。暗。か。り。く。酒。宴。の。奥。を。そ。え。さ。せ。ら。る。
 い。と。朽。そ。く。あ。ら。う。の。人。の。諫。を。用。ひ。さ。る。親。の。氣。質。小。推。辞。さ。て。ま。ら。れ
 羞。へ。と。歎。え。り。稍。一。曲。を。奏。し。濱。路。ハ。か。の。と。く。あ。れ。ども。母。亀。條。が。て。あ。ら。
 異。り。亀。條。日。来。あ。ら。う。件。の。細。乾。左。母。二。郎。ハ。鎌。倉。武。士。の。浪。人。と。う。あ
 え。く。いと。愛。され。美。男。あ。り。果。が。い。ふ。よ。う。を。休。み。小。鎌。倉。小。あり。一。日。ハ。食。禄
 五。百。貫。を。宛。行。と。ま。る。も。近。習。の。首。小。知。と。ハ。殿。の。お。ん。寵。大。く。形。小。出。頭
 第一。あ。ら。う。成。り。く。傍。輩。あ。ら。う。媚。て。黨。を。樹。頻。小。諛。言。さ。ら。う。小。より。身。乃
 暇。を。賜。り。か。ども。原。是。殿。の。お。ん。志。小。あ。ら。う。か。れ。ハ。近。見。よ。召。返。さ。ら。う。死。所
 内。意。あり。この。里。の。僑。居。ハ。要。時。が。程。小。あ。ら。う。と。い。う。り。この。人。今。ハ。宴。さ。ら。う。と。も
 その。言。の。と。く。ま。ら。う。遠。く。ま。ら。う。帰。家。せ。ん。管。領。家。の。出。頭。人。を。吾。女。誓。小。招。ん

る。その時夫及び。今より情を被入る。後の栄利とあるとある。親の  
 心を子にまかす。鈍や濱路が只官小信乃を良人と思ひとりてや。婚姻と結ぶ  
 けある。裏切らんと入つけ。あり。可憐な女児を可愛氣のる。野小下口  
 態進て。田蛭小啜入ら。如く引放さ。血が血を洗ふ。後こそ痛ふ  
 ろ。ん。此よ由て彼を推す。細乾が濱路小意ありとも。後の害少る。む  
 濱路が信乃の情を寓て。久後入。憑く。又利を捨。男を取  
 と。左母二郎の美男あり。ゆ。迹愛く。遊藝。何暗く。音曲妙  
 これ粹中の粹。ろ。の。信乃と同日の論。あ。大年。吾侪  
 良人が。思業。ねん。か。濱路小信乃。成。ひ。絶。る。細  
 細乾。ふ。ま。め。あ。い。と。あり。ひ。世の嘲。も。里人。が。憤。ア。を。も。見。え。と。折。は  
 觸。事。小。托。く。ま。づく。細乾。を。招。れ。左母二郎の。懲。ま。ま。且。その。親。小

副馴。い。の。濱路。を。い。入。入。と。あ。あ。あ。の。色。日。え。と。要。財。系。の。の。あ。る  
 日。心。も。龜。條。小。招。る。ま。不。使。と。も。い。あ。う。う。う。の。あ。く。途。小。墓。六。は。逢。入。時。を  
 兩中。と。い。も。木。屨。を。脱。し。斗。米。の。為。あ。あ。と。と。折。る。腰。の。低。れ。バ。莊  
 官夫婦。は。只。願。ふ。その。佞。眉。ら。う。成。飲。び。て。貳。る。死。め。め。ぞ。あ。ひ。け。

第廿四回 軍木媒一と莊官小説く  
 墓六偽りて神官又漢を

却説陣代兼上宮六の裏小莊官墓六が女児濱路を眷憐てより。  
 恋心の慾火禁めか。て。寤。て。も。寐。て。も。忘。ら。ま。と。媒。約。も。か。か。と。め。ふ  
 氣色の坐小頭と。り。け。の。媚。と。勢。利。を。旨。と。し。る。そ。が。属。役。軍。木。五  
 倍。二。倍。入。る。折。を。見。て。官。六。の。人。多。い。あ。れ。バ。色。小。出。づ。色。小。出  
 且。人。も。あ。る。某。属。者。尊。公。の。氣。色。小。よ。る。と。く。既。小。その。意。を。察。す。

一の。その必墓六が女見する。濱路と申うんがるるまづ。槐門貴族の姫上  
 る。及び及ぶるもあざ。尊公配下の二柱官。その女見のく入たのら。ま  
 かなでふゆをを。及人の。娶。ま。と。あ。其。媒。約。仕。入。  
 下。び。言。を。傳。入。る。墓。六。飲。び。く。兼。引。べ。尊。意。如。何。と。密。語。官。六  
 莞然と。ち。笑。く。寔。和。敷。の。察。知。の。如。し。ま。濱。路。八。墓。六。が。一。女  
 あり。且。誓。う。ひ。も。あり。と。け。け。輒。く。ハ。兼。引。べ。う。ま。これ。の。故。思。之。成。思。入  
 多。う。ら。む。和。敷。怪。し。め。られ。と。い。び。五。倍。二。小。膝。を。進。め。ま。ま。の  
 尊。公。遠。慮。は。過。り。墓。六。配。下。の。柱。官。倒。え。と。も。起。入。と。も。公。乃。成  
 ころ。む。ふ。あ。ん。少。く。誓。う。ひ。あり。と。い。ふ。も。忽。地。は。亦。改。して。こ。の  
 婚。縁。を。結。ぶ。べ。果。り。違。て。一。ま。迷。ひ。を。取。ら。是。自。滅。を。招。く。あり。某  
 これ。ら。の。利。害。小。う。り。と。説。ぶ。必。後。り。ぬ。ら。ろ。を。と。と。ひ。う。も。へ。と。誇。良。小

肯。め。の。官。六。斜。る。を。教。び。く。次。の。日。種。の。聘。物。を。七。八。人。乃。奴。隸。小。早  
 ち。軍。木。五。倍。二。を。媒。約。と。私。は。墓。六。が。宿。所。遣。り。たり。さ。ゆ。宿。は。五。倍  
 二。墓。六。許。赴。れ。と。馳。く。あ。り。小。對。面。一。殿。上。官。六。が。懇。望。の。言。の。趣。婚。縁。の  
 一。議。を。運。く。只。管。小。説。勸。る。小。墓。六。早。小。心。せ。と。且。荆。妻。小。相。禱。て。と。も。か。く。も  
 侍。入。と。い。ひ。け。退。れ。が。俟。と。半。响。あ。り。あり。ま。う。多。う。五。倍。二。小  
 對。ひ。て。い。ふ。中。久。媒。約。の。趣。を。濱。路。が。母。中。示。し。ゆ。は。實。は。ま。ひ。け。も。ま。く  
 多。う。津。蔭。を。庇。る。る。殿。上。大。人。懇。請。濱。路。を。娶。め。り。と。ま。も。亦。重  
 重。小。媒。約。と。賜。り。小。親。子。が。僚。俸。え。ま。あ。れ。れ。も。ま。小。む。の。難。義。あり。  
 小。塚。信。乃。と。い。ふ。の。妻。龜。蓀。が。甥。あ。り。云。云。の。故。と。て。推。れ。り。養。ひ。と。ま  
 濱。路。と。養。子。妻。あ。り。職。禄。を。讓。ら。と。契。約。し。ゆ。小。當。時。證。人。數。あり。素  
 より。信。乃。を。女。誓。う。ま。あ。り。こ。が。夫。婦。の。情。願。あ。る。と。又。濱。路。が。情。願。あ。る。と。

只里人本が具員を悉く已むと爲すゆかりか。信乃を遠離て後、其を  
 義成仕め、とのいせもあまぎ五倍二の冷笑ひひらき、越胡乱入りや。然るに  
 あるゆもせ。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

山崎堂藏

再々來臨せり。預り侍ると先小立ちく。玄關の板敷まき。送り物つおのハ  
名の墓小等しく刃を平めりて臂を張り。頭を搦。定小千秋萬歳と送ふ  
祝。祝さきく。笛る男媒人の披く扇小夕日影土用近。俄暗長櫃昇  
後者ホハ吹入る。風成答あむ。主の後方より引そり。墓六ハ見送果  
そが俵裡面入る。箱小竊聞る。電條ハ中より紙門を推し。彼種  
種の聘物を顯り。数く。ち微笑。吁め。この結納やとのハ。墓六ハを  
抗。音高。入りや。竹の價路と信乃ホ小。さ。この品。ハ大袂とく  
ち被る。む。ち。刃。且。張番せよ。土藏へ運び。長櫃の中  
隠さん。あ。焦燥ハ電條ハ忙。袂。被。墓六袴  
の後を結。袖卷揚。女兒。見。聘。親の。靡。柳。樽母  
竊。布。和名。ハ。賜。重宝ハ。輕の。脯。ハ。

直。持。飾。附。白。髪。素。中。白。銀。入  
あ。生。廿。枚。並。巻。衣。五。本。綾。め。や。錦。軟。と。木。口。を  
入。の。解。隙。白。木。の。臺。あ。か。か。か。か。置。れ。左  
右。引。捲。藏。の。戸。口。を。入。か。か。か。か。夫。婦。と。盗。む。心。配。ハ  
この。度。毎。小。人。や。同。ハ。と。り。の。鶴。鶴。久。ハ。歌。あ。か。か。か  
腰。折。ん。疲。勞。足。辛。く。も。隠。藏。め。け。り。時。も。あ。夏。の。日。な。れ。ハ。奴。婢。ハ  
彼此。又。腫。臥。濱。路。ハ。納。戸。小。口。洗。衣。を。熨。斗。を。信。乃。ハ。菩。提。院。へ  
詣。嚮。小。さ。只。額。藏。の。ハ。知。れ。と。け。ん。墓。六。ハ  
被。品。を。運。び。隠。後。見。客。房。の。次。の。間。又。單。衣。の。領。を。引。き。り  
刃。を。捨。居。り。け。る。夜。あ。夫。婦。ハ。臥。房。小。入。臥。け。り  
殿。上。宮。六。ハ。皆。縁。の。ハ。密。語。信。乃。を。亡。死。計。策。を。高。量。と。當

十六

下龜條ハ匍匐伏々。枕小ハ成掛かきまぐ愛さるるあべ一兵衛神ふぬの  
 のさくどと。そふが豫てどひハ彼細乾左母二郎ハ管領家小仕一と云  
 鞍賜り一出入人ありとせえり。又云云の故をり。退糧人さふりこれ  
 云云のさくどあはる遠くまぐ鎌倉へ召かき入んとみづりり。渠が  
 濱路を眷る目ゆく。その情あるようを。知らず。あはる稀る美男なれば濱  
 路も終ら信乃がうそを。心忘る。彼人と情由あはると。流本を誑す。  
 あはる此の情を被て。あはる彼人歸来せん時ふそれ程の利益あはる。  
 未あつた所行るまごも。濱路と信乃が間を堰く。柵ふるめぬ。親の  
 護る目の隙なきより。外へあはる。繪の浦の細乾ハ濱路の女松松を  
 留るまはるめあし。とあはる。あはる。今ハ渠入障のそのむらぶ  
 かのうとあはる。男熊ハ美由あはる。召かき入る。あはる。あはる。不定の  
 瘦浪人と威徳を。城主小等ハ陣代敷とあはる。あはる。悔らるる  
 までけり。と古も。鳴り。墓六ハ起直り。あはる。あはる。物を案さる。  
 濱路ハ今の子ハ他げあ。鄙言ハ馬鹿正直信乃を良人とあはる。  
 貞操をも立かき。渠が氣質を推さ。あはる。左母二郎が袖を曳も。  
 志成程とべり。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。  
 路が細乾と情由あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。  
 丁を情をも運へ。濱路ハ何ともあはる。あはる。あはる。あはる。あはる。  
 去歳の秋糠助が死向とせ。比小信乃が子舎とせ。忙しく。あはる。あはる。  
 己前ハ野合一状とふ。邪魔よなるあはる。あはる。あはる。あはる。あはる。  
 墓六嘆息一。莊客們が口置ると。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。

妻せんとひつるもの悔一。寔は口も禍の門の櫓ハ一年ふ十尋せ守る  
 ともひひたつた陣代の性急成りつせん只速小信乃を亡し後をさくま  
 してよけき為術あんと眉をよき要時頭を傾しバ遠寺の鐘の声とも小  
 蛸ふり著く蚊の叫ひ其知小三ッ四ッ六ッ七ッ家裡の人ハ定りく夜ハ九ッ  
 かつまけり且一々墓六ハ頭を擧ぐ莞余と咲く龜篠ゆき尋思あは  
 さま。己色妙計を生じうとめは龜篠起直りく。その妙計とくゆあり  
 るそと傾る耳杖引よき。顧ふ小信乃ハ頗思慮あり。熟く渠を討ん  
 苦肉はあふさふ施一が。抑前管領成氏朝臣ハ番作信乃ホが主  
 まぢあまはこれよふ計了るべ。さて由足利成氏朝臣ハ持氏のあん  
 子ふくむ。結城落城の後討と多ひ。春王安王の弟あふ成氏  
 尚永壽王と稱せし。宝徳四年の春京都將軍の恩免を世承りて  
 鎌倉小左之六代の管領あり。その重臣根管領扇谷持朝。山  
 内顯房。睦一。君臣相攻る。二年あり。享徳四年六月十二日。  
 成氏竟小鎌倉の御所を放火せられ。下總國小赴死猿嶋  
 元康正  
 郡許我の熊浦といふ小屋形。修理ひあ。移す。許我の御  
 所とぞ唱る。かく又文明四年。成氏朝臣山内顯定。許我の城を  
 攻落。同國千葉へ没落。千葉陸奥守康胤を頼てとせ。よ  
 今茲。文明十年。西管領と。和睦の殘整ひて。許我へ歸城。志多。世の風声小  
 隱れ。これ今。信乃を云。と欺れ。神宮河。孫  
 出。おん。小左。右。左。母。二。郎。が。宿。所。へ。ゆ。く。箇。様。こ。小  
 あり。多。人。の。謀。合。期。せ。彼。村。雨。の。宝。刀。を。畧。る。べ。これ。ハ。長。苦。肉。の。一。計。  
 名。難。一。と。い。ふ。也。如此。せ。れ。ハ。い。ふ。く。別。死。彼。奴。を。賺。し。て。件。の。宝



刀こがも小入る。又額藏小如此。と説示。途まで信乃を亡せん首尾。計り  
 如くあり。濱路を陣代。嫁とさると左母二郎小口説あべ。渠の狂ひ。威勢を憚らま。妨まらる。あらん。小敷上殿。訴へ搦捕。さる。いと易し。  
 只む。う。死ハ信乃。が。ろ。え。必。暗。く。れ。る。と。ま。の。び。く。小説示。せ。バ。龜。條。ゆ。て。威。  
 嘆。一。寔。は。浮。雲。た。所。為。る。と。も。あ。ん。乃。ハ。日。ろ。れ。時。上。る。と。く。水。煉。ハ。達。者。之。  
 老。く。ハ。初。は。劣。る。と。も。船。頭。は。賄。賂。く。資。小。せ。バ。過。失。あ。ら。ぬ。綱。乾。と。謀。る。ハ。  
 こと。ハ。小。あ。り。復。宜。う。る。た。ろ。ゆ。ゆ。り。か。て。ハ。中。ろ。く。安。堵。り。陣。代。を。替。小。  
 せ。バ。村。の。ろ。の。い。も。さ。え。威。德。城。主。小。等。一。か。ど。呼。樂。一。や。い。び。の。溢。る。  
 笑。を。洩。さ。と。堂。口。小。推。當。り。送。小。耳。を。取。り。相。譚。果。は。夏。夜。の。曉。  
 々。近。く。あ。る。ま。小。暮。六。も。龜。條。も。疲。勞。ま。ま。小。ひ。ま。ら。ら。ぬ。つ。と。か。い。小。  
 目。睡。け。り。され。バ。龜。條。ハ。次。の。日。末。下。刻。里。の。不。動。堂。へ。詣。る。と。偽。り。と。い。ふ。  
 漫。不。背。門。より。と。く。穴。竊。小。綱。乾。左。母。二。郎。が。宿。所。小。赴。外。小。在。在。て。竊。小。小。ひ。  
 習。子。ホ。ハ。オ。や。退。れ。ま。く。歌。曲。の。弟。子。ハ。い。ま。ま。も。あ。ら。ハ。カ。柱。は。倚。り。一。  
 節。切。を。吹。く。を。折。丁。を。よ。け。と。進。入。る。左。母。二。郎。ハ。之。り。忽。地。笛。の。を。  
 ち。め。玉。珠。一。何。木。の。風。の。吹。よ。せ。て。や。み。づ。り。訪。せ。多。ひ。と。い。ふ。あ。の。と。と。立。迎。  
 へ。花。筵。を。披。け。り。上。座。へ。推。居。ま。る。龜。條。ハ。其。中。小。い。か。入。傳。ま。い。ひ。  
 され。彼。此。の。一。談。あり。あ。ん。乃。が。智。恵。貸。借。ん。と。い。ひ。く。む。を。竊。は。詰。ま。り。  
 外。へ。心。を。つ。け。く。と。い。ふ。小。細。乾。ハ。あ。ろ。ゆ。く。出。居。の。簾。引。お。後。し。そ。が。ま。あ。  
 奥。へ。坐。を。ま。め。て。間。近。く。耳。を。さ。り。よ。ま。れ。バ。龜。條。声。を。低。く。い。ひ。ひ。と。い。ふ。  
 る。あ。ま。と。も。あ。ん。乃。が。濱。路。と。情。由。あ。る。の。と。い。ハ。も。豫。く。あ。る。の。う。と。い。ふ。こ。ろ。ま。  
 どちら。誰。も。彼。も。よ。小。あ。る。ま。が。え。る。の。ハ。信。乃。を。見。捐。て。ご。ふ。め。ら。う。と。い。ふ。誓。  
 が。ゆ。と。ま。ご。い。ふ。と。も。い。ふ。せん。濱。路。と。信。乃。が。稚。れ。と。い。ふ。如。此。と。い。ふ。あり。く。

里人ホコ媒妁せられ夫婦よせん。いひ号し言葉ハ今さら反故はなるべし。  
 莊官のめもあつろよあんを愛し信乃がめく壻小せん家を嗣せん。  
 信乃ハ妻の任かゝる。箇様この怨ある番他が子のあまぶこが為よたのり  
 のよあまをいづく彼奴を遠離く。あんを壻めと豫くより。いひしとの  
 空しくして如此こは討つまが信乃ハ他郷へ赴くべし。就て渠が稚死時小  
 壻引出とて取らせし。莊官の秘藏の一口世小類され名劍をとり復  
 えと多くも明く地よ求めま返まべくもあまをか。よりて云小討りあん  
 むん弟も亦云小相討ひく。莊官の佩料の信乃が件の一刀を掲替て  
 してんや。勿論さうこの一刀も長短を豫く量りてその用意まらあは  
 鞋あひうたれるハあつ。事あるとれハあよたのれ幸ひあんがめゆめは  
 や。虚言実事より難へ辞巧ふあつらゆとハ左母二郎ハつくと。あつと愧  
 する面色より額ふ子を當沈吟したる。頭を擡く四下を見かへ。人がま  
 るら且ハハかる密事をいふ。桃く相譚あり。さうろめくいん。さかま  
 某娘さる小懸想せざるあまがまとも。鮑の貝の片思めて彼君ハいと強  
 顔しそ成情由あつと宣ふハあん目鏡の曇るたのらん。さうを某化骨  
 折く首尾よく大刀を掲替たりとも。娘さるあまも氣づくハ家尊父  
 母もせんまぶかうん。この殺ハいふと。期を推せ。龜篠ほど打笑ひあ  
 鈍すや。粹ま似げあ。信乃がまぶさるらん。濱路ハ誰ぞ憚るべき。  
 渠が靡くと麻非うぬ。あんがのまろふあん二親の知るまらあ付  
 らむ。親の許さぬ夫小連て逃亡るの世よまかり。况親が壻がひ小定て  
 後ハ睦し死も。睦しかめも楯を執る夫の才と不才ふあり。こまは是江湖の  
 こられどちのらん。然いふの。こらハが目まら情由あつと。こらあんめと

六代傳三轉卷二



許我小劫由來を述先祖の忠死を訴その宝刀を轍るる百出なる  
る疑ひる。和殿許我は田部と云遠くをく濱路をかり遣り  
又苗らぼるまきふ婿養子の披露して職禄を讓ふべ。さうと死公大石  
殿も村長あしやき措ん必諸司の上ふせく陣代ふせられん歎これも  
和殿が徳よふりて忽地面をおまはる。とくバ龜條傷より。吾侪夫婦は  
男兒あしやると憑むはそあふ。為さうと思ひぬよふと云のくよらら  
察し久六月おぼろ様あまのいと堪くけしんが許我とく遠死境ふあむ  
善ハ急げと俗ものふとく多ひ起る。と誠し安ふ勧めたり。信乃ハ軍木  
五倍二が殿上宮六がぬ小煉ゆと濱路又聘禮物を贈り。本日ノ事ノ廷を  
額藏が願ひ鏡く。とそそのり成告ふ。今亦伯母と伯母夫が年来竊し  
念成被る。村雨の名刀を許我の御所へ進みさせ。と只吾侪勸ると原末  
今更にや遣りて濱路を宮六は嫁とせに底心たふ。と言下小曉り  
茫然と笑も不肖の某か。まで小ん慈愛を被る。いと歎く。てせゆへ村  
兩の宝刀のりハ西公達のめん像見ゆ。ゆへ折もあふ。許我殿へ獻わと親也  
いゆれ。と云この。二がこの仰かりともや。と出しく。小ん指揮お任せん。と云ふ  
折り云云と宣ひ。てを幸ひある。現謗ゆ。寸善尺魔とりのこのゆへ  
明日發足仕とんと早協言葉小あり。夫婦ハ大さ。ねと。さうち歎ひ心の  
だのせらる。ハ吾侪もあふ。歎びる。れども。親主とのめく。ハさふ。かく。小行装。申整ひ  
か。晉を繰く。日子がよ。ハ明日と定め。め。後。者。北。月。夕。額。藏。と  
二人ハ一人遣る。一。あふ愛。と。さう。難。信。乃。ハ。忝。一。と。恩。を。謝。し。と。鯨。と  
子舍。退。け。ハ。額。藏。ハ。庭。の。草。木。小。水。を。沃。た。け。く。を。折。し。と。け。と。招。死  
よ。せ。縁。頼。小。立。ね。ぐ。ら。今。墓。六。龜。條。亦。お。れ。れ。る。と。さ。さ。さ。は。又。又。言。ふ  
<sub>二十</sub>

山崎堂精

せとく耳語ハ額藏伊とくうち点頭寔ハ推量志のふとく。おん刃を下送(旅  
 せとく後中後)彼婚姻を執整人為るべし。只痛しハ濱路とのえ當今の  
 少女のその心操有かたまき。おん刃を慕ふとあり。形さ。そ我一朝より  
 捨る仇結びたる妹妹の縁後の怨ハいつあらんといふとく。信乃ハ嘆息し  
 人木石ハあふさば思ふはあふ後とも。女子ハまじく水性の曲と  
 ちや。根るは早かり。某らふとくどたうら親のころハ後ふるべし。大丈夫  
 たらんぬの恋憐とく一女子ハ生涯を恨むんや。再びはるる死めハ時あり。  
 只うち捨て由んのと。といハ額藏さふとく。恥く恥くまこる庭の曲と  
 掃く。信乃ハ裡面も入らふ。さゆは又龜條ハ脚絆よ。笠乃切よ  
 とく。信乃ハ起行の用意し。濱路ハたうら進路。親の指揮ハ裁て。總ハ  
 二田山木綿の單衣。涙を包む袖形。編中十行の濃縹。縹ハかたきとく。ハ  
 何時や。曳送さる糸の端結ハ縁の場。おん夫を返し。後ハ  
 一個刺殺て。又一個宵。堪ぬおひちち。もるれ。歎れ。せり。かく。その次の  
 日ハ信乃ハ行装也。大く不整ひ。當下龜條ハ信乃ハ子舎。小者てい。あや。  
 假初。おん刃が心願。殊さ。小初旅のる。あり。人のち。及ぬ。ぬ。ハ  
 愛敬と厄難。多。幾足。由。翌と。いハ。よ。づ。暇。あ。と。も。親の墓。へ。も  
 糸。若。又。瀧野川の辨才天。へ。も。某。幼稚。死。時。小母の病。著。平愈。の  
 朝。あ。る。と。ぬ。現。瀧野川。ある。辨才天。へ。も。某。幼稚。死。時。小母の病。著。平愈。の  
 祈願。を。かけ。た。り。る。も。あり。と。い。ふ。と。く。おん。後。とも。生。平。ゆ。若。る。と。稀。ん。  
 仰。小。後。ひ。い。ん。と。い。ふ。又。龜條。外。面。瞻。仰。く。急。さ。か。へ。さ。暮。ん。と。く。と。勸。  
 れ。ハ。信。乃。ハ。衣。を。更。め。く。例。の。西。刀。を。跨。ぐ。い。そ。く。宿。所。成。立。物。り。さ。る。箱。小。信。  
 乃。ハ。只。管。小。路。を。ま。り。て。その。日。申。の。左。側。小。辨。天。堂。へ。あ。り。と。ぬ。瀧。垢。離。よ。

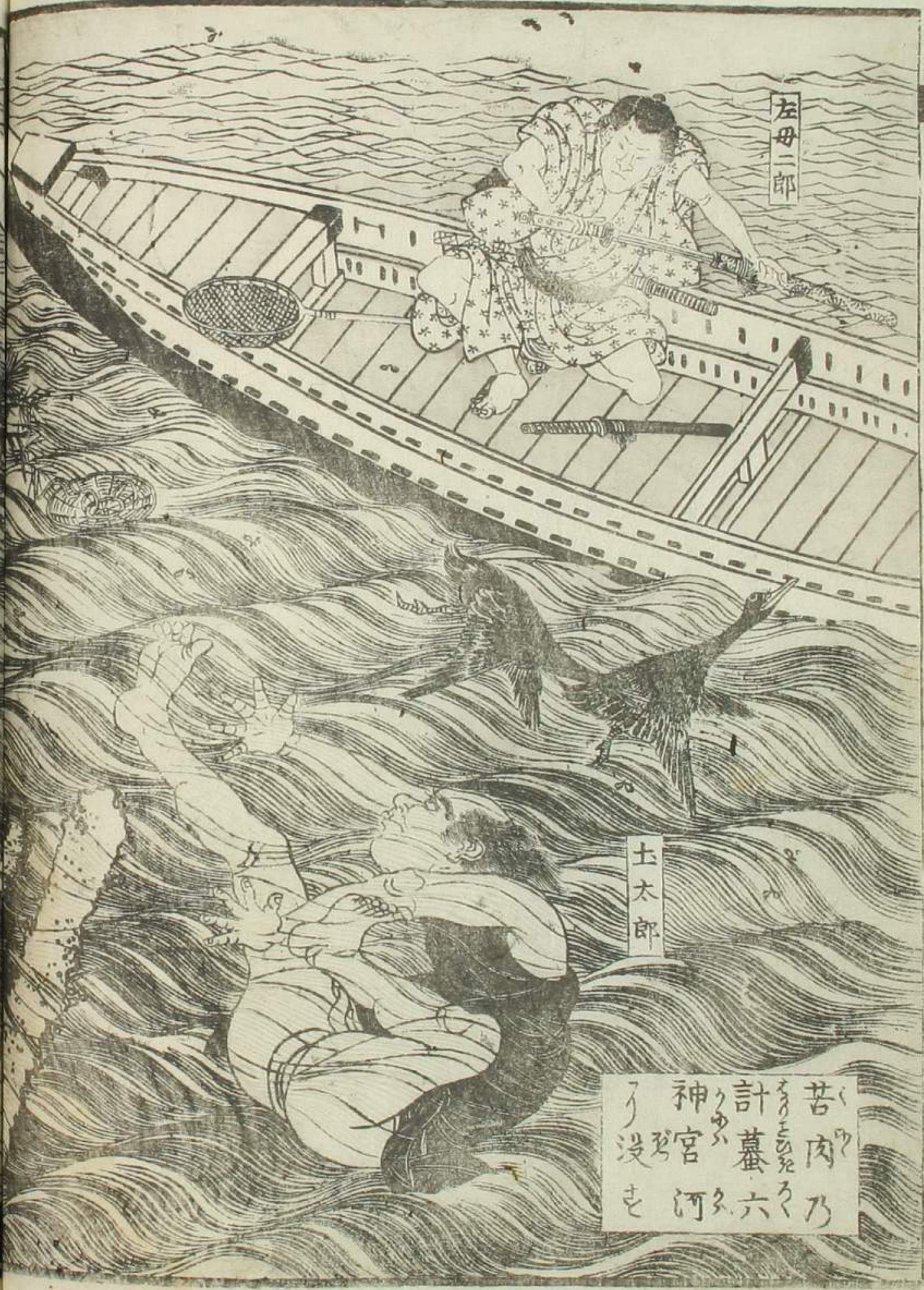
身を浄めて。霎時神前小黙禱し。鮎く下向小赴く程小途のゆく田中にて。  
 之ひらふかく墓六が細乾左母二郎を伴て老僕北月女は澳細を被肩せまふ。  
 之成さうく事ふあひたり。墓六一及あまう。あふさう呼りて信乃よ和殿ハ  
 心願あまふ瀧野川詣志つる。とゆひ小果しくくまう遭ゆたるとい間小信乃ハ  
 遠く差を脱く進進つれ。夕あそく澳獵小牧何処へとく赴たふ。  
 と同ハ墓六うち笑く。さればと。翌ハ和殿が首途之餞別酒の肴ゆとく。  
 彼此を問せく。魚屋ハ折ありとゆひ。故小俄頃ハ細をかろく。翌  
 の肴は獲んとゆひ。忙て宿野成ゆ折細乾生ハ訪とく誘引立て  
 来り。和殿野要ハ果とゆひ。いざり共小と先小まバ左母二郎由會釈とく。  
 只言勧めいざあひたり。便是墓六が豫く巧く奸討とく。翌ハ龜  
 條小勸させく。信乃を瀧野川ハ半遣り。月くく墓六ハ。澳細を北月女ハ  
 被肩せく。宿野をゆんとゆひ。暗号ゆとる。左母二郎ハ門邊より伴と  
 来り。甲申也。信乃小あひく。かまむ謀とされハ信乃疑ふとゆひ。と  
 根つとハ巧く信乃ハ斯忙とゆひ。たろ澳獵ハあふと底意ハとゆひ。  
 伯母夫のまふ細をあろ。留別酒の設とまを伴るハ推辞小す。  
 形困トかふ小打つれと。神宮河原へ赴た。墓六ハ豫下り。相識る  
 家も船を借里一人の揖取。土太郎とゆひ。成雇く。船小乗らんとゆひ。  
 忘とると小膳を拍と。遠く背ぬを近つけ。嚮小宿野をゆと。口管ハ  
 早早。偏投割公龍を忘れ。汝ハ走一走とま。彼兵糧を  
 取と。急げ急げと焦燥ばうけ。と心成を家路を投て去と。  
 墓六ハ欺詐と背ぬを還。信乃左母二郎共侶ハ件ハ船小乗移れハ  
 土太郎ハ械を取て河中へ漕出を當下墓六ハ襦袢とゆひ。小脱更て腰蓑と

著竹笠を戴れ細を引提ぐ船小左母二郎ハ茶を煮んとし禰小左の  
 曲突は向ひく。生柴折く火を吹く程は墓六ハ壮年より殺生を好まざり。ち  
 ちの細ハ小隨ひて江射鮭をよの獲めの板子のく小引揚られく左  
 及右小反方とふ隙ありと奥あり。さる程小日ハとて。十七日の月ハま  
 弁らむ。船中且く暗き。墓六ハ豫より巧化より。色ハ奥小乗はる。ち  
 のち。只管小うちちちを細のろ共小舟を跳らせく。水中へ陥り。衆皆  
 吐嗟と驚死騒ぐ。板子を投入。さる程小水面暗き。其れとも。信乃ハ  
 信乃ハ有敷小伯母夫の溺る。成。忍ぶ。衣を脱捨。波を披  
 たり。飛入。六。揖取の土太郎。續く火と飛入。墓六ハ少壯より水煉。長  
 じ。且く水底を潜く。右小かかめる。細の緒を解流し。信乃ハ跳り入る。小及ひて。  
 忽地ハ浮揚。信乃ハこれと救んと。墓六ハ成取。ハ。  
 墓六ハ亦信乃ハ脱を楚と捉り。故さ。深水へ引く。只管小推沈んと。さる程小  
 土太郎亦資。陽。墓六を救ふ。如く。底意ハ信乃を水中。止んと。れ  
 とも。信乃ハ推れ。比。より。水馬水煉。歩渡。心。み。む。と。り。み。と。く。替。力。と  
 義秀親。衡。よ。劣。る。べ。く。由。あ。ぶ。ぎ。御。小。廣。縁。土。太。郎。を。一。反。あ。り。う  
 蹴。流。し。墓。六。を。腋。腋。に。撞。込。頭。を。拳。こ。見。入。る。小。船。ハ。遙。推。流。され。ま  
 迫。づ。べ。く。と。あ。ぶ。ぎ。墓。六。を。抱。揚。左。の。働。し。向。の。岸。小。泗。著。小  
 墓六ハ大力。抱縮。め。れ。る。あ。れ。鵜。又。啄。れ。雜。魚。小。似。り。水。を。飲。き。用  
 心。の。し。く。阿。容。と。引。揚。さ。る。程。小。土。太。郎。由。溺。死。著。信。乃。と  
 共。小。墓。六。を。倒。小。引。ま。し。く。少。選。水。成。吐。せ。傷。の。小。屋。小。扶。入。ま。り。藁。火。小。暖。め  
 勤。了。そ。が。中。小。土。太。郎。ハ。流。船。を。追。留。ん。と。河。原。を。下。ま。ま。ぬ。か。り。と  
 程。小。左。母。二。郎。ハ。課。一。の。せ。し。る。あ。ま。船。の。流。を。幸。ひ。り。と。河。下。赴。れ。り。



信乃

ひき六



左母二郎

土太郎

苦肉乃  
計墓六  
神宮河  
了没を

八代傳三車卷二



竊小信乃が副刀の鞘釘を抜とり。又墓六が副刀の鞘釘を外し。即ちくよ  
 抜放し。此後を引替へ。鞘小納入と云ふ怪しむ。信乃が刀の中刃より。  
 水氣忽然と立沖り。夏あけ寒れ袖袂膝もあけられ稀世の名刀毛骨  
 のよ疎可あり。左母二郎大に驚愕。故鎌倉管領持氏朝臣の重  
 寶小村兩と名つけられし。下びくは抜放せば忽然と水氣立  
 殺氣を合し。ち振る刀尖より噴れる。その水さかから村兩の木杪と洗ふ  
 べくあれ。村兩といふとあん。あつふ今この信乃が刀。彼村兩と相似し。かれが  
 灵刀。初ハ墓六が重宝あり。故あり。信乃小與。といひ。偽ま。一旦結城  
 推籠り。信乃が親番作が春王安王兩公達より。領り。物み。彼村兩の宝刀  
 あり。これを。故主扇谷敏(敵)即歸系のよ。又入小賣與。  
 この價千金あり。墓六ともこの焼刃を認れる。あはる。室の山入り

あが。他人の物。あはる。と。即ち。あつふ。今この信乃が刀。彼村兩と相似し。かれが  
 墓六が刀と比ぶ。及も長も相似し。バ僥倖。と。竊は。飲ひ。處。く。刀。と。墓六が  
 鞘小納め。又信乃が刀を取。く。刀の鞘。納め。又墓六が刀と。て。信乃が副刀の鞘小  
 納。孰も長短。等し。あはる。胎乎。と。恰好。一。告知。又土太郎ハ。流。と。追鬼  
 事。岸の夏草。あはる。と。あはる。伊。と。あはる。左母二郎ハ。入。と。あはる。あはる。  
 械を操。と。あはる。と。あはる。土太郎。内り。と。乗。と。あはる。あはる。あはる。  
 そ。あはる。あはる。あはる。左母二郎ハ。陸。あはる。あはる。墓六が。あはる。あはる。あはる。  
 亦。犬塚。信乃ハ。その思慮。才学。人。と。起。と。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。  
 六が。入。水。せ。ハ。討。と。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。  
 禪。と。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。  
 音。と。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。

取。腰。帶。事。倉。卒。の。間。も。夜。中。の。り。め。あ。は。不。振。放。て。も  
見。り。け。り。鳴。乎。惜。也。親。も。子。も。年。来。獲。一。宝。刀。な。れ。た。只。寸。隙。の。由。あ。は  
よ。り。て。他。も。は。落。る。八。時。運。ち。ま。へ。

作者云神宮村ハ豊嶋郡今ノ王子村より北の七七八町あり。今ハ河あり  
神宮河といふ蓋その地より名づけるもの。水上八戸田より落る千住に至り墨  
田河を歴て海へ入ると。神宮の西の。豊嶋村の河をひ小豊嶋信盛の館  
の迹あり。今ハ鋤まき。繰り送れり。嘗長祿長亨の地圖を考ふるにこの河の南岸  
に村尾久豊嶋梶原堀内十條一本十條稍附志村ホの敷村あり。神宮  
村あり。按はるか吹ま。梶原を詠ま。今神宮と書ハ古実小あまを。かれハ神宮の  
舊名ハ梶原堀内村あり。こハ益の辨るればこの半頁小楮餘ありハあり。

里見八犬傳第三輯卷之二終

東都 曲亭主人編次

第廿五回

情を含く濱路憂苦と訟ふ  
奸戎告て額藏主家小還る

再説暮六ハ水小溺れ一ちり。飽や。信乃ハ抱させ且。眼を  
開れ。抗足を動し。ちり。れ。扶起され。自腹を診り。  
かくて。再び生り。危り。柱小携り。立あ。信乃ハその  
本復の速るを。俱ハ河辺の小屋を。土太郎ハ左母二郎を  
乗せ。船を。當下信乃ハ。単衣を被て。刀を腰に  
ま。左母二郎ハ暮六。を携。船。乗せ。その恙を祝するに  
或ハ水中の動作を。或ハその苦惱を告て。果々笑声高くなる。とて。真

岸を離るるの多。前愆は懲りたり。再び細をちろとてかか。
 前面小著させ。獲の雑魚を魚番は移させ。たの不餘れるを。
 枝小貫丸を。これを蒼竹の真中。小括提信乃と左母二郎と。
 末を相携より。墓六件の二人を先は。腰巾著を搔揚々。
 土太郎は紙捻を。取らる。今宵の辛苦。この土太郎は。
 河船の備置。生活よとあれど。一郊不住の癖者。
 六小相譚れ。信乃を亡ん。か。この西人ハ一町あま。
 信乃ホか。折。何るや。密語めり。又先。
 遙小後方を見。後り。待。墓六。走。
 うち連。家路。十七日の月。戦。青田。
 夜行ハ。涼。うち相譚。墓六。信乃。

今宵の怪我ハ生涯。復。不。
 口の。既。庚申塚。
 前面より。引。挑灯ハ。
 小腰を折。割。龍の。
 龍耳脱。今。
 里小還。亥時。
 夜の深。裡面。
 行を祝。宿。

八丈傳三車卷三

山崎堂藏

獲の雑魚を肴とて烹の焼もほろ程小亀條が盪る酒もよれ此ありし  
 六件の奴婢と就寝く夫婦ハ信乃を納戸に招く小許我々の後者  
 小を額藏を遣せしとてや臥する成呼よせし郷食心態に酌を執  
 らせ此彼四人團坐しと。苗別の皿を遣しけり。既に酣する比小墓六ハ  
 亀條く。百匁あまりの銀とり出させ路費ふしと。信乃は處与つ。その  
 真ぢあるよろづ年来よれ似るべくもあさきとて路次のる。許我へあり  
 てのるなほ成うち相譚ふしと夏の夜の短く。たや丑三はありぬべし。  
 霎時とも目睡く。翌の道中堪が。かかん。とて睡。まゝとゆふ亀條が  
 言の成成まほ信乃額藏ハ告別し。あめとて臥房入りぬ。あ  
 と死奴婢ハいれ。あて皆熟睡せざるもた。濱路さ。瘡幾りぬとて。  
 甲夜より子舎に臥。當時墓六ハ神宮河み。熟計し。信乃を水中小

誰引入れし。その事の趣を亀條に密語バ。亀條耳を傾く。笑々ゆめく  
 半响をり。忘へえせ。点影ハ圓行燈の予の月跳る。鬼小彷彿り。かく  
 耳語り。墓六ハ乾る唇甜濡し。これ復船に乗りし。左母二郎が目を  
 注せ。既よその意成。あせし。渠ハ必定彼宝刀を掲。昏る。疑ひ  
 あり。翌とゆふ待し。び。一見せんと燈燭を。中を。ほ。と。引よ。と。  
 琇緩く。抜放し。夜目もれば。焼刃の色定。あ。こ。ひ。ど。現。鏡。刀。と。あ。は  
 し。小。鞆。の。内。より。水。滴。り。と。席。薦。の。上。小。置。く。露。を。墓。六。ハ。疑。ひ。と。撈。り  
 見。る。鞆。と。見。る。奇。ある。ま。か。この。刀。抜。放。と。死。ハ。水。氣。あり。殺。氣。感。合。て。うち  
 振。れ。バ。降。そ。ぐ。雨。異。あ。さ。ま。の。奇。特。あ。ふ。より。村。兩。丸。と。名。つ。け。ら。ま  
 し。と。年。来。使。け。い。も。見。る。今。吁。と。ふ。と。吁。め。て。う。奇。ん。と。賞。嘆。し。そ。乃  
 雷。を。い。く。遍。致。指。小。降。り。額。に。塗。り。ら。夫。を。見。ま。し。小。亀。條。も。物。体。あ。や。と

指頭のく。拭ふ戴く一滴水の是神宮の河水に彼左母二郎の奸智も  
長ふ。おのが刀と伴の宝刀と之方呑みまらうと死後必墓六が抜放せん  
て紙慮りてそが軽に少許河水を洗入し。おのが刀を納習より。その  
村雨の刃尖より水氣滴るといふ。さうして墓六は天に教び地小喜び  
刀を納くうち戴き二十年來懸念せ。村雨の宝刀を小入ぬ諸願  
成就と唱れ八重條もうち念じ。かくよで小あひする。さうが隨ふありの事。  
嘉酒小今一度過りてと勸まら墓六も盃とり揚げ。今宵ハ大事とさうろ  
と。まど酔まで小喫さりて額藏は彼密事を説示し身なりや。と回亀  
條頤さしよせ。そこふぬりわさむ。甲夜は信乃ホがさぬる小彼奴を  
竊に招よせ。如此と説示し。固様と小あひこれバそ我真小兼て一深に  
及ぶ。おろゆ果と立ゆり信乃が敵に不足するとの騙し術ありと俗

ゆいふ。よる小運の向しは。大なるハ事成るんや。額藏が小兼さく  
反敷。おちまはふとく。その宝刀を畧奪これバ。つづて小損ハあれど。よま  
おどさげや。と潜めれ告墓六は。く宜小然あり。宝刀を畧奪。信乃は。出を  
そが。小亦結果は。墮胎患ぬる事。とも。為損なり。て害めあるは。  
額藏ハ殺され。信乃は。恙ある。とも。亦唯これを疑め。詰る。とあり  
とも。年來信乃と額藏が睦まぬ。入食を。人より。額藏ハ。私。の。怒。よ。ま。  
老の。信乃を害せんとせり。あ。さん。これハ。故より。ま。む。と。い。ん。か。れ。陳。る。不。辞。あり。  
これハ。是。萬一。の。活。路。を。造。り。の。む。ひ。る。は。が。く。た。ら。ん。や。遠。く。ま。し。て。額。藏。が  
吉。左。右。を。使。ひ。の。旨。と。う。ち。鳴。き。舌。を。吐。け。口。小。以。當。飲。ハ。現。盜。上。戸。  
あ。ん。亦。も。ま。ど。甘。と。さ。ん。盃。を。直。し。受。て。も。横。道。ち。夫婦。解。盤。の。欺。詐。ハ。粗。齧  
る。を。ま。ど。焼。の。肴。荒。と。暴。食。ハ。果。茶。碗。小。る。と。と。師。せ。師。れ。と。一。喫。小。

あほり著る物もれ巻成巻く息を吹死引ちちりたる盃盤をとり由納  
 めと共侶小以房小入ま程由あり射の声を高かりけるさる程小信乃臥  
 房小入ま一かを曉り成待ひいゆ移るま程印ちりけり久後を思ふ物も  
 印ちりを誰はとめみど父母の墳墓小今ぞ遠離る里の名残のいと惜れこる  
 ちかど真砂路の濱路ハ臥房を脱ちて竭ぬ恨をいゆりも納戸の軒ハ二  
 親の目見えぬ程いと公のせられ逢ぬかふさるる後憚の関の戸乃音  
 たてこぞと國踏む膝ハ戦へて定めあり浮世とぞ形あり悲しくつづく  
 恨し郎の枕より迫り信乃ハあま人ありとるる刀を引よせ山守破と起  
 誰やと問ハ音もせど原來癡者こさるる息を穴現あり刺  
 殺さん為小軟と疑ハりゆ由おせど行燈の火光さう向けく熱視まぶ  
 濱路あり端ありハは進まど燭の後か伏沈と声ハささめど哽咽る涙小

外を考の掛茶れ苦いと脚めり強敵より懼れざる仕客ありさうら騒ぐ骨と  
 柱めく蠅を出釣緒を解り臥簟を片よせ濱路ハ何ホの所要ありて更  
 團らる臥も甘むさハ迷ひ來あり瓜田より沓を容む李下小冠を正  
 こぞといふ諺あり成まらばやと外も六恨しけ小涙を拂う頭を奉何し小來  
 つと外もまじりつらまじり小形あり妹妹ハ名のと糾纏の化結する中あれ  
 ちる宣ふも之理あり後と一旦親の口がう。詩もひ夫婦ありや日來ハ  
 とまればかゆれ今宵限りの別れぞと告るせめあふともおん刃の恥もたる  
 おん刃小生く申すまでまらば白小只下言の捨言葉かけぬハ情ありつよ  
 一と怨むまは信乃ハおん刃を歎息一人木石小あふされハ有懸小情とまら  
 々も嫌忌の中小刃を措故小口を閑れく告るまよりあり。おん刃が誠ハまら  
 志まら。こが胸中をくおん刃をまらるん。詩我ハ僅小十六里三四日又往還まら



ことばがたふ百分一あんが小誠まうまふ六如此この故あまうかへり本八定め  
 かへ。潜びくち。共侶ゆと宣ひつるとも夫あり妻あり。誰か密夫とて穢るべ  
 べれな。強面一と多ふ程離れたる女子の誠分袂より棄ててあぐれく  
 死んより。あんが刃又かけたる百羊の後成冥土ゆく候侍らんとうれ口説く。  
 いと切なる恨のきく。泣音憚る千行の涙の袖は湛たり。信乃ハその声外  
 めや洩ん心苦一とらぶえ。岩井の水成むとびうけ。縁一をこふ釋よりかけ  
 れハ慨然とく嗟嘆し又たさるる成膝ふ措えや。濱路。あんが恨ハむら  
 とく。理りまふはとひよりあけと。いつみせん。この度の起行ハ伯母水夫  
 婦の指揮ふよれり。実ハ吾侪を遠離く。あんが小堰を招んぬる。妻より  
 されハあんがのふ。夫あり夫あり。そのひうた二親の底音成猪一  
 ぬるあんが。今さう情は攀れく。あんがを誘引出る。誰か淫奔と

のらざるを苗りかたれを苗と多ふハ便長はかぬまかたれ成出くも亦是  
 めんがなるまむむや。縦且く別るとも。送小あろ亦多む。ハ遂小全取ると死  
 めん親連の目覚ぬ間よとく。臥房はかりあり。亦心けん。ハあんが  
 親をさぐり考へ存亡をさる。便著もいで来んとく。去と論しても立もあ  
 らざ。頭を掉し。濡ぬ前を露をそと。厭へ二親のいざとく。ハへ来例るを  
 外めあつ。とらふ由さる。只共侶ゆと宣ハさる。あんがの心成候侍らん  
 でハ生く國の外又出。殺しとくと。衝詰りかたれ女子の魂もこ。小居りて  
 動ふ。信乃ハほろく困り果て。潜ひるがらの声を激し。さりとてハ亦生る死  
 ら。命あふ。時もある。死るが人の誠う。とま。伯母と伯母夫の許しを  
 する。出世の首途妨せ。が妻よあま。過世の讐軟と。寤る。濱路ハと  
 泣沈。とら。願ひを遂んと。とら。あんがの仇。とら。を論。とら。術も



八代傳三車卷三



信乃

落家  
かたごころ  
をれを情め  
新のぬ乃  
やまぬさこの  
あつてもうね



額減

たの路

八代傳三車卷三

かゝるものゆゑも形されどか身むらゝのなまふもひ絶く笛り侍らんさる  
 道中恙あり折る烈しれ日よけせむ許我へ糸まき名をも揚家を與  
 冬籠北山下風吹くころの風の便もせむくづ筑波の山のこゝろ  
 恙もあきて君まはるとゆゑのこゝろ侍りてん今より弱く玉の緒のこゝろ  
 これをこの世のこゝろと憑むはまごんぬ冥土のこゝろ二世の契は必よぬまろ  
 亦とせまゝと墓あるを木綿袴掛てぞ契願言ハ怜悧足えても  
 恍惚子なる未通女さるの良れる信乃も有敷ふうち芝折れ慰め  
 うみと点のこゝろ又いかりもあつとけり折る告る八声の鶏小信乃ハ心を  
 ちの同ある二親めがまゝのなつとくといそがけまはる濱路ハかゝる  
 立あがり天由明ハ孤は咲まん腐鶏の未明は鳴く伏を遣つそれハ恋せし  
 草まらるるこゝろ旅中妹妹のこゝろ鶏鳴く天由明ハ曉む人の目も  
 覚へ恨の鶏の音やよふ逢坂のめみ霞ハあつとゆゑぬ関ハさる人ハ在  
 明の月ぞ果敢るれと口実ハ出んとはと外面ハ咲く障子とほく  
 とも敲れ鶏が謡くいふいふ覚めらばやと心起き声ハ額蔵あり信  
 のハゆれく遠く心成はるハ額蔵ハ庵福のめみ退れり疾この隙小と出  
 遣る濱路ハ臉泣腫一圍れくさるるん之と涙霞む挾山形紙張の  
 壁ハ身をよせむおのが臥房ハ泣小中現悲しれハ死別より生別ハなれ  
 あり吁早あつこの未通女ハまごん鴛鴦の衾を思ねむ連理乃枕を  
 並へむこゝろ情百年の夫婦ハ勝るふ信乃ハ情小引きこゝろ公成  
 動さむとくそれ情小後ハ男女別あり越成はるり夫色界の迷津ハ賢不  
 肖ハ差別ハ江湖詩書の少年輩トさるこの岸小臨く瀕さるをあるめ  
 少一然るを今この美夫節婦あり濱路ハ恋慕を樂まき淫甘んと小

八代傳三車卷三

九

山月堂

信乃が嗟嘆ハ悲々傷々を濱路が情ハ有不得。信乃が如死ハいよ  
 稀々間話休題。この曉天額藏ハいぢぢ起出火を打水を汲炊  
 飯乃又信乃は飯を勧め已由たゞ共侶不行装束程小奴婢ホも大  
 起。信乃額藏ハ支度形の如く整。あつ夫婦が学を成まらふ  
 明六の鐘ハ夕中にも夫婦ハ宿酒醒まやありけん。臥房を出ざりけり。  
 信乃ハこの朝涼ふと心のせむれ。一言半句も辞せざりて出てゆく。  
 臥房ホ立上るも。めん目を覚もるや。只今度足はむらあん  
 暇をよもせん。信乃もい覚もるや。と声高申ふ。えせ。暮六ハ夢  
 ごとく心ゆれ。後くと心けり。信乃ハ再び声も立て。伯母ハいも受も  
 ちや。信乃が度足の暇をよもる。いハとゆ。まは。龜條。腹惚。声も  
 ゆれ。後くと心けり。信乃ハ心を覚もる。外面も退く。濱路ハ有敷。小位  
 顔を人に見られん。とをく。まは。細申。障子を閉。目送り。詩ハ  
 絶く。酸鼻。む妻。小別。袿衣。今たち初。信乃額藏を送。奴婢ホ。惚忙。  
 背ぬ。ろ共。門。小出。衆皆。名残。を惜。ま。祝。し。霎時。散動。危。る。絶。小  
 幕。六。龜。條。ハ。昨夜。深。熟。醉。る。寢。小。就。る。ま。朝。日。高。く。昇。り。比。中。  
 多く。不起。出。信乃ハ。同。ハ。云。云。明六の鐘。ろ共。啓。紗。志。も。ひ。れ。と  
 奴婢ホ。が。告。る。小。呆。果。る。夫婦。目。と。目。を。あり。り。ぬ。り。小。け。り。と。ゆ。之。も。愧。る  
 色。た。り。舌。ろ。ち。唇。し。さ。あ。ん。ま。汝。ホ。も。あ。ど。く。日。色。ハ。告。さ。ら。し。信乃。も  
 亦。不。敬。し。苟。且。ま。起。行。小。告。別。せ。ぬ。と。や。ある。と。高。声。合。し。と。敦。團。ハ。否  
 彼。人。ハ。臥。房。小。立。上。る。云。云。と。告。め。小。由。れ。後。くと。心。多。ひ。死。原。来。寐。言。と  
 ぬ。甘。飲。と。一。入。が。い。堪。る。て。衆。皆。咄。と。笑。み。小。ま。ん。夫婦。ハ。い。よ。腹。立。く。此  
 奴。ホ。何。が。あ。り。死。す。か。信乃。が。ろ。り。い。取。持。貞。丁。を。さ。ら。る。後。そ。ろ。云

遍掃出。門へ塩花揮ふ。やと囀著如瓦坂東訛。哮まは青嵐鳴子の音。不  
群雀驚く。如命避る。その中小濱路の。この日も病臥房を。心持死ね  
べくあもる。とく。著る。とあもる。二親ハ。老る。養老女兒を死  
て。やま。く。見。中。宝の山出世の。椽中絶ん。鍼。薬餌と謀。これ。女兒ハ  
使。愛。あ。が。勢。利。小。就。ま。ぐ。の。老。せ。祈。禱。親。の。慾。了。無。慙。る。時。二  
文明十年六月十八日の朝。も。死。小。犬。塚。信。乃。ハ。年。来。の。志。願。か。り。多。く。時。到。り。  
額。藏。を。ね。く。下。忍。る。許。我。の。所。所。へ。赴。ん。と。き。この。年。信。乃。ハ。九。九。歳。額。藏。ハ  
廿。歳。ま。る。べ。抑。こ。の。西。雄。ハ。既。小。同。盟。合。體。と。義。を。結。び。誓。を。立。艱。難。與。し  
相。救。ひ。苦。樂。を。等。し。せ。ん。と。の。と。ま。ろ。ハ。信。義。の。郷。あり。身。ハ。亦。汚。吏。の家。小  
在。と。人。目。を。る。ハ。睦。か。を。額。藏。ハ。信。乃。を。識。り。信。乃。ハ。額。藏。を。骨。と。も。せ。り。  
この。故。好。知。智。小。長。ら。墓。六。も。孤。疑。ま。れ。龜。條。の。ま。る。額。藏。疑。り。を。密

議の席。ゆ。は。せ。く。此。度。信。乃。が。許。我。へ。申。後。者。小。と。く。遣。せ。わ。た。不。謀。る  
る。め。れ。が。あり。か。れ。信。乃。ハ。額。藏。が。資。よ。り。害。を。脱。し。を。異。小。縣。の。年。を  
送。れ。り。こ。の。行。易。れ。と。似。く。甚。難。り。假。涼。の。所。行。ぶ。心。小。あ。ら。ぬ。作。る。が  
多。小。出。辞。小。洩。く。遂。小。あ。ら。ぬ。め。あ。る。小。嫌。忌。の。中。小。八。九。年。それ。と。人。小。曉  
ら。と。さ。る。と。え。智。術。の。致。を。呀。る。と。も。その。信。乃。の。義。を。神。明。監。と。天。の。祐。ふ  
あ。ら。せ。ら。れ。り。け。あ。あ。つ。と。あ。ら。ん。と。ま。る。額。藏。ハ。こ。の。年。来。竊。小。信。乃。が。藏  
書。を。借。り。經。籍。史。傳。兵。書。の。類。を。あ。ら。と。れ。と。懐。め。又。あ。ら。と。れ。草。籠。の。底。小  
藏。め。く。草。野。小。出。山。林。小。入。る。小。傷。小。人。の。ま。き。折。を。讀。誦。せ。ば。と。い。ふ。と。あ。り。唯  
文。事。の。と。あ。ら。と。木。を。伐。る。と。た。小。斧。成。り。大。刀。と。ま。を。試。し。草。を。刈。と。死。ハ  
鎌。を。り。長。刀。の。技。を。試。し。或。ハ。業。山。子。の。弓。を。り。射。藝。を。自。ほ。し。或。ハ。牧。の  
新。駒。を。り。踏。り。自然。小。騎。馬。を。習。は。り。あ。ら。と。人。と。且。成。る。と。但。それ

八代傳三朝卷三  
十一  
山青堂藏

替力あるは隠さくもあらず墓六龜條ホハ僅小と其成のそれり。よりて  
 此度中途までよく信乃と刺入る。額藏あつてハ叶ハも。その腹心を告ぐる  
 ち。それとも額藏ハいまだこの條の主命を信乃又密語又違ふり死か  
 而雄ハ先ホ主後よりあり。里を出離んとして死額藏ガハあつて母の  
 墳墓ハこのほりあり。畔ハあり日と累る旅あつてもありて告んとあふん  
 立よつてあつてと誘引へが信乃ゆめく。寔ハ然なり。某ハきの菩提院へ系  
 詣。親の墓ハ別を告が。ふかくは事の多くと。あふんガ母弟の墓を漏  
 せり。既ハ義を結びふあふんガ親ハ日ハ親ハいので久詣さる。死さふとく  
 西人連拉く黎明鴉のころ。比田の畔を右のく。三町あり。進ハ入。是  
 注連引繞。一株の榎樹あり。このほり。則額藏ガ母の墓ハ當時。遊  
 むく。身やう。墓六龜條とせよ。棄るが如くこの田の畔へ瘞さる。り

け。墓石を建べくもあらず。かく額藏ハ年十可の時より。一。棺は  
 これを歎く。抱う。墓碑を建るの資料をたれば。竟ハ一計を設け。形ハ口ハ  
 用意。一。有。一夕。潛。一。件の榎へ攀登り。一條の注連をこの梢まで掛り  
 ける。次の日。その田を耕さる。これを。て。敬。其。怪。と。彼。小。告。此。小。報。小。驚  
 嘆。せ。る。め。も。あ。り。こ。ハ。全。く。こ。の。樹。ハ。又。の。あ。る。故。飲。さ。る。を。樹。下。あ。る  
 土饅頭亡者ガ祠堂をこへる。あふん。か。奇。特。あ。る。成。人。と。ち。捨。ち。ふ  
 出宗あふん。と。せ。り。か。せ。り。と。罵。り。田。主。ハ。さ。り。あり。近。鄰。の。莊。客。們。各。此。の。錢。を  
 中。と。彼。土。饅。頭。の。頂。小。細。小。る。充。倉。を。建。立。一。又。毎。年。の。春。秋。ハ。注。連。と  
 新。し。と。其。榎。之。伐。る。と。あ。り。そ。成。彼。此。ハ。傳。傳。め。く。詣。る。人。多。く。れ。誰。ハ。小。ハ  
 る。この神ハ婦人の諸病を瘥。め。と。正。ハ。小。語。り。つ。て。く。禱。る。小。果。一。と。利  
 益。あ。り。よ。り。こ。の。墳。を。行。帰。塚。と。唱。り。さ。る。か。よ。殘。忍。無。慚。の。墓。六。龜。條。れ。た。



女大権現  
願主

女大権現

行世屋



大権現  
願主

童子の孝  
感え  
旅魂  
を  
旅魂  
席食

八代傳三車卷三

八代傳三車卷三

衆人渴仰の応報のちとて志ひの崇めんとせんとやどひんをいふも赤倉と建る  
 と見銭を出し客は米一俵宛とせけり。宜し額藏が計る呀一点も  
 違はざり母の墳塋を喪ざるの事とて遂は田中は苗食と亡塊の歎ひさへ  
 推量らるゝ感あつて是ハこれ三尺の童子の智恵に成るめう。亦孝感  
 のあつち。老々一むの呀るべし。抑この一奇異ハ信乃が八房の梅と同日の  
 談ゆ。事ハその前年あり。さうは今もいふ小説出せるハ是より後乃  
 物語。よく額藏がふ及べらる。題了問話再説信乃ハ行婦の墳の事。  
 豫く使けとも今ゆふ母の薄命その子の孝感ことハ不及とつふよらん。  
 額藏を先よ立て共侶は頼をつれ祈念の中懐舊の涙を禁めか秘より  
 け。かくあえはあふささふ西人齊一身を起し。さひ絶てぞふ鳥の巢  
 鴨を左邊小入久と跡ハ濁さぬ石神井の流は添やく西个原田畑を過る

夏の雨の追れ々兼輪の笠をり石濱村に舟をもち。稍も渡り墨田河その  
 樹下の涼しゆの雲時々そ柳嶋の下総と人ハとる及遥る許我の里。  
 今宵の宿りへしそれけり。さる程信乃額藏ハこの日十三四里の路を走り。  
 栗橋の驛は宿りし。この如より許我の里へその途四里は足さるけり。莊  
 官が人をし。跟さるるそのやと豫く之ハ途をさ。聊も雑談せむとども  
 さふあつまで疑へる事とて。幸しく相宿の旅客もあると。さふ西人心を安  
 くし絶へ久しれ閑談は共ハ長途の疲労をおぼえを當下信乃も額藏は  
 神宮河の支の趣。暮六が為体土太郎がさへ。あちもさ告志う。額藏  
 仰り小頭を傾け。さへ水は傾托。和君を亡ん。謀るるるる危り  
 一。驚嘆を信乃又且く尋思。害心かくのどくさふ又何ホの故あり。く  
 彼人年來懸念せし。宝刀のる成多ひ絶く。さふ成ハ許我へ遣る中。さふ只

渡路を宮六に遺嫁せん為の御許我へあれと仰り。八日か心放させ。
 神宮河も害せん為の御成らるる有ふ。こゝろ虎穴を脱とて。いへば
 額藏隠れちり掉し。否それのいふありと。神宮河の漢獵也。勸めて許
 我へ起らせし。孰も和君を殺し。その宝刀を奪ふべく。所領の田園を
 還さるべく。殿上を誓ふせん。そ成りし。昨日甲夜の留
 守の間。伯母君が潜中。某を閑室に招たせ。額藏よ。此度汝を後者
 ぬ。信乃と共に遣をよ。一大事を委んぬ。いひし。成るまじ。信乃ハ
 吾侪乃に任ふし。あまど。おのハ。過世の讐敵。よ。渠ハ親の横死を恨て。
 こゝろ良人を仇と。竈ひ折し。八寝首を搔んと。こゝろ小刀を磨く。そ成れる
 のハ。吾侪の。然。バ。又。定。め。ら。る。ま。じ。血。を。流。し。一。家。の。恥。辱。と。
 せ。し。け。れ。ば。渠。今。許。我。へ。送。れ。し。事。成。ら。
 ざ。ら。ば。身。を。懸。け。し。け。れ。ば。良。人。を。怨。む。害。心。日。来。ま。さ。し。任。を。不。便。と。
 せ。し。け。れ。ば。天。の。換。り。と。し。て。汝。を。懸。む。途。中。と。由。利。を。窺。ひ。只。
 一。刀。小。刺。殺。せ。し。死。骸。を。穴。に。埋。め。し。渠。が。両。刀。を。奪。ひ。し。竊。り。て。去。り。
 吾侪。よ。ん。せ。し。此。の。路。費。も。あ。げ。し。バ。そ。れ。の。汝。が。得。し。せ。し。ま。は。し。の。密。事。を。
 果。し。と。し。せ。し。け。れ。ば。翁。は。勸。め。し。し。て。汝。を。誓。ふ。ま。じ。と。し。て。一。等。閑。ま。
 ち。ろ。ろ。汝。ハ。幼。稚。と。し。し。使。ひ。熟。し。し。小。厮。を。遣。し。し。も。不。便。と。し。し。吾。
 侪。の。悪。報。も。人。の。伯。母。を。殺。し。し。任。を。殺。し。し。天。の。為。し。汝。ハ。
 主。の。為。し。忠。義。の。二。字。を。亡。し。し。ま。は。し。の。背。ぬ。を。遣。し。し。と。し。し。中。
 こゝろ。信。乃。は。疑。せ。し。と。し。し。汝。が。外。に。こ。の。一。大。事。を。任。し。し。の。い。ふ。ま。じ。
 と。し。し。口。説。は。し。し。其。言。小。利。を。示。し。し。と。し。し。浅。ま。し。と。し。し。人。と。亂。
 色。を。あ。は。し。し。け。れ。ば。大。塚。殿。の。迷。恨。あ。り。し。年。來。の。鬱。憤。を。散。



さんごこの時あり。事成らば娘さるを賜人とまぐ宣はさる仰ふ侍りたるあふ。命も絶く惜もど適為課せゆんと真一をふ小諾ひく伯母の前飲ひ大くさる。さるる人ふ女が折し腰に帶る刃ハ切味心とさ。此ハ見こが父匠作大人護身刀ふせよう。こが小賜さる短刀あり。桐一文字と唱へ。鏡刀ふればその徳あふん。これを汝小貸づれぞ。信乃ふより我告されハ認る疑ふふあふ人の事ぬ留小これけり。まねとひうけく遠く刀の囊の初とれく。この短刀を授けり。主人夫婦の謀る所かのどく。とれハ和君と牛遣さるあふを偏亡んとけり。小あり。この桐一文字ハ和君の祖父匠作の像見よ。こをこいん人としてよとれ。信乃ハ左右のふ受く。つくと見く額蔵がほり小置く嘆息。祖父ハ忠義の武士を侍り。その女児あり。こが伯母ハあふくかまを腹たさねき。二親のち後ハ叔伯

母ありと選りためあり。とを人ハこが刀ハこいと表裏あり。仇の家小を置とも。かまぐさる移く謀るんや。さるけけあまぐ恙さるハ皆是ハ小の賜あり。こが父末期の教訓。こが奴夫婦漸志改めく。実小汝を憐ま。汝由亦誠心り。仕へく養育の恩。美小報へよ。又その害心。已ざり。遂に御小御さる。ハ宝刀を抱えく。とや去れ。五年七年養へる。とも。汝ハ大塚氏の嫡孫。さ。墓六が職禄ハ汝が祖父の賜。その禄よりて人とさる。とも伯母夫の恩。ハあふ。と報り。去れ。と。そは不義と。いふ。へ。さる。の理。義を。さる。と。の。今。小。符。合。を。先。見。か。く。ま。ぐ。灼。然。さ。る。大人ハ九夫。と。あ。ふ。さ。る。け。り。九年の同居。ハ衣食之。野。指。の田園を横領。せ。と。こ。が。刀。を。帶。る。物。の。ま。け。と。彼。人。の。禄。を。食。ふ。あ。ふ。今。み。と。れ。ら。の。身。退。く。は。潔。し。且。こ。の。宝。刀。幸。小。護。て。失。ふ。小。

手を後何ぞを 慙れ誰を 恨ん天運を 小循環とて 青雲の志を 治るべき  
 時節到来せり 冀ハ大川ぬ 共ニ許我へ 糸玉更あん方と 且と力を 勤  
 しく 彼君を 佐るが 西管領中 計る不足と 豈あらざるや と 額と合し  
 志のびく 小説勸進が 額藏傳と 沈吟し 和君のうへ 勿論之某ハ ちか  
 星裏小母の 終焉小社官の 残忍あると 尤恨むべし 且當時某黄童  
 ありと 勢ひのつむ せんまざる 軈そその家の 小厮に せよとて 遂亦今日  
 到れり ちかどもの 一碗の糧 一領の衣の外 又定めたる 給銀るけ ばその恩  
 義ハ 薄く ぶしや 恩義ハ 高くとて 其家の糧を けり 人とありて 主  
 後あり 非義非道 又與せよ 主の密吏を 兼引るべし 洩と 和君と  
 共ニ 走らば 且由亦 不美の奴 なるべし かくて 大丈夫と せよとて 和君ハ 許  
 我へ 赴れ 某ハ 其の曉 又袂を 分ちて 大塚へ 入りぬ ぬけり 且と 八両件

の利あり 某非道の 主人は 負を 又潰路との 心操 昨夕 夕多り 盗竊し しく  
 感し ちか 所へ 怜悧とし 婦人の 情通ふ 不慮の 行心 あり 某竊し これを  
 資と 為し 謀らん 如此 ちか 死ハ 和君が 入節 婦を 棄るの 悪評 するん  
 斯計り 不謀く 後某明く 地は 身の 暇を 賜り 主家と 辞し 許我 糸  
 ら 今 共侶 又 走ら 不勝 たり 亦 可ら ざるや と 密語 信乃ハ 頻々 感佩し 説  
 得る 理あり 然る ちか ちか 其れを 撃む ごとく 還ら 必禍 ありんと 咎め  
 莞尔と 笑ふ これらの 心 中と 其れ 某ハ 少許の 傷け 浅瘡を  
 負る 如く 見せ ちか ちか 其れハ 犬塚 殿を 撃んと せし 不取 たりと 殺  
 立ち ちか ちか 斯瘡を 負ひ ぬと 欺る 夫 婦 ちか 夫 婦 ちか 夫 婦 ちか 夫 婦  
 らん 只 某 不任 せ 且と 他 ちか ちか 説 示 せ 信 乃ハ 且 ちか 感謝 堪 ざるや  
 偽瘡 ちか ちか ちか 傷 させ んる 心 ちか ちか 限 り 且 推 辞 婦 人 の 仁 と

せられん教ふ悖ゆつとのふ小額藏致びら。密談既二果一ふ。あつく衣を引被  
たぐ。霎時寝ふ就よけり。

第廿六回

權を弄る墨宦督夕を促ま  
殺致示して頑父再離孤羞む

たや曉々の鯨音の敬馬ささく。西人齊一起あつ支度形の如く整へて。  
いそろ旅宿を出しと有撃別の惜れハ額藏ハ天の明果るまで信乃と  
送ゆんとく詩我のく又進んとく信乃ハ額藏を送ゆんとく江戸のく又還  
らんとく仰慕と辞讓はあつと東天をくふけは今ハ送ふよりあつと。  
そがや列松の蔭は立在額藏声を低うと和君許我へ赴丸多事大  
く成就せん某嘗人又問ハ結城里見の諸大將ハ元來許我敢の御  
方あるとく各自國は在るより。只冊足の勢は張るのと。獨横堀史

在村ハ成氏朝臣の家宰あり。賞罰黜陟この人の隨意せむとのふとあつと。

と知るめいひはつり。そのつらふころあつと後と告れハ信乃ハうち点頭某も  
そのるハ豫てより傳聞。彼処へあつと由緒を述亡夫の遺志を披あつとこの  
宝刀を獻り用ひられるが留る。ハ又野水舟横り。或ハ左右のふ小阻ま。  
或ハ權臣能を招き賄賂よとる人を用ひハ速ふまの祖の祖父の後を  
いまご仕へむ。いあ人の明君ハ臣を擇く使ふとつり。今の世ハ臣も亦よろしく  
君を擇ふべし。用ひるまはと身を主んと欲する地許我敢ふの限る。  
へつと。時宜ふ任せんとあつと。額藏感激。現潔死言葉乗る。  
志氣あるめハ誰かか。願ふ穴竊ハ消息と。その進退とあつと  
又某も遠くも再會を期ま死えと。ハ信乃ハ左のふ。笠と右のふと  
直。然らばあつと袂を分て盛暑よと。烈と。あつと愛顧る人。

送<sup>ま</sup>は心緒述<sup>ま</sup>あも竟<sup>つ</sup>ふ東西<sup>とうざい</sup>は別<sup>わか</sup>はなり。安<sup>やす</sup>下<sup>した</sup>某<sup>その</sup>生<sup>なま</sup>再<sup>また</sup>説<sup>せ</sup>墓<sup>かぶ</sup>六<sup>む</sup>龜<sup>かめ</sup>條<sup>ぢょう</sup>ホ<sup>ほ</sup>既<sup>すで</sup>は  
 信<sup>のり</sup>乃<sup>の</sup>を<sup>を</sup>出<sup>だ</sup>し遣<sup>や</sup>りて。あもハ公<sup>こう</sup>を安<sup>やす</sup>くし。且<sup>かつ</sup>共<sup>とも</sup>侶<sup>りょ</sup>ハ目<sup>め</sup>并<sup>なら</sup>び。信<sup>のり</sup>乃<sup>の</sup>ハ許<sup>こ</sup>我<sup>が</sup>  
 まぐ遣<sup>や</sup>り著<sup>つ</sup>げむ。途<sup>みち</sup>すく額<sup>がく</sup>藏<sup>ざう</sup>ハ大<sup>おほ</sup>く結果<sup>けつ</sup>人<sup>にん</sup>ハ額<sup>がく</sup>花<sup>か</sup>が為<sup>ため</sup>損<sup>と</sup>らる。  
 返<sup>かへ</sup>撃<sup>う</sup>めせむとも。彼<sup>かの</sup>一<sup>いつ</sup>刀<sup>たう</sup>ハ賈<sup>が</sup>物<sup>ぶつ</sup>ちまふ。許<sup>こ</sup>我<sup>が</sup>敏<sup>みん</sup>へも。何<sup>なに</sup>も成<sup>なり</sup>す。  
 まぐハ龜<sup>かめ</sup>忽<sup>とつ</sup>の罪<sup>ざい</sup>科<sup>か</sup>脱<sup>だつ</sup>れ。縛<sup>ばく</sup>首<sup>しゆ</sup>を刎<sup>を</sup>らる。そまもさかもあれ。  
 下<sup>した</sup>まきくゆら。生<sup>なま</sup>てらる。べくもあもぬ。信<sup>のり</sup>乃<sup>の</sup>がハ後<sup>ご</sup>かき。只<sup>ただ</sup>使<sup>し</sup>る。ハ  
 濱<sup>はま</sup>路<sup>ぢ</sup>が病<sup>びやう</sup>著<sup>つ</sup>之<sup>し</sup>。聘<sup>へい</sup>礼<sup>れい</sup>物<sup>ぶつ</sup>を受<sup>う</sup>け。いま。幾<sup>いく</sup>日<sup>にち</sup>も歴<sup>れき</sup>る。軍<sup>ぐん</sup>木<sup>ぼく</sup>ぬ。が  
 密<sup>みつ</sup>書<sup>しょ</sup>の。毎<sup>まい</sup>日<sup>にち</sup>ハ催<sup>さい</sup>促<sup>そく</sup>せむ。小<sup>せう</sup>既<sup>すで</sup>ハ信<sup>のり</sup>乃<sup>の</sup>が。どる。りて。屋<sup>や</sup>と許<sup>こ</sup>す。  
 つら。あもさ。濱<sup>はま</sup>路<sup>ぢ</sup>を慰<sup>なぐさ</sup>め。賺<sup>まか</sup>し。疾<sup>しやく</sup>遣<sup>や</sup>嫁<sup>よめ</sup>。まふ。ふさ。の。あ。  
 竊<sup>ひそ</sup>ハ商<sup>しょう</sup>量<sup>りやう</sup>さる。おろ。又<sup>また</sup>五<sup>ご</sup>倍<sup>ばい</sup>ニ。使<sup>し</sup>札<sup>さつ</sup>来<sup>き</sup>れ。墓<sup>かぶ</sup>六<sup>む</sup>ハ忙<sup>まは</sup>しく。封<sup>ふう</sup>皮<sup>ひ</sup>を折<sup>を</sup>り。  
 らく。これ。を。こ。ふ。ま。の。め。か。ら。ぬ。緑<sup>ろく</sup>女<sup>にょ</sup>の催<sup>さい</sup>促<sup>そく</sup>婚<sup>こん</sup>。婚<sup>こん</sup>。帶<sup>たい</sup>の。よ。成<sup>せ</sup>續<sup>ぞく</sup>する。  
 怒<sup>ど</sup>氣<sup>き</sup>文<sup>ぶん</sup>面<sup>めん</sup>ハ。あ。つ。れ。と。は。つ。ふ。十<sup>じゅう</sup>二<sup>に</sup>分<sup>ぶん</sup>の鬼<sup>おに</sup>胎<sup>たい</sup>を抱<sup>かか</sup>り。書<sup>しよ</sup>翰<sup>わん</sup>を。龜<sup>かめ</sup>條<sup>ぢょう</sup>ハ  
 指<sup>さし</sup>示<sup>し</sup>。彼<sup>かの</sup>方<sup>はう</sup>が。ぬ。の。性<sup>せい</sup>急<sup>きゆう</sup>さる。こ。の。意<sup>い</sup>欲<sup>よく</sup>知<sup>ち</sup>らる。似<sup>に</sup>と。信<sup>のり</sup>乃<sup>の</sup>を。出<sup>だ</sup>し。遣<sup>や</sup>り  
 と。ま。も。か。も。ち。さ。ら。は。ま。べ。れ。ゆ。ら。く。面<sup>めん</sup>談<sup>だん</sup>せ。は。例<sup>れい</sup>の袴<sup>はこ</sup>を。お。ま。い。で  
 い。で。と。い。ひ。り。納<sup>な</sup>戸<sup>こ</sup>の。ふ。赴<sup>き</sup>け。龜<sup>かめ</sup>條<sup>ぢょう</sup>ハ。先<sup>まづ</sup>は。衣<sup>い</sup>櫃<sup>び</sup>の。蓋<sup>かき</sup>と。り。あ。ま。を。麻<sup>あし</sup>  
 衣<sup>い</sup>袴<sup>はこ</sup>。此<sup>こゝ</sup>。彼<sup>かの</sup>と。引<sup>ひ</sup>か。ら。ち。被<sup>か</sup>さ。る。墓<sup>かぶ</sup>六<sup>む</sup>ハ。帶<sup>たい</sup>引<sup>ひ</sup>結<sup>むす</sup>ひ。袴<sup>はこ</sup>を。穿<sup>き</sup>穿<sup>き</sup>。刀<sup>たう</sup>を。引<sup>ひ</sup>  
 握<sup>にぎ</sup>外<sup>がい</sup>面<sup>めん</sup>は。立<sup>た</sup>出<sup>で</sup>る。五<sup>ご</sup>倍<sup>ばい</sup>ニ。使<sup>し</sup>を。勞<sup>らう</sup>ひ。あ。ん。答<sup>こた</sup>ハ。某<sup>その</sup>が。罷<sup>ばい</sup>出<sup>で</sup>る。ま。ま。は。べ。誘<sup>いざ</sup>  
 多<sup>おほ</sup>と。先<sup>まづ</sup>ハ。立<sup>た</sup>ち。軍<sup>ぐん</sup>木<sup>ぼく</sup>が。宿<sup>しゆく</sup>所<sup>じよ</sup>へ。赴<sup>き</sup>れ。け。さ。身<sup>み</sup>程<sup>ほど</sup>ハ。龜<sup>かめ</sup>條<sup>ぢょう</sup>ハ。か。ん。か。や  
 あ。よ。ん。と。ま。く。心<sup>こゝろ</sup>ひ。せ。か。と。ぬ。心<sup>こゝろ</sup>から。ふ。い。く。消<sup>しゆ</sup>ハ。か。ら。夏<sup>なつ</sup>の。日<sup>ひ</sup>ハ。傾<sup>かた</sup>く  
 ま。ぐ。小<sup>せう</sup>還<sup>かへ</sup>る。ぬ。夫<sup>ふ</sup>を。い。ら。ふ。と。待<sup>まち</sup>と。び。く。ち。仰<sup>あや</sup>ぐ。天<sup>あま</sup>ハ。夕<sup>ゆふ</sup>立<sup>た</sup>の。外<sup>がい</sup>へ。降<sup>お</sup>り。け。ん。雲<sup>うゑ</sup>  
 霄<sup>せう</sup>ハ。横<sup>よこ</sup>は。と。日<sup>ひ</sup>の。影<sup>かげ</sup>見<sup>み</sup>。六<sup>む</sup>遺<sup>い</sup>嫁<sup>よめ</sup>ハ。思<sup>おも</sup>む。申<sup>まう</sup>の。時<sup>とき</sup>生<sup>なま</sup>體<sup>たい</sup>乾<sup>か</sup>く。ち。ち。ね。と。も  
 い。そ。く。還<sup>かへ</sup>る。墓<sup>かぶ</sup>六<sup>む</sup>ハ。汗<sup>あせ</sup>ハ。塵<sup>ちん</sup>埃<sup>い</sup>を。除<sup>た</sup>る。背<sup>せい</sup>門<sup>もん</sup>より。の。を。龜<sup>かめ</sup>條<sup>ぢょう</sup>ハ。と。見<sup>み</sup>て

八代傳三車卷三  
 十九  
 〇山崎堂藏

軀みく出迎へるどてやかくハ屋やかり。家いへもさるさふ堪たむまがたた炎えん暑じゆささとと推お  
 量りらるる。彼方あつちの首尾くびびハいふいふふと問とハ。墓ひた六む微笑わくく。彼知あつちの一いち裁ざいハ甚い妙めうええハ  
 緩ゆるや小譚こたんふふ。ささも熱あつと帯解おびを捨すく。汗あせの麻衣あさぎぬ脱ぬ更さら々々。端居たんぐをまららハ擔か  
 迎むかへ妻つまハ團扇うちあをとり揚あぐ。背そでのくふふ立たかり。ああぐを墓ひた六むコこううとと。龜かめ條じょう  
 措かきね殊こと更さらハ件けんの一いち裁ざいをいれれととスス。斯ごと安然あんぜんととハはとととと。ままんんををややああん  
 身み小こ飲のせんせん。曩なふふとと媒ま灼しやく許こ起お々々。今け朝さ稍や信ま乃のをを遠と離りるる。夢ゆめての  
 苦心くしんをを密ひそ語かたく。且な潰つぶ路ぢガガ病い著つ々々。ああちちももああるる告ついいふふ軍ぐん木ぼくぬぬ。ゆゆ果ぐくく。か  
 れれハハ共ともハハ後ご中ちゆう。又また新婦しんぷ人にんの病い著つ々々。ハハ車くるまササああるるとともも休やすみみをを婚こん姻いんの遅速そくハ  
 一いち存ぞん小せう定ていめめるる。殿上てんじやう敷し告つべべくくハハ且かつくくハハ俟まち多たちちよよとといいてて来きんとと會あ  
 釋しやくとと一いち僕ぼくをを招まくく出でくく。田たぬぬかかくく俟まちととちちちちはは大おほ約やく一いち响ひびああるる。あありりめめとと軍ぐん木ぼくぬぬ。  
 如ごとりり来きるる。ささててりりああるる。事ことの趣おもむ巨きゆう細こハハ殿上てんじやう敷し告ついいふふ。彼あつち人にん飲のびび大おほととななるるととをを。

新婦しんぷ人にんハハ病い著つ々々。小せう臥ふりりとともも。昨け今けののりりとと。休やすみみハハ風かぜひひららふふ人にんをを人にん為なるるハハ  
 疾い迎むかへへるる。医い療りやう者しや病い等と困くるる。皆みなががああるる湯ゆ液えきをを勸すすめめるる。即すなは功こうをを奏そうるる  
 の方かたああるる。ささららああとともも。主君ぬしきみ在あ在あ城しろ。ささららああるるハハいいままごごのの婚こん姻いんの願狀げんじやうととままるる  
 らら。且かつごご父ちち身みままりりてていいままごご。暮く月げつををさされれハハ晴はるる。婚こん姻いんハハ悔くみみのあららとといいふふ。  
 首略せうりやくをを宗むねととくく。潜ひそかかるるををよよととままととるる。小せう明めい日にちハハ真まこと小せう黄わう道だう吉きち日にちハハよよららもも皆みな入いれれをを  
 相兼あひあるる。聖せいのの宵よ亥げ中ちゆうのの比ひ及およぶぶ。ここととはは莊官せうくわんのの宿しゆく所しよハハ赴おもむけけ穴あな竊せきやくハハ新婦しんぷ人にんとと迎むかへへるる  
 へへ。かかてて日ひをを歴れすす。婚こん縁えんのの免めん許きょをを請こもも。遂ついにははああるるとといいふふ。ここととハハ此こゝ俗よハハいいふふ客きやく  
 介けいのの新婦しんぷささららハハ衣い裳しやう調てう度どををとと。當たう坐ざ當たう要やうのの物ものハハ聖せいのの黄わう昏こんハハああるる  
 ららるる。ここのの趣おもむ疾い疾い傳でんへへるる。ああるるゆゆささくくゆゆららせせとと。叮てい嚀ねい小せう示しささららりり。わわいい目めをを  
 のの膏こう小せう故こ障しやうああららハハ独ど和わ殿でんのの人にんののささららとといいふふ。伐は柯かハハたたらら某まことハハ腹はらをを切きるる。  
 外そとへへるる。かかららハハ當たう晚ばんのの勸すす盃さいハハ首略せうりやく小せう後ごとと。新婦しんぷ人にんをを乗のりり。轎きやう子こハハ形かたちのの如ごとく

準備く時刻を違ふへくむとらうか推辞く仰けりゆひぬまが是あま  
 ず火急あり。濱路がそとまてむてそとれたや量くむか装ひもせ化粧でも  
 厭ひまふまてむかむか仕と兼引く退きり。今も濱路が迷ひよ  
 志づく。ゆふとらう福轉く。禍一家よ及ぶ。女もぬハ口こそ。あん角  
 目彼妙くもえく。あてて見え。といつた龜條うち点所莊官の女兒でも  
 陣代敷を智小まもまは綺羅も調度も分よ起る。物の波女の多かえん  
 と豫くまてむかも亦曾福病がけり。小智敷の性急く。本錢の没す  
 ぬふゆきとも今ゆあて今濱路が納めをえれけり。かかか賺く  
 り成らむかあん角亦云云小威く人と耳語が墓六のうと瓜栗屋そふひ  
 れまも物あり。とくゆれ福といそが六龜條へころる果く濱路が臥房へ  
 赴たり。さゆ復し濱路ハ信乃がるをのく。あひハ胸は結とく。臥房より小

夏の日も。日か芳ひらの秋の暮心悲くも。蟬の鳴音立限る。腰屏風  
 臥く又起く。又起く。要時小横のれを。浩如く龜條を障子を  
 さらりと引開く。濱路がほりよ進より。土用さるふ何のぞ斯坐公龍て  
 なまろ抱心つれるきりのともや。といひつ。顔をさ。歌死濱路ハまてそ  
 まるよか食るのいづか。まてそ。飲好しれ抱あふ。何れも進らせん生平  
 ぬの嗜ぬ酒へとも。かる折る。某よけり。氣味深中よ志もむ。信乃が起  
 行ふかららひく。この三四日ハ事のまれば。疲勞く今朝ハのれ。起る  
 まてそ。頭あふ。ぬあん角の病著る。休る隙もあ。あれも嚮高よ  
 入るより。湯液の效のあらむ。飲大く。色も。かて。六疔。瘡も  
 多。病類の病類の心より。度るも多かり。吾倚ハ醫師も。松た。その  
 病症を猜たり。その人み。人小あ。ぬ信乃が。唐もあり。るな。ん。さ。で。ハ

親のかひゆるれ片ありひゆて侍るるは送小稚かり一時ひ名つけしるあはれ  
 あり後といふせん渠も親の横死を恨まら。年来大人を慕六を仇と竈へハ  
 心ふ刃を磨ぐと久し。その大悪心漸發覺て人をもさくひの隨小里の衆人ハ  
 疎れ。大塚の住ひ叶を許我へまると偽り。實ハ逐電走つる。さう  
 より前夜に神宮河を渡舟竊に大人を突落し。その刃も續く跳  
 入。推沈んとつとも。楫取の貨ふより。大人ハ恙ありと。さうハ鄙言ハ  
 以行かひの駄賃とせん小あらんむらん母がひと虚言致疑くハ額流が  
 還る渠は同身骨肉の伯母恩高た伯母夫よりを亦く。さゆ嗚呼の癖  
 者か。さう一宵も俱寐せぬ。その名なつたこの妻を。ゆふく。あふべ虎  
 狼ももろく。死偽夫は操を立病煩く。二親ハ苦勞を被るを貞女と  
 かんや。ゆの道理を辨へ。疾むハ絶え。彼畜生より百倍えあぐ。

美男子小遺嫁せん。あんがふあぐ告さると。その婿かひハ別人あまをいぬ  
 月か宿せ。陣代に献上宮六め。本日あんが小懸想。相忘。かぬ男を  
 厭む。枉くあんがを娶んと。媒妁をりく。ゆせむひれその媒妁も厭む。さ  
 属役の軍木ぬ。その刃上の軽重ハ彼挑灯と洪鐘あるとも。熟淡と。ハ  
 一家の僥倖より年波の二親ま。さうあぐ。あんがが孝行否といふ。さ  
 ち。後ども。さうハ昔人氣質。あんがの胸を揣り。憎。と。信乃も  
 ち。此彼は遠慮。再三辞退。さう信乃が逐電走つる。さや。さ  
 あり。軍木ぬより。弥の催促。今ハ股。路も。已。成。さ。け。引。ハ。婚。姻。ハ  
 近。あ。ん。が。さ。う。就。く。も。その病著を。と。瘡。り。二親の心。休。へ。さ。う。し。  
 今の世。さ。二才。見。ても。慾。を。さ。ぬ。は。め。を。さ。め。く。後悔。さ。め。た。の。と。辞  
 巧。さ。ら。あ。れ。ハ。濱。路。ハ。忽。地。膽。怯。さ。く。堪。ま。や。と。泣。沈。む。胸。ハ。板。屋。の。玉。霰。

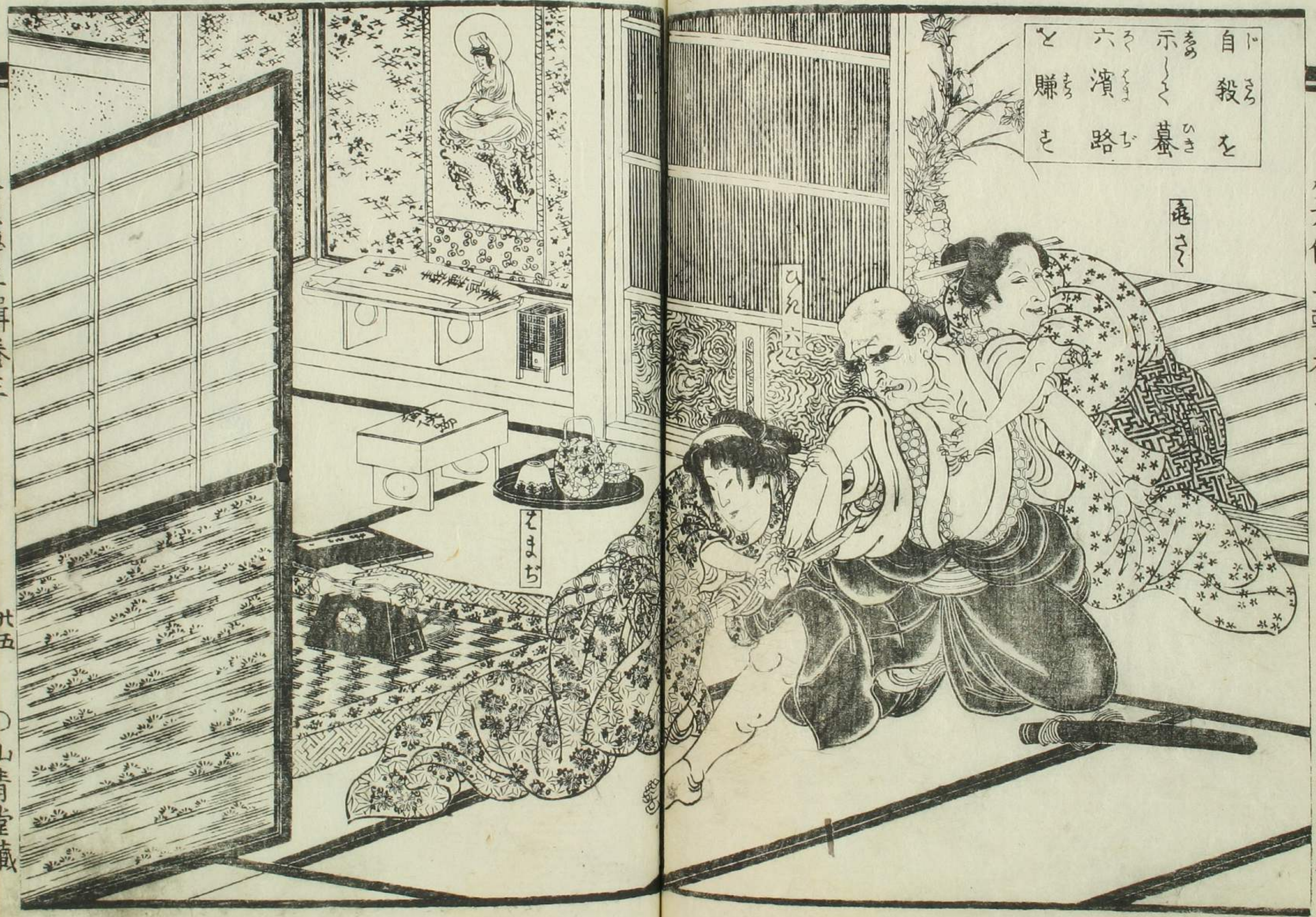
碎るる小降そぐ。涙の雨小乾ぬ袖の朽る朽よ。が良人よ何濡衣を被せと  
 へん。いづく釋んと篋糸の弱るつろ成激と。やうく小頭を擡寔小ひかけ  
 する仇結ひする替縁はさるるくく侍り。とぞりまうさる親の。ひひぬふ  
 似く不孝よふ人の子の道る。と叱せぬ。致さる侍り。とぞ推碎るが  
 親の。め子。このろよ侍り。大塚ゆをあ。さる小室。さる。舊恨心と忘れ  
 ぬぬぬ疑ひの解ぬ。或ひ侍る。十年小迫く彼人と。むら宿り小生。月一  
 かど只二が。小疎略。さる進止ひ。さる悪心。あ。さる。むら宿り。侍り  
 ぬ。とぞ。さる。彼人の中心を。家。あ。ぬ人が。さる。つり。ひ。あ。さる。や  
 する。怒。あ。め。の。諷言。小侍る。めり。さる。人。さる。二。さる。の。さる。小稱。さ。と。追遣ひ  
 ぬ。と。一。旦。結。び。縁。あ。さる。さる。が。ぬ。小夫。と。ひ。ぬ。ぬ。大塚。ゆ。の。外。ぬ。り。又  
 彼人の故。あ。さる。さる。や。逐電。さ。さる。と。離別。状。を。さる。さる。他。一。夫。小見。え。さる。は。

其を密夫。小侍る。さる。と。さる。淫婦。は。侍る。さる。と。譬。言。ハ。親。の。仰。え。と。夫。婦。の。道。ハ。殊  
 さ。さ。小。重。れ。が。さる。の。小。夜。衣。つ。ま。代。か。さる。さる。推。が。ぬ。よ。不。美。の。富。ま。さ。成。樂。ふ。へ。死  
 又。彼。人。さ。る。名。の。さる。と。さる。俱。寐。せ。ぬ。夫。人。替。姻。せ。後。と。室。ハ。ま。れ。た。初。こ。さ。る。ハ。を  
 妻。一。く。職。禄。を。さ。讓。ら。ん。と。室。ハ。せ。り。ハ。親。の。ぬ。さ。る。一。つ。小。侍。さ。る。里。の。衆。人  
 媒。妁。一。さ。る。證。据。ハ。夥。あ。る。ふ。あ。さる。や。か。れ。ハ。の。ま。ご。替。姻。せ。後。と。夫。婦。さ。る。と。推  
 する。い。ぬ。つ。大塚。ゆ。が。離。別。状。を。さる。さる。處。と。さる。さる。親。の。仰。ぬ。後。ひ。さる。許  
 する。せ。ぬ。と。理。を。推。さる。い。と。も。怜。悧。く。い。ひ。と。れ。一。雄。く。い。言。葉。の。露。の。玉。小。親。の  
 威。光。さ。け。か。さ。さ。と。電。條。ハ。一。句。ゆ。出。ぎ。腹。さ。さ。さ。と。立。と。味。く。の。と。せん。と。さ。る。な。げ。よ  
 見え。一。さ。外。面。ハ。竊。聞。さる。墓。六。ハ。衝。と。進。と。入。り。て。妻。の。ほ。り。小。磯。と。坐。一。潜  
 然。と。く。鼻。さ。さ。か。と。電。條。何。ゆ。さ。さ。さ。や。濱。路。親。恥。し。ぬ。ん。が。貞。實。彼。知  
 め。と。つ。さ。さ。さ。熱。さ。さ。さ。さ。い。ひ。出。さ。さ。と。母。の。さ。さ。さ。これ。ゆ。亦。後。悔。さ。さ。小。立。さ。り。老



てよろろ慾うく。因成由成をそらち忘る。あんががぬ道ちぬ。嫉目縁を  
結びと情由えちね。恨をもせん世の常言。小親の心を子にちよと。いの成  
さや。総角より養育せ。信乃が真の人あふ。何煩惱を非殺と。き反も好と  
ひひ。八夫と憑む。あんがが迷ひ親。女才があふ。た飲渠がる。ハ恨む。甲非支あり。  
既。信乃がどどど。とて。陣代敷の懇望を推辞。小難れ。小詰の縁談長死  
物。必纏。巨樹の蔭。必栗る。不口とい。才む。あふ。忽地。妻女子小  
崇。あふ。ん。あんがが心。ハ。ち。ね。も。當坐。逃れ。小美引。ハ。け。の。亭午。の。る。あ。に。  
聘。礼物。を。そ。や。贈。ら。ま。く。且。客。分。り。く。迎。と。ん。と。本。日。を。促。を。縁。家。の。性。急。ん。  
か。心。む。め。今。小。至。く。亦。改。さ。る。と。も。そ。成。そ。が。ま。小。許。され。ん。や。背。敷。ハ。  
陣。代。り。媒。妁。ハ。庸。役。え。下。じ。怒。ぶ。この。一。郎。を。空。巢。よ。せん。由。易。く。べ。六。  
十。小。乃。ひ。く。一。家。の。滅。亡。その。命。運。よ。あ。ふ。る。と。事。を。殺。され。子。を。殺。され。く。

己亦死。い。の。竟。小。益。る。こ。こ。バ。覺。期。を。究。め。り。聘。礼。物。を。受。納。め。一。獲。忽。と  
い。と。く。こ。か。皺。腹。切。る。う。外。又。術。も。あ。南。無。阿。彌。陀。佛。と。唱。へ。由。あ。ん。を。刃。を。是  
ア。と。引。抜。く。腹。へ。突。立。ん。と。なり。一。が。龜。條。ハ。吐。嗟。と。叫。と。肘。小。携。り。禁。れ。バ。濱。路。の  
慌。忙。ひ。つ。あ。ん。憤。ハ。さ。る。も。且。この。刃。を。放。め。人。とい。ハ。頭。を。ち。掉。く。い。ま。く。放。さ。ぬ。  
殺。せ。と。狂。心。か。う。な。く。龜。條。が。抱。縮。め。く。傷。を。見。え。り。濱。路。ハ。灸。を。押。さ。如。く。  
と。む。う。ま。い。ハ。事。果。を。親。を。殺。す。も。殺。さ。ぬ。も。あ。ん。が。が。心。を。あ。ふ。あ。ん。替。あ。ら。る。  
ア。が。孝。弟。飲。鈍。一。や。と。叱。ら。ま。く。玉。を。と。決。を。婦。り。拂。ひ。よ。や。貞。女。とい。ハ。る。と。こ。  
又。唯。不。孝。の。子。と。あ。ら。ふ。い。づ。ま。入。る。道。ハ。缺。れ。ん。仰。小。後。ひ。は。る。べ。一。の。ハ。龜。條  
点。改。く。賢。死。め。の。も。伊。豆。人。信。乃。が。る。ハ。名。ひ。絶。く。殿。上。敷。へ。と。う。け。引。け。り。刃。を。納。め  
あ。う。とい。ハ。小。墓。六。卷。成。成。へ。介。ハ。濱。路。ハ。使。こ。た。ら。ま。り。傍。に。バ。れ。今。死。ん  
後。小。変。改。せ。ん。と。あ。ら。ふ。替。め。さ。る。殺。せ。と。期。を。推。せ。ハ。そ。ハ。物。体。を。死。ち。ん。疑。ひ。仰。よ



八犬傳三輯卷三

八犬傳三輯卷三

廿五  
 山崎堂藏

山崎堂藏

後ひはるゝとのふも涙より鼻を声を飲てぞ伏沈むまどぬ一りのと暮六の合  
 笑つて電條は目を注し刃を納め披れ一袷を合とて六浮雲たもやと電條ハ  
 夫のほろ成立て多きて泣沈むる濱路が背を搔拊り又湯劑を勧め子  
 小由求めのあり良は不同語の阿諛の言も巧は慰めけりか二親送代は  
 通宵首病をり一死んと必ひ決めり濱路ハ絶て便りをゆるぐも護  
 らまて夜を曉せば十九日ふり小よりこれハ今宵ハ背敷の詣末のふと  
 幼る主の蔭詰り誇らうと奴婢が口ふの閉らぬ戸障子の拭掃除釘よ  
 紙よと罵りく粘を搦音鉄槌の打ハ響音くと壁み違りぞ濱路ハそや洩ゆて  
 こハ浅きや今宵のるをこらふあはれ二親の隠しぬハ出抜てその婚姻の盃と  
 たり結せんぬるべとともかこも存命と仇一夫は伴とて豫て心ハあつては  
 うちも驕がむけの愉快ハ面色とく糸と一髪を搔拊り臥房の内は結ひ

直と髪もこの世別れの櫛の齒を挽くぬ家内の奔走この黄昏ふかり遣む  
 濱路が調度のとりあはるる或ハ饗膳酒食の儲は主後暇るれおろ電條ハ  
 たり濱路が臥房小立よとてその安否成回慰めみぐり結髪せしをんて  
 心の中竊は教び原來今宵の背入をまごまごせ秘ども洩せぬ渠あろま  
 たるやあえんたがめめ辞は似げぬハ定は少女ぞろぞろかてまのいよく  
 後中しと多ハ夫ハ密語ぬぞ暮六も亦扶けり臥房よのわけてる小  
 現より揚し束髪は西施が病る風情あり化粧ぬ夏の富士額ハこら子あ  
 ら小足あげり三國一の背入をまごまごりともその期まて告むあんと深  
 念ふ他ふる紛し又外面へ走り去彼ハをせせは休ハこれせよと罵り又焦  
 燥ハ人掃りけり護使ハ眼口は暇ありけり

里見八犬傳第三輯卷之三 終

南總里見八犬傳第三輯卷之四

東都 曲亭主人編次

第廿七回

左母二郎夜新人を畧奪す  
寂寞道人見圓塚火定は

細乾左母二郎の夜さ。神宮の夜風ふ目されん。詰早より寒熱せり。  
 この日ハハ習子も夜を中へ夕飯もたふさぐち臥さ。かゝ又その  
 次の日乃午の貝吹く比及よ心地清。まゝありふけは。却り臥草を弄め  
 つ。やぶとや口を漱んとく。外面ハ立物。ハ莊官屋敷のうらふ當り。物乃  
 響音のゆめえ。羊の終りの煤掃く如し。いと不審く。あゝるん。軀て門邊を  
 立。い。あ。見。く。回。近。く。や。ん。と。さ。う。程。よ。と。さ。ん。れ。ハ。一。個。の。莊。客。右。も。一。拵。乃  
 秋。金。を。携。左。の。ハ。五。六。根。の。夏。蘿。蔔。を。引。提。く。草。野。の。か。こ。り。ま。る。あ。り。け。り。

是則別人をもとむ。暮六が老僕背めり。あはむとあるをいへりて。目礼とて  
 けは左母二郎のやくとて。成抗くも。先生あざむく。いそぐりけ。けは土  
 用の虫拂。常よりあふ。物に。糸響の空え。彼へ。いと。辱れ。北月  
 呼れ。ほら。ふえ。より。不虫。乾ふ。ゆら。今宵。背入の。ゆへ。天井。あ。蜘蛛  
 搔拂。ひ。席薦。の。塵埃。を。打。散。戸。棧。の。修復。障子。の。張。更。毛。見。の。儲。小。り。や  
 ま。目。つ。を。鯛。む。い。そ。が。加。以。庖。厨。の。混。雜。と。尙。せ。この。蘿蔔。ハ。膾。の  
 料。小。引。り。き。月。来。の。懇。切。甲。斐。小。資。よ。来。ませ。と。ち。犬。へ。左。母。二。郎  
 驚。々。々。莊。官。の。背。あ。の。彼。犬。塚。信。乃。あ。や。彼。人。の。朝。啓。行。き。と  
 笑。う。原。来。首。途。の。日。を。延。く。俄。頃。又。皆。烟。せ。り。欬。と。問。甘。果。を。違。り  
 違。り。信。乃。の。昨。日。の。曉。方。下。懸。へ。と。赴。く。今。宵。も。皆。皆。殿。ハ。犬  
 塚。の。ま。ゆ。り。と。い。え。き。左。母。二。郎。ハ。心。は。顔。色。変。じ。く。その。背。あ。の。何

人。を。妻。より。約束。あり。て。欬。と。言。ふ。せ。り。く。同。穴。九。は。背。ぬ。ハ。蓋。を。杖。つ。け。て。現  
 理。り。膾。の。漬。と。話。説。ん。僕。も。定。ふ。え。と。後。と。皆。殿。ハ。陣。代。の。籠。上。ぬ。い。ん。り  
 ち。と。又。媒。妁。ハ。属。役。ある。軍。木。殿。も。い。り。ん。聘。礼。物。の。件。も。い。の。程。ふ。贈。ら  
 れ。ん。書。院。又。飾。え。り。あり。且。密。の。皆。烟。も。色。ハ。今。宵。亥。の。比。及。小。皆。殿。が。い。り  
 くる。来。ま。り。と。新。人。御。寮。を。伴。ひ。自。ら。と。人。の。噂。も。せ。り。氣。の。毒。ある。ハ。犬。塚  
 御。底。意。地。も。多。し。伯。母。御。夫婦。の。機。嫌。を。と。り。と。八。九。年。要。緊。系。の。時。ハ。追。遣。り  
 ま。く。彼。初。物。を。他人。の。鯉。七。五。日。生。延。う。り。口。果。報。の。あ。れ。る。よ。表。液。吸。ふ  
 づ。れ。と。い。ふ。ゆ。え。に。後。と。傷。痛。死。限。り。ある。ふ。彼。人。後。は。使。身。の。腹。も。立。ん。口。舌。も  
 蔑。らん。項。の。脂。も。な。ぬ。も。襟。は。著。後。ハ。當。世。を。と。と。由。益。の。長。物。も。小  
 時。を。殺。し。と。吐。き。出。ん。晚。又。あ。ま。せ。と。整。柄。を。再。び。肩。ふ。ら。ち。掛。く。背。門。を。さ。う  
 て。ぞ。走。去。ける。左。母。二。郎。ハ。氣。色。さ。ら。胸。を。鎮。め。く。さ。り。げ。る。心。を。い。く。も。氣。ハ

ままぬ細輪の田井小立より汲揚る水も湯と沸ん心の酸とめさる。桶  
 ひまげ引提くそま小肉は入る吸吐る呼憤激嗟嘆堪されハ何せんまも  
 つぐ。ほくくとどあかう濱路ハ信乃又推れら。いひ名つけらとあま  
 渠小今妻せらるる。是非ゆかり。そまも。曩小亀條が。これ小ひつ  
 あり。然るを何ぞや陣代の勢ひは附く約束を更改し既ニ密事を委ね  
 これを。顧ららん。おつ小いぬる日龜條が云云といひら。ハ全  
 ぞ。こまは彼一刀を搦えさせん為の。あり。この返報ハ今宵亦背の  
 賊上が。すまるとれその席上へ踏ひ。墓六夫婦が悪事を顯し。おの  
 取。か。り。と。婚姻の妨せん否。此。ハ。こ。ま。も。亦。件。の。刀。成。搦。え。ら。す。又。堂  
 つ。よ。も。ま。さ。加。梅。信。乃。が。刀。ハ。竊。は。藏。め。く。こ。ま。も。亦。あり。この。返。報。露。頭  
 せ。ハ。罪。重。か。る。この。計。策。究。く。可。ら。ぬ。又。唯。刀。の。成。隠。し。母

親が許したる。濱路が。成の。み。も。正。死。證。据。絶。く。る。や。争。ひ。訟。裁  
 とも。その。訟。を。定め。ん。陣。代。ら。誰。ゆ。あ。ゆ。べ。れ。か。れ。ハ。こ。ま。も。理。あり。と。勞  
 ち。く。功。る。死。の。も。も。賊。上。ハ。必。こ。ま。も。忌。ん。忌。ん。必。理。を。非。ハ。枉。て。獄。舎。ゆ。も  
 繫。く。獄。舎。ハ。入。ら。ま。買。殺。さ。し。ん。この。計。策。ゆ。く。拙。ハ。彼。老。婆。奴。が。つ。を  
 見。越。し。密。事。を。妻。ん。為。の。小。濱。路。を。妻。せ。ん。と。ハ。い。ふ。斯。飽。す。で。小。賺  
 さ。し。ハ。こ。ま。も。智。の。足。ら。ず。ふ。似。こ。ま。も。その。夜。さ。り。この。刀。の。奇。特。と。こ。ま。も  
 直。ハ。融。さ。し。墓。六。奴。も。こ。ま。も。刀。を。授。さ。れ。損。へ。る。け。あ。ま。で。何。と。も。い。ふ。こ。ま。も  
 彼。奴。ハ。こ。ま。も。刀。を。信。乃。が。刃。を。と。り。と。思。ひ。十。龍。長。秘。藏。さ。る。ふ。こ。ま。も。これ。の  
 快。愉。も。こ。ま。も。亦。男子。ハ。月。下。日。下。あ。ひ。を。か。さ。し。且。偽。り。ゆ。め。せ。よ  
 そ。が。母。親。の。云。云。と。ち。づ。い。ひ。濱。路。を。今。更。入。り。娶。ら。れ。ハ。里。の。批。評。も  
 面。を。せ。ま。さ。る。こ。の。地。は。住。ひ。す。野。詮。今。宵。宮。六。ホ。が。す。成。規。ひ。替

烟の席せき小血ちぢみを伏たせど。あゞ親おや子こ婿むすめ又また小一座おとこの奴原やつら塵ちり雨あめと直ただ小他郷たけなほへ  
 走はしるべし。否いなこゝこれも拙あつた策さくるらん。彼かの奴やつらホハ多おほ勢せきあり。志こころをよ遂とまりて。搦にら  
 捕とらるるらあら。後のち悔く其その知したらちか。早はやりて危あや死し又また成なせんより。竊ひそか  
 濱路はまぢを搔搦にらひて。逐お電とけりふらはらとま。曩さ小濱路はまぢが強顔つかりし信のぶ乃のが  
 眼前ままにとまづらん今ハ信乃のを遠離とらる。彼かの醜みにく郎らう小妻めづませらるら成なれど。成なれど。何なにでも  
 後のちとあらん。りる不ふ信しん乃のは操を竭して。こゝ成な容ゆるまらるら。八京はつぎやう又また成なれど。鎌  
 倉くら又またれど遊あそ女め又また售うるら金かね小せんもいと易やすかり。又こゝ一ひと刀たの奇き持もちをありま持もち  
 氏うぢ朝臣あそぢの重おも器きとゆめえ。村むら兩らう九く小極きよくなり。これを故主ぬし扇あふ谷や殿どのに献ららど。  
 歸かへ系けいのよはらへらるら。とあれど出いれを向むかへとあら。獲と影かげれやあり。又成な氏うぢ  
 朝臣あそぢは進めらせらるら。信のぶ乃のがあららるら。野の詮せん華か洛らくへ推乃の上の上の。室むろ町まち將しょう  
 軍ぐん小敵せきらら召め出だせられんる疑ひ多し。さして全ぜんの計けい策さく只ただこゝ一ひと兼かね小せめり  
 町まちあら。といはれし。問ひし。且かつ小答こたへ。濁江じゆわの底そこはら。尋たづ思ねん。猶十じゆ分ぶん小  
 計けいゆり。心こころの中なか竊ひそかに独ひとり居いるら。あら。れば入いるら。ならば調度ていどはなれど。俄いつ頃ころは  
 要えい用ようのために。此このの家具ぐ衣い裳しやうを沽却くつして。これを路みち費ひらる。まのひく。又また集あひらい  
 笠かさ小脚あし絆ばたは草鞋わらわの外ほかは物をれ行い装まひ。整ふら。小似に。まのひく。足あしをぬく。こゝの甲夜  
 闇やみの進しん退たいハ背門かどより入り。彼未いま通と女にをき。とや誘い引ひ出ださる。斯ごとくと奪うひ  
 まら。づら。款くわんと尋思ね。果はるら。あら。の日のま。暮くれ。や。とうち仰あげ。天又また往い方かたの定さだめ  
 まら。浮うるら雲ぐもの不美みに好この悪あつた伎ぎ術じゆつは暖るら。けし。とうち。後のちは濱路はまぢハ既に必死めい乃  
 覚さ醒さめ。氣色けしきハ頭さら。假かり添そるら。病びやう著しやくと炎暑えんじゆ小このま。素す髮げ又またちりん  
 後のちに恥しき姿すがたをやらん。と物々ものもの。髪かみを結むら。ゆめ。臥ふ房ぶどうを出さる。こゝ。成  
 二親ふたごころまのこゝ形勢けいせいハ今宵このよの婚姻こんいん推お辞しせら。といはれし。心放はなし。黄昏わうこん日

軍ぐん小敵せきらら召め出だせられんる疑ひ多し。さして全ぜんの計けい策さく只ただこゝ一ひと兼かね小せめり  
 町まちあら。といはれし。問ひし。且かつ小答こたへ。濁江じゆわの底そこはら。尋たづ思ねん。猶十じゆ分ぶん小  
 計けいゆり。心こころの中なか竊ひそかに独ひとり居いるら。あら。れば入いるら。ならば調度ていどはなれど。俄いつ頃ころは  
 要えい用ようのために。此このの家具ぐ衣い裳しやうを沽却くつして。これを路みち費ひらる。まのひく。又また集あひらい  
 笠かさ小脚あし絆ばたは草鞋わらわの外ほかは物をれ行い装まひ。整ふら。小似に。まのひく。足あしをぬく。こゝの甲夜  
 闇やみの進しん退たいハ背門かどより入り。彼未いま通と女にをき。とや誘い引ひ出ださる。斯ごとくと奪うひ  
 まら。づら。款くわんと尋思ね。果はるら。あら。の日のま。暮くれ。や。とうち仰あげ。天又また往い方かたの定さだめ  
 まら。浮うるら雲ぐもの不美みに好この悪あつた伎ぎ術じゆつは暖るら。けし。とうち。後のちは濱路はまぢハ既に必死めい乃  
 覚さ醒さめ。氣色けしきハ頭さら。假かり添そるら。病びやう著しやくと炎暑えんじゆ小このま。素す髮げ又またちりん  
 後のちに恥しき姿すがたをやらん。と物々ものもの。髪かみを結むら。ゆめ。臥ふ房ぶどうを出さる。こゝ。成  
 二親ふたごころまのこゝ形勢けいせいハ今宵このよの婚姻こんいん推お辞しせら。といはれし。心放はなし。黄昏わうこん日

時はつとまじしそらうさふ紛まはるる。かゝるその日ハ暮果く。初更迄はく  
 甲夜暗し濱路ハ臥房を脱せ。潜り納戸の縁頼付の外面ハ出さず。背門の中  
 人の出入繁う。これや何れと死知とあり。土庫の間の籬色より力を  
 遠く。遠り出さば生憎は頼めか。蜘蛛の糸ハ女雛を包む吉野紙對喪の  
 凡情あり。つと納戸の背庭ゆく。頼は假山あり。夏樹の繁枝其由拂はる  
 人のかへぬぬらふ。如法周夜のるる。はた究竟の知と死天の首途と  
 急ぐる。これハ臥房を穿とれ。燈火を暗く。蟬の内より臥る如く。枕は  
 小横をうち被り。あはれぬ隙めと携る。用意の織帯引伸し。築牆の  
 ほろろある。松が枝は投り。おとや経さんとさる。物うら。心の闇又天の鳥夜  
 降る。帯の端もく。撞擗る。頭よりとる。おとや経さんとさる。物うら。心の闇又天の鳥夜  
 の親も同胞也。おとや経さんとさる。おとや経さんとさる。おとや経さんとさる。

年數稟くわらぬ不孝の罪。おとや経さんとさる。おとや経さんとさる。おとや経さんとさる。  
 標教の文小背んや。おとや経さんとさる。おとや経さんとさる。おとや経さんとさる。  
 利を樂ひゆふとも人の命ハ限りあり。惜れハ身後の名はあはれどや。その恨む  
 とおちまよその甲斐交る。現女子あり。いとと彼れを遠くゆあはれぬ道の  
 程とハゆふか。天を隔て。飛鳥の翔る。おとや経さんとさる。おとや経さんとさる。  
 あと。下さひ親の許さ。妹使の契あり。磯海あり。歎死より身を措き。今を  
 今を限す。命ぞと。おとや経さんとさる。おとや経さんとさる。おとや経さんとさる。  
 つれるのち。おとや経さんとさる。おとや経さんとさる。おとや経さんとさる。  
 の鐘の声。おとや経さんとさる。おとや経さんとさる。おとや経さんとさる。  
 るん君が。おとや経さんとさる。おとや経さんとさる。おとや経さんとさる。  
 せふ。おとや経さんとさる。おとや経さんとさる。おとや経さんとさる。



賻の水の一雷受あふこそぞ不二説法たれ聖の讀經ゆゆ。まう成佛志傳  
 らん今般小物をあひか。とどくもあひ良人のる。親同胞のるさへよ心小かる  
 歎きのうぎく潜ぶとされど去のびかひ。むらうごらうる竊音小志のび涙の露  
 深く袖う濡る夏草由秋のゆふ傘と戦ぐめ。さ依後小左母二郎ハ時刻を  
 測つて蠶六が背門より潜入とさる小彼知由挑灯引提と。出り入り  
 人あり便り。と立退たら。あは外面を彼此と密くゆうち。遠ア。母屋の  
 背後小立在つは。透。あむむハ築牆の朽るあらん。そが根良小犬の出入  
 さるむらうる顔とあり。是れ究竟と竊。飲びかを。細溝を反越てその  
 顔と。踏入る小朽る牆の癖る。ま。ま。隨小廣かり。樹枝の下小身を  
 起。く。足の壞を拵落。家内の様子を考。ま。いと暗け。其知と。と  
 ぬ別。只左邊るる白壁の。鳥夜ゆゆ。ほの。え。原来。ハ納戸

の背後る。彼土庫の間を遠。ハ常小濱路が。と。小房へ遠。そ。ま。  
 らの業内ハ。く。む。と。難。ま。ハ。あ。と。ま。を。心。あ。く。  
 樹枝を倚り。樹下を潜。ま。く。稍假山の。ま。ま。小。到。ま。ハ。前。面。ハ。女子の泣音を  
 うち驚。く。透。見。つ。い。る。て。ま。く。小。濱。路。あり。天の與と。飲。び。く。功。あり。ま。  
 近。つ。を。啣。を。ま。く。ま。原。来。濱。路。ハ。今。宵。ま。る。簸。上。宮。六。を。い。く。  
 嫌。ひ。く。經。ま。ん。と。ま。る。や。あ。らん。渠。が。節。操。を。竭。ま。の。信。乃。る。ま。る。び。れ。飲。り。れ  
 る。へ。死。う。定。う。小。使。り。れ。う。け。ま。と。も。大。う。ま。ま。と。ま。る。ま。る。誰。ゆ。ゆ。あ。れ。當。ま。  
 落。る。真。玉。を。碎。ん。や。ま。ま。と。く。足。を。翹。く。搔。揚。ゆ。れ。ハ。折。ゆ。り。濱。路。ま。か。り  
 なく松枝。ハ。掛。る。帯。の。端。ハ。携。り。又。潜。然。と。ま。る。注。る。涙。の。隙。小。念。仏。を。  
 十。遍。ま。り。唱。つ。經。死。ん。と。ま。る。程。ハ。声。を。ま。り。後。方。より。抱。禁。め。く。引  
 戻。せ。吐。嗟。と。叫。ぶ。口。小。ハ。掩。驚。死。ま。る。左。母。あり。左。母。あり。左。母。あり。ひ。う。け。る。死

今宵の婚姻死にと必し決めぬひ心操をさすふと必しも尊く茶一  
 親達のむぢんある。日置は腹をかえりていぢいあをぬきまへんとあふ  
 誠の空しくまじい合さしとあへず必死を救ふは天縁あるん歎くと  
 久と肩を耳まらけむ身を搦てやうは振放ち噫を礼する白徒  
 かゝ他夫小伴りてふあふせむにみれぬ所を出入りかえりひの命をさす  
 夜を透禁めく冷笑ひ然てハる死を月より日より必しを運バト又  
 母親が云々と竊小許せりあふは飯上を噺へるふ苦節を喝々と  
 必し小ゆりてハるやかてむや末わづるなれ信乃がる。必し絶むはその  
 牙の破滅否でも心でも携るいぬと出てを食れば又あり拂ふ玉柳  
 の風は茶を翠の葉共にとゆる鬼馬の黄縁る松を指めく彼首へ

逃は此首へ潜りて鳥夜は紛まて隠せんとあふのさる獵場の雉子雄不日  
 まる蕨蔭小声中の揚ぎ宿棲りも。かり入れぬ憚の内外は通る呵責  
 の苦しと追れく磯と泣沈めか鈍しやと襟上を搔細と引立と。拭銜  
 さる猿鏢小腋は楚と搔いて。濱路はかほそ死病後の瘦穴木免は  
 と捉りて夜の蝉声はさふく哀れあり。左母二郎は既は斯女子を小腋に  
 抱れてハ舊の穴敷より出まて扱何れより脱去らんと見欠る片頬は織  
 帯の障る紙左小丁と摺り。是究竟とかまへく閃りと登る老松の枝より  
 傳ふ築牆を辛く乗踏りてや外面へ立ち立。跨りかかむも波を溝こ  
 音を絶つ蝶翅の履一隻も失はれ豫て用意の行鞋足は信とねむ  
 去ぬかると小庵厨は或の土器饗食膳の調理庵丁整へる當下葎六ハ  
 書院の床間は蒲花を立懸幅を掛りて初更の鐘の音をきり時

刺近つれぬと多ふもぞ龜條を召くひの申う。臂殿の末もほろ小今一時が程ハ  
あど夏の夜の深きをたよ。いまむぐりいひで止べた濱路に云と竹ええさうとく  
衣裳を著させめらげやとよハ龜條點頭と。吾倚も如此思ひ侍り。よらふ小  
暇もあつて暮てハ臥房小立よりねども湯漬を此一たうべしと婢向ハいひ  
侍り。髪を結び揚ぐハ衣かえさほふ易かづ。あまのそがやといひかけ  
そハ臥房へ赴らん。いづれもあて走来と事あするありと。いまハ墓六  
驚死ん入り。あま謀り何るやんと問せ由あて眼を睜り車あり車  
あり。落つれあま濱路ハ蠅を脱出く。何地ゆらん影ゆせだり。則ちや登らん  
と入ハ浴室の四隅まど。隈あくあさり侍り。いづれも後ハ逐電せしうんと  
告まハ墓六あひだも。念うる花瓶をうち落し。流るる水を袴乃裾に  
拭ひも果む力を起し。そのそや大事小及びより。然とも騒ぐべからず。いで

いでといひけく紙燭を秉く庭小ちれハ龜條も共偕小樹柵の隙を彼此と求め  
うらや土庫の間を過りて奥よりうらや背庭小あつてんまふとよ。いづれも  
あけりて織帯式松に結降。足代よりやあてん牆を乗らう足泥知こよ  
印こり。そよとよハ憑の細のきまきとく澳邊は漂小船の跡をたが。墓六ハ  
顔色水より蒼らう。忙然うら形容小龜條も亦嘆息し。結髪をゆる小  
竹より暮ても護らざり。いづれも緜子並の虫を飛し。あつて小濱路ハ藤て  
より。いひあはせしるあり。信乃奴が誘引せし形とといハ墓六沈吟し。信乃  
少六年來睦し。奴顔藏が後より。緜子倚情由ありとくも。輒く途より引  
うへく何らうせむべれ心憎れハ左母二奴あり。そよ来あて先よとちて舊  
の如くま入り。心利うら小断を召く。左母二郎ハ宿所ありや。挑灯引提てう  
んく来よ。いづれもと魚燥バけあつてんと。心もあて。飛がよく小まきありん

且、件の小厮ハ喘々走ケル。左母二姉の宿所へいゆれ、呼門に心せむを  
 推開て足少ハぬハ、さう入調度まじふ。むら申あま、空室小むと。その  
 為俸をわく推せ、逐電走つる小疑ひあり。と告る成、坐ていと。夫夫婦ハ  
 遠恨小堪む。俄頃、僕僮們を召聚云云のる、そあれその密夫を  
 左母二姉あり。遠くハ西ノと。おぢある小疾追蒐、引搦来よ。わ、汝ホガ  
 り小乗とむとも。濱路を捉逃、そ、灯をぬふあつ、小這奴小あられ、  
 捕さけん人を追ふハ、圍丁をよけ、背ぬハ老、足よりの、今宵むろ  
 了、氣成入とよ。誰小申あ、功よ、賞錢ハ過分よとせん、誰と  
 誰と、東のうと彼と彼と、西のうと必ぬる、と西三人を一隊、既小四支  
 部、瞬回小悉出、遣てもとふ、夫婦ハ心休む、龜條ハ頭痛を病、て  
 みる、推府ハ額を撞、おる、信乃を、信乃を、信乃を、信乃を、

左母二姉を引入、とめ、され濱路ハト、外へ、外へ、外へ、外へ、  
 錯へ、偷見の隙、護、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、  
 身を、必、必、必、必、必、必、必、必、必、必、必、必、必、必、必、必、必、必、  
 今宵の婚姻、や、婿入、程、折濱路、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
 屈託の頭を、病、病、病、病、病、病、病、病、病、病、病、病、病、病、病、病、  
 む、人、人、人、人、人、人、人、人、人、人、人、人、人、人、人、人、人、人、  
 勞せ、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、  
 土太郎ハ、昨夕の、樗蒲、幸、幸、幸、幸、幸、幸、幸、幸、幸、幸、幸、幸、幸、幸、  
 者、者、者、者、者、者、者、者、者、者、者、者、者、者、者、者、者、者、  
 白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、  
 よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ、

あつと切つ此ハ増酒價をとつ代禁めく。これ。そ成今更ふりみる。飲又  
更めて汝を憑ん今宵ハ不慮の難美あり。その故ハ箇様とこと辞せ。て  
説示。こが女児をおく走。密夫ハ汝由認まり。神宮河うく同船を。ら  
おがさからう。綱乾左母二郎といふめ。園宅の老弱送さ。既ハ追捕を蒐。こも彼ホ  
の。て。心。の。形。今招き。こ。汝が如。死。資。を。ぬ。ら。こ。さ。き。幸。ひ。か。て。ら  
こ。運。る。度。憑。り。と。く。追。禁。引。搦。来。ハ。辛。苦。銭。ハ。ヨ。少。を。論。せ。を。偏。憑。む  
と夫婦。と。并。ぬ。と。小。相。譚。ハ。土。太。郎。仲。の。ち。ち。点。頭。現。今。あ。へ。来。ハ。途  
ぬ。豫。て。相。識。る。行。轎。夫。加。太。郎。井。太。郎。ホ。ガ。行。客。を。乗。せ。ら。も。足。を。論。ど  
置。置。と。そ。が。昇。由。揚。ざ。り。丸。鳥。夜。も。是。ハ。そ。成。よ。く。も。只。井。太。郎。お。よ。め。い。ひ  
く。け。立。休。ぶ。く。過。さ。り。原。来。件。の。行。客。ハ。左。母。二。郎。疑。ひ。る。轎。子。小。乗。り  
。原。来。正。し。く。磯。川。本。郷。坂。へ。赴。け。ん。い。で。追。禁。と。裾。を。揚。ぐ。  
。と。も。こ。こ。ハ。墓。六。々。邊。く。呼。え。左。母。二。郎。ハ。武。士。の。浪。人。そ。の。本。事。測。り。た。よ  
。素。心。め。く。追。が。愆。あ。ん。と。こ。り。く。ゆ。れ。終。と。神。替。乃。一。刀。を。と。り。お。と。途。と。合。て  
。胛。小。踏。と。さ。て。ふ。い。よ。く。心。つ。う。翻。又。搔。籠。と。瞬。間。は。雄。雄。お。お。か。か。入。酒。暖  
め。お。ち。め。人。あ。る。憑。と。や。と。と。と。急。ぐ。夫。婦。を。見。ゆ。を。多。は。甲。夜。圍。小。指  
妻。の。滅。る。が。如。く。走。去。け。り。語。分。面。頭。寂。寞。直。入。肩。柳。と。い。ハ。怪。有。の。行。者。あり。う。  
原。長。何。國。の。人。氏。う。を。を。去。歳。の。夏。よ。り。陸。奥。出。羽。を。券。縁。今。茲。ハ  
下。野。及。下。総。又。赴。け。る。遂。ハ。玄。苑。に。飛。錫。く。愚。民。又。尊。信。せ。れ。り。その。修。法  
。當。官。薪。を。積。く。烈。火。を。踏。む。自。若。と。く。く。足。燒。爛。る。と。あ。り。こ。不。より。人  
の。吉。凶。悔。吝。を。占。ひ。又。病。厄。を。祈。禱。を。亦。志。驗。あ。る。い。ふ。年。来。吉。野。昔。四。城  
三。熊。野。ハ。さ。う。さ。う。も。駿。河。の。不。二。肥。後。の。阿。蘇。山。薩。麻。の。雲。霧。降。下。野。の。二。荒。山  
出。羽。の。羽。黒。山。さ。り。靈。山。名。勝。を。く。遍。と。る。登。陟。神。人。異。物。小。巖。迄。く。



順  
寂  
を  
示  
く  
寂  
火  
坑  
小  
自  
燒  
走



寂  
寞  
道  
人  
肩  
柳

八  
天  
信  
三  
轉  
卷  
四

山  
青  
堂  
精

不老の術をばつりとけん現その為俸鳥髪長鬚小しく。まは壯年の人と異  
あふむ。さうまも。百年前の事跡を問ふ。志答眼前よりくるがごとく。説示さる

よのまけは。人愈敬信感服せり。又この肩柳へ左の肩尖小一塊の瘤ありけり。

常は佛菩薩宿せせり。左は是天行の順路肩へ肢體の無上所よりて

東方天照皇太神西方釈迦牟尼佛。ち小止宿し。さうまといへり。かく

この夏月肩柳へ豊嶋郡小鳴錫し。愚民ホ示をかり。夫二畧の火宅

穢土より立ち。穢土を去らむ。皆慾は耽り。皆慾は思ひ。皆慾は情。皆慾は

廻あり。好悪より。煩悩より。四大原長何れより。秋来る。以て悉皆空

る。至十惡何れより。到る。省と。一妄想の。この故。諸佛。悉皆。出現し。

性なれり。の畜生道中。小墮。縁度。普。か。が。為。小。世。尊。涅槃。の。室。小。入。り。

寂滅為樂と教あり。現生あり。の。必。死。あり。形。あり。の。滅。ざる。あり。機。圓

既。満。ると。き。太。陽。の。没。る。如。く。積。氷。の。消。る。如。く。誰。か。一。人。の。こ。ま。る。の。の。あ。り

んや。か。と。ば。て。中。一。身。を。天。堂。よ。か。り。納。め。く。彼。岸。の。禪。定。門。よ。入。り。を。よ。け。は。

よ。う。ま。く。ま。ぬ。る。六。月。十。九。日。申。の。下。剋。日。没。の。時。小。丁。を。く。將。よ。火。定。小。入。り。ん。と。を。

その地へ豊嶋本郷のほると。圓塚山の麓。る。一。深。信。有。縁。の。道。俗。の。か。の。く。

一束の柴を布施し。来會せよと。ぞ。徇。り。け。り。さ。う。ま。ぬ。ま。尊。信。さ。る。里。人。ホ。

これをば。噴。噴。昔。より。入。定。の。行。人。あ。り。と。は。笑。け。ど。皆。生。ま。ら。ず。土。中。小。入。り

の。火。定。へ。最。も。有。か。さ。う。ま。權。者。の。入。滅。を。か。ま。ま。何。の。時。を。期。ま。す。死

と。く。本。日。を。俟。ぶ。る。の。も。あ。り。か。く。衆。人。へ。肩。柳。が。指。揮。小。隨。ひ。六。月。望。の。比

より。て。圓。塚。山。の。麓。る。茅。萱。を。艾。拂。ひ。一。座。の。土。壇。を。築。き。黒。木。と

より。て。圓。塚。山。の。麓。る。茅。萱。を。艾。拂。ひ。一。座。の。土。壇。を。築。き。黒。木。と

わく柱とを壇下より廣く穴を穿ち。その廣さ五六間深死と丈餘も及ぶ。柴夥投へるとは虫の跂つた隙あり。抑この圓塚山の豊嶋本郷の西小あり。巽を蒼海香渺とく。安房上総の盡れをも視るべく。西へ連山嵯峨とく。管根足柄富士の雪夏もは寒れちちどす。鎌倉海道もふれど木曾路へかゝり順路もく。上総下総へ赴くめ。あつと過るを捷徑とせざる程。こゝや本日ゆもあり。寂寞道人肩柳の白布をのり頭と包と。あつと布の淨衣を被く。壇の中央より胡床を尻とく。ふも一箇の金鈴杖振鳴す。胸よ一面の明鏡と掛背より一條の輪袈裟と垂す。こゝと兜巾を載りけり。その打扮異様もく。観念の眼を閉す。甚麼ある經を讀みやあつと朝より暮るまで。その音聲濁らむ。涸れをりく。小人を視る眼光いと凄し。壇下より。彼此の老弱男女。群衆圍繞し。藤蘭山田の邊中へ入る。ぬれぬれもなき。頭の上を照らす。夏の日は堪へて。日影も火定ふりぬれと罵ち。樹下を。索と繫ゆも。ゆかりけり。かゝるも。黄昏ちりく。あつと。豫もあつと。成はるめ。件の柴は火を放て。燦々として燃揚る。暑中の猛火はかそれ惑ひく。壇のわく。あつとあつとあつと。散動も退れり。當下肩柳の經も果る。平形金珠を鎗と。あつと。あつと。あつと。壇下を直下し。声高き。護りく。昔如来の後。弟。阿難陀の摩揭陀國とちま。吠舎釐城に赴れぬや。その王の。徳は恋つ。送代は哀驩。その一王のこれを追ふ。南岸の營軍。その一王のこれを迎ふ。北岸小来候せり。阿難尊者。二王の相争く。闘戦殺害せん。と。成を。虚空に昇り。立地は寂然。示し。身乃中より。火を出し。骸を焚く。中より。拆れ。南岸小墮。北岸小墮。聞諍と禁めぬ。その功德廣大あり。この他の道徳自燒。或は三世。

火を出し。骸を焚く。中より。拆れ。南岸小墮。北岸小墮。聞諍と禁めぬ。その功德廣大あり。この他の道徳自燒。或は三世。

八丈傳三轉卷四

十三



諸仏小献り或ハ衆生濟度の方便載リ聖經ニ灼然ニ貧道辱ク三寶ニ  
 事王勤勞小年を盡さども自他の利益ニ普く愛小愚癡の薄徳を  
 省ミハ速臭骸と解脱シク玄垢の浄土小到人と欲モ冀ハ有縁の道俗  
 身戚不隨者の財宝を棄指シテ未來永劫の善根を殖シ設夫一錢二  
 錢を捨るゝのハ一劫二尊の茲航ニ乗ズんニ錢四錢拾るゝのハ三藏を  
 自得シク四難もま小易くべシ五錢六錢を捨るゝのハ方小五覺小感通シク  
 六塵を掃除せん七錢八錢を捨るゝのハ七難八苦と出離シク頭生菩提乃撥  
 圓小亦チ九錢十錢を捨るゝのハ九品の淨刹小托生シク十界能化の菩薩と  
 ありん如是の善男女如是の財を捨バ身ハ有後苦海ニ在リト云ふとの  
 則負寂の同行ナリいふとあるハ五慾の財物を燒却スルテその才代ニ量  
 の徳本ニ播植スルテ清果生レバあり勸化隨緣徳モ平等利益疑ハカ

一と説勸る声の中より群集の老弱火坑を埒至ク破落哩と云と擲ハ  
 落花の風ニ隨ハ如ク雪吹の窓成拂ハ似ク幾十百との成去リと云  
 錢既ニ投リトハ肩柳自葬の引道導リ声高サ小偈を説ク云  
 西方葬釋尊羊 擊然發興石火 東土燒道昭時  
 閃々炬燵揚播 言靜相眸十眼 看灰裡結清果  
 唸誦まろ云遍雨く煽くる猛火の中へ身を跳らせり投入と云火燄幾と  
 立沖リ膏佛ハ穴焦ト骨もどめむ倏忽ニ灰燼とありて失小けりこれをみる  
 衆人も感涙を禁めあむ同音小念佛シク且く鳴も止ざりけりかくもや山  
 寺の八相の鐘音はる諸行無常の観念由今今何のふおびえておのが  
 ちみく歸去人東西ニ立リク南北ニ散ラセキ亦チ燃る茶毘の坑許マ  
 光は夏虫の火虫の外小物もありさあ絶不初夜過ク月あはらば小挑灯

行轎の傍の窓は結提々引添く歩のそがくくあるのあり此は別人あるを則  
 細乾左母二席あり嚮小濱路を豪奪く途は行轎を備ひつ。そのまゝ間道と  
 乱走く木曾路を京へへんく。路は曲る由美村よりこの圓塚を過るふらん  
 そ城昇く二人の轎夫はるは滅残る火定の火光をよるべは間道く扛まえて左母  
 二郎より対ひ親く定めの継場へ足賜く退りてん取らせり人と左右より  
 二つを堂をんえりく冷笑ひはホハのふく。喫せぬ酒は酔るやん駒込  
 の建場をうち越る。板橋を定めぬふか。あめて継ぐといふよりあえんやいと肯  
 とぬとあれどもさうと骨を惜むとあふは女を憑むまけは轎をんえんと  
 扶出く。さうくゆれ後と懐中より。西縁の残るうしと速とを受む西  
 人齊一足踏鳴く。さうち笑ひ總は二百三百の仙銭を取らん。夜行を  
 んくくハ本代いと艶妖る臍物を縛かけく猿鏝狂女をど偽りてん

い暗めても挑灯の火光は疾視し眼の違つどその両刀へ人目なり。武士は  
 打拵拵見已むとふ好るさう。空棒振くやと還る息杖を。酒一  
 盃建場は齒の利く板橋の橋を首れ板の井太郎その相肩の加太郎と  
 入小きくは蜘蛛冥利拵了は由断るつ夜の細は掛る王虫をさう  
 他は落とせ。えんははらさう。腰ある盤纏も衣も脱ぐ亡るさうと  
 訛声高く左右より。哮りかきと此も騒がき。ほらんとり。藪蚊們耳邊は  
 附く物匂奪欲くこの世の暇う。いで取らせんと板打は見たと被せ  
 刃の電光右邊は立る加太郎は肩を破るさう。仰及より透をあせせ。井  
 太郎が打込む息杖受るが。二三合戦の程は加太郎も亦身を起し。く  
 左右より引夾く野火を燭の追ら奴ら送は叫ぶちう。声井太郎は血氣  
 乗く。只管小競へども。撃劍槍棒巻法ま。ハ一点たるま。由ま。さう。動



八天傳三輯卷四

山青堂

さきバ 馳惱されく。てきき 湯やめめさち。あか  
 漆ちせり。さきバ 亦左母二郎ハ 武藝の達人るさきともの。合さる刃ハ名ゆ  
 ちの村雨の宝刀あれバ 打振る毎ハ水氣さるく。八方ハ散乱。茅葺小枝ト  
 火ハ滅ハ茶毘の光も衰く。足下暗くするめく。鐵を断石を辟く。刃の奇  
 特掲馬 怯めバ 憑入る。後袈裟。加太郎ハ 復有と割。とく 鮮血小塗れ  
 休まら。その隙ハ 井太郎ハ 躍れる。後方より。組むハ 閃りと 振放ち足を  
 飛く。撲地と蹴る。蹴らる。控と轉轉ハ 起んと 起る。起しもさて。細頸  
 丁と打落して。血刀引搜く。吻く折土太郎ハ 納追蒐。滅残る火。透  
 んとく。声をもかけ。背より。見くを刃の光。左母二郎ハ 眼く。吐嗟とむかり  
 身を及れハ 置き。敷。大刀を拂退。信と睨ハ 賊ハ 二人と。ひ。小原米  
 汝由支黨の引利。よ。そ。との。あ。む。む。刃。と。閃。と。合。直。い。ぬ。る。夜。神。宮。

の漢舟。面を認め。瘦浪人。戸田河條。名の賣れ。土田の土太郎を  
 忘れ。軟吾を引利と罵る。豕を抱く。臭れを。汝が。人。汝。み。ふ。  
 似る。頭顱。る。偷見。ふ。多。く。一。論。ハ。益。多。く。莊官。殿。ハ。頼。れ。く。さ。ゆ。ら。さ。  
 れ。臍物を。そ。復。え。ん。ふ。多。く。誘。り。ハ。大。蛇。の。道。ハ。頓。が。識。る。夏。山。里。甲。夜。よ  
 圖ら。物。の。ひ。ひ。この。雲。ぬ。ホ。の。標。蒲。野。計。その。折。臂。と。刃。の。け。と。け。さ。る。ゆ。ゆ。怪  
 一。行。客。を。乗。せ。く。間。道。を。走。り。ま。ら。ん。と。多。く。憶。り。圓。塚。の。茶。思。と。り  
 先。小。露。と。消。る。井。加。兩。太。郎。が。る。ハ。仇。人。女。の。子。を。拐。挾。ひ。大。罪。人。ハ。捕。采  
 ある。縲。纒。脱。れ。ぬ。如。と。覺。期。く。み。う。う。肘。を。背。へ。廻。せ。然。ら。ま。六。つ。つ。首。級。よ  
 ち。田。畑。の。西。瓜。と。欺。く。ま。て。小。莊。官。殿。へ。裏。小。せん。さ。も。走。る。軟。争。ハ。軟。と。罵  
 追。る。面。鬼。前。の。二。人。よ。り。や。ま。せ。し。も。あ。ら。う。さ。由。大。膽。不。敵。の。癖。者。刃。を。揚。く  
 よ。せ。ま。む。ある。嗚。呼。が。ま。り。追。捕。呼。り。擗。一。本。板。三。枚。下。ハ。地。獄。乃。境

累由波上ついで六人をも罵らんの。この本事をてあ見むや女子をよおる夜行と  
侮あ引剥をひせんと計較けう。二賊ハ既すでにかくの如ごとく。汝由冥土の伴侶ともふ三途の川  
舟乗人とふる刀を受うけんと閃めひて尖とれた大刀凡物ともせせむ。死物しねむ乃  
ちせ廣言ひろ息の根ね輟んとあく。鏝ふ音ね研ひは響ひく。夜よの夏山人絶たく  
虫むま声こゑをこめらる草を蹴けむく奮あげ突つ戦せん一上い下げと術てを竭つく。雌  
雄おのうまご判はりけり。左母二さ郎ハ再度またの苦戦くる。稍や疲つかれる  
既すでに浅あ瘖せを負おす敵。とあふあんあろろ小こ一い計けいを生せいしる。刀を  
引ひく逃にげれば土太郎どいよ勝かつた乗のり。逢あひせと追おふ程ほど。左母二さ郎ハ  
間まを揣さすくふてや小石こを搔かねる。身みを振ふりかく破と撲うつ飛礫たへ窺と  
怒おむ勢ハ猛らう土太郎どハ忽たち地ぢ額がくを撲う破やすく。とあく潰る鮮血ちと共に  
一い声こゑ苦くると叫こゑひあんど仰あがぬ小こ仆ふと左母二さ郎らうハ若を突つく如く走りかへ

アまくそ胸むね前まへを蹂躪あす又踏居ふみく刺を刀尖やハ名詮な自性じ土ど小こ縫ぬいと土太郎どハ  
縛ゆむ足を動うる身を大おの字じ小こひくとそがまく息ハ絶たりけり。抑おさの  
土太郎ど加か太郎らう井い太郎らうホと豊とよ嶋しまの二太郎らうと呼よぶ水陸りくの悪根ねなり。  
年とし来きたる人を害わざひ又まぶく物成な掠らぶ姪酒し賭ど奕あの場ハ遊あびトを園  
法はをおそもぎ下ハ縣吏しを肩とせを銭あらう九ハ節通つうが掛をけり移す。  
食くへも飽あらずとせを銭あらう九ハ喪家かの狗のどく餓とも恥ちをなせ小  
云い兒こと忌憚はらせ。天てん罰ばつす小疎そく又唯ただ奸けん惡あく邪じゃ淫いんの癖者しや細こ乾かん左  
母二さ郎らうハ殺ころす一ハ毒をりく毒を制しる。天てんの配劑はいをめあらうと。同どう話わ  
休やす題だい左母二さ郎らうハ辛からく土太郎どと撃うち果はらう刀はの鮮血あを推搦おす生血けをか  
引ひく白露しろは濡りあらふままとこの刀の奇持ぢハ感かん嘆たん浅あくと。嚮むかひま  
生せい死し存ぞん亡ぶつの際ハまと心えつと現こか衣ぎの濕り野火の滅めし雨の

刃より成と雷より死再びひつる刀の威徳ハ仕官の傍忝一とうち戴たて  
 鞆小納め二尺帯を引列表と腕の浅痕を括留滅果んとせ一坑乃火よ  
 残る柴を投入るは又烈くと燃上りて。風のまふく彼此多茅萱小移れハ  
 ついで。白昼の如く明るける。かく左二郎ハ轎の内小伏沈む濱路を女を  
 技出しと。その縛を釋捨は又潜然と沈む傷乃株又尻成かけ。やよ  
 濱路とてもかくて。齋縁位とく後へハ火を命を的の由美村より。こ乃  
 山越二人の大敵を多く職せをそ誰がるといひるハ皆是れ死すハあ  
 ちや畢竟浅痕を負つるのつめく恙あけハバトよけと。これ死すハあ  
 ちも亦ハ一ちよりと辛苦受人かまでつふこれをさぞ強頑へのてりま  
 さふあんが心かり親達の密議を告いぬる夜神宮河の候彌を密稱  
 信乃を害せんとも。濱路にせハあん。かハ暮六莊官が不覺水小落

る中。實ハ信乃を誑引入と。水中小殺さんぬの。然とも信乃ハ氷煉をよ  
 ころめめやありつらん土太郎さ入敵一ぬを。莊官ハ阿容とと渠又抱き  
 縮めと。前面の岸よ登さるとこれハその謀成らざるあらん。その前の日ハあ  
 りの母ハが竊は吾侪の宿所を訪う。信乃を許我へ起行する。意中の  
 機密を物より。初里人ハ媒妁せられて。信乃ハ濱路を妻せんとし。あつけ  
 くとこれ小莊官殿が秘藏の一刀。それを臂牽出小取らせると。今中明地  
 返せといふ必推辞んとも。如此と謀る。その折あんがハ船中。信乃が件  
 一刀を莊官殿の刀りく搦替くと。彼一刀ハ畧代と。其れより  
 信乃ハ恙なくとも。這奴許我へ赴れと。何更をさる。と。これ鹿忽の羅を  
 縛首刎らると。相謀と。と。あんがハ濱路を妻せと。職  
 祿副は譲らんと。いり。小推辞と。て。遂は密議は衆合船件の刀を搦替

一由。ちんを妻小せんぬの。そのるまへ。いひ。さ。好曲。必。與。ほ。き。か。く。
 此。彼。両。刀。と。搦。替。んと。せ。し。れ。信。乃。が。刀。の。中。心。よ。り。忽。然。と。水。氣。雷。王。
 夏。多。及。寒。死。燒。刃。の。靈。光。の。も。得。た。宝。は。愛。て。つ。く。視。つ。熟。思。へ。前。の
 曾。領。持。氏。朝。臣。の。重。宝。小。村。兩。と。い。ふ。宝。刀。あり。その。刃。鞋。を。出。ま。わ。の。う。う。小
 水。氣。雷。王。殺。氣。を。含。ま。く。打。振。ま。へ。刀。尖。より。出。る。水。挾。霧。乃。如。く。散。乱
 せ。と。信。乃。の。は。ち。ま。る。一。さ。ら。墓。六。莊。官。が。信。乃。の。と。は。與。一。の。み。る。の。
 甚。不。審。一。信。乃。が。親。番。作。へ。その。父。匠。作。共。侶。は。春。王。安。王。は。俱。一。なり。結
 城。は。笠。電。城。せ。し。の。い。へ。この。刀。を。持。氏。より。西。公。達。小。傳。り。を。春。王。安。王。率
 去。の。後。番。作。竊。は。携。り。大。塚。に。退。隱。一。彼。人。彼。一。今。ハ。一。信。乃。が。佩
 る。小。疑。ひ。ま。一。か。へ。得。た。死。名。刀。を。莊。官。づ。れ。が。い。小。落。さ。俗。は。い。猫。小。黃。金
 一。且。彼。夫。婦。が。欲。さ。る。所。と。は。愛。一。この。刀。を。搦。替。せ。んと。ゆ。い。あ。

この。刀。を。畧。せん。ぬ。の。愛。は。つ。の。ち。ま。る。秋。井。言。由。選。か。り。さ。鄙。言。の。
 毒。を。食。り。血。ま。ぐ。甜。き。と。い。ふ。今。宵。の。ふ。と。と。い。ひ。け。は。信。乃。が。刀。を。こ。
 刀。室。小。納。替。の。又。こ。が。刀。ハ。莊。官。の。刀。室。に。納。め。る。合。上。く。刀。を。こ。三。方。替。小
 か。え。く。且。その。か。を。こ。る。小。莊。官。夫。婦。へ。約。束。の。脅。由。お。乾。ぬ。程。小。陣。代。鮫。上
 宮。六。の。替。縁。を。結。び。ら。し。日。中。あ。り。今。宵。の。替。入。信。乃。て。も。腹。く。一。好。く
 悔。一。形。有。人。を。殺。し。こ。も。亦。死。ん。と。思。ひ。決。め。し。の。ま。ご。ち。ん。乃。の。心。死
 せ。と。命。一。換。る。の。の。ま。れ。ば。こ。り。あ。り。お。人。乃。を。お。く。ま。り。憎。一。と。い。ふ。人。こ。
 恨。を。い。ふ。が。怨。復。を。志。し。致。一。と。幼。推。馴。染。は。羈。さ。ま。り。信。乃。は。実。情。を
 盡。と。と。も。流。は。隨。ふ。落。花。の。如。し。渠。の。め。く。ま。る。あ。ん。か。と。ま。れ。ぬ。の。ぞ。う。
 再。び。試。で。一。宝。刀。の。奇。持。土。太。郎。お。を。替。り。と。野。火。の。滅。く。村。兩。の。大。刀。より
 出。る。水。氣。よ。り。華。洛。上。り。こ。の。宝。刀。を。室。町。殿。は。敵。は。數。百。貫。の。主。と

ある立身疑ひる死のめし。さか死ハあん月をも奥まぬと唱させ。又の人又冊  
せん勢をそめてこの山をさくち踏むらむ。負れぬ軟心を披んら。いふ  
そやと身とよせ。背を拍らむ。成ともる。辞巧は慰めけり。

第廿八回

仇代馬く濱路節は死を  
族を認て忠與故代譚る

濱路ハ淡禁まむ。よふ養親の好曲と細乾が邪智をゆき。同ふそ。めめ  
恨いかま。く宵泣き。有為轉變假寐。みく遠離る。きのふけ。あつ旅  
衣良人の難義を想像る。か玉の緒の絶る。絶よ。いづ。宝刀をとり復  
く。夢はありとも。これらのよを告ぐ。丈夫は。遮与んと。いづ。らろ。と。將大  
中。あ。小。涙。をか。さ。め。響。火。理。ま。く。縛。られ。ぬ。く。ま。られ。一。辱。め。小。恨。め。一。と。の。と  
あ。ひ。い。が。あ。り。ぬ。人。は。あ。り。ぬ。と。く。侍。る。中。過。世。と。う。脱。れ。ぬ。契。あ。る。あ。る。べ。い。犬。塚。ぬ。い

の大刀の。ひ。ら。ら。ら。由。耳。熟。目。熟。く。は。り。彼。人。慎。ら。け。は。り。や。火。急。の。折。あり  
とも謀らる。へ。あ。ぶ。ら。う。そ。を。輒。く。由。搦。音。一。と。宣。言。ま。あ。り。あ。く。と。こ。ら。は。が  
進。退。究。り。け。る。初。ハ。情。り。あ。ら。む。と。い。ふ。と。も。宝。刀。を。掠。め。一。人。と。も。あ。り。つ  
俱。み。走。ら。る。あ。ら。ん。と。二。親。よ。さ。え。疑。ま。ん。か。れ。ば。か。つ。家。由。り。況。く。その。性  
いと正し。れ。犬。塚。ぬ。い。容。ら。れ。ん。や。ま。が。その。刃。を。見。せ。ま。と。い。は。れ。て。ま。ぶ。く。と。も  
点。頭。ま。つ。あ。ら。へ。理。り。ん。信。乃。ハ。心。よ。由。あ。せ。ば。と。も。伯。母。夫。を。救。人。と。く。續。く。入  
水。あ。ら。る。折。船。ぬ。あ。ら。し。一。吾。侪。一。人。その。刃。を。の。り。搦。ま。ん。と。い。は。渠。よ。ま。ら。ゆ  
事。あ。り。死。定。め。この。村。兩。ハ。立。身。の。様。よ。あ。る。のみ。み。あ。ら。む。一。と。妹。妓。の  
契。を。固。け。る。月。下。翁。よ。ら。ま。ま。と。こ。が。信。ら。る。證。め。を。援。ば。忽。地。水。乳。あり。  
是。この。刃。の。毒。持。り。檢。く。疑。ひ。を。釋。ま。と。諭。し。ら。ぬ。を。引。抜。れ。と。遮。与。を  
刀。を。右。ひ。受。ら。ち。か。く。一。刀。を。中。り。め。と。丈夫。の。仇。人。と。呼。か。る。声。あり。と。ゆ。み

八天傳三轉卷四

廿八



突閃き刃の光り小敷敷を眺く左より右へ盛沈き拂へ跳越敷いとされバ  
 かみ借に後小立を追詰るかより死脱申烈女の念力悔里の刃刀尖小左母  
 二郎ハヤとて怒り小刀引抜た丁々たる一と受まがりつけ入るく後路乳  
 下礮と破る破くきて苦と魂消る一声怯む刃を踏落し跳躑と掻伸む頭  
 髻を膝より引著く霎時疾視と声あり立北狗奴今さらどひなるや  
 情欲るはバアと心のどけく懸めとん賺し由とてさる成執念深刃物  
 三昧仇入と喉るくさるあむさるまめで小信乃を忘るくへ暇をとせん  
 彼世と合へりさるる後む遊女も售ると由身價あり化骨折る  
 トとどひふ巳と成ゆるを賣物と傷けとせよそれ由詮あり飽まぶとせよ  
 後かり報ひの靦面早より殺さるどひのやめ苦あはるるあかり殺しよ  
 旅宿の後然懸念さるく熟腸を冷んこの世の右残りまばりか程を位くへ  
 うけひひさし入るさるる月のちるまきと聴聞せんと引立く同途と突頼村雨の  
 大刀掻取く鞘に納めく腰に帯小刀を大地に衝立てほろろの株に尻もち  
 掛懐中する疊紙より銀子を撈り出し頭を高く掻拍く此の髪扱てをり  
 さら程小濱路に既又灸所の深瘻に絶ちんとほる玉の緒由良人引とて  
 中るく起直まども乱髪頼みかたるを振拂し恨し九多左母二郎めあり  
 女子と志りさるり理多伴のさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる  
 親に相譚と室刀を掠めくさる良人を死地と陥せし邪智奸悪いさる一  
 大の念んと竹よれども本意をの遠き邪慳の刃日現身の命を預りてさるが  
 久し月日照らし多るさるよこはね過世の悪報缺さるまも心のさるるさるる  
 つま中へさる良人の往方今下さるのあより由亡らん後さるるさるるさるる  
 告ん散るる世の中やさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる  
 山崎屋敷

つらひひさし入るさるる月のちるまきと聴聞せんと引立く同途と突頼村雨の  
 大刀掻取く鞘に納めく腰に帯小刀を大地に衝立てほろろの株に尻もち  
 掛懐中する疊紙より銀子を撈り出し頭を高く掻拍く此の髪扱てをり  
 さら程小濱路に既又灸所の深瘻に絶ちんとほる玉の緒由良人引とて  
 中るく起直まども乱髪頼みかたるを振拂し恨し九多左母二郎めあり  
 女子と志りさるり理多伴のさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる  
 親に相譚と室刀を掠めくさる良人を死地と陥せし邪智奸悪いさる一  
 大の念んと竹よれども本意をの遠き邪慳の刃日現身の命を預りてさるが  
 久し月日照らし多るさるよこはね過世の悪報缺さるまも心のさるるさるる  
 つま中へさる良人の往方今下さるのあより由亡らん後さるるさるるさるる  
 告ん散るる世の中やさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる  
 山崎屋敷

山崎屋敷

使ハ只名のそめく添臥せむ其の親も胞兄弟も煉馬殿の御内よあらま。  
 灰よゆくのみ名をまよむ。頼も認るむ年あましく恋しとぞ思ふ。あひひきや。  
 去歳ハ煉馬家亡く台く。その老黨も若黨も皆移れきと世上の風聞よ小憂ふの  
 教を以て刃の瘦んゆり三重の帯環りもあらむ。圓塚の野火も共ハ滅てゆく。  
 冥土もあま。独行かあるも二親の非美非道よひひのく。故が悪ハ  
 資も成り九の世をわらうと。竭ぬ然ハ後竟よその刃ハ報さるべん秋  
 人ハ恨も刃の薄命も縁の起ハ外まよむ。歎れをくり見ぬまむ情あまの  
 養親達恋ハ大塚ぬ。こが魂ハこの山の裾野の沼の水鳥となりは許  
 我ハ東の間よゆれく良人よ告まらば。よ小惜るぬ命尚惜む恩愛節  
 其の為再び丈夫よあ日よ。其の親の存亡をあらう。あらんその日まよ。  
 有難く惜き命ぞ。あ甲夜あるゆこの山を踰り來ぬる人もあれや助る

神もあれ世歎と恨らう泣くまよ。小思ひあましくかれ口説く。言葉の露を  
 結びあは脆たハ女子あろたり左母二郎ハ欠伸し。鏡子ハ著し。鬢推  
 拭い何るたぐし。諄言よ。謂をまけハ有る。親の為ハ孝女でも  
 信乃が為ハ貞女でも。こがあましく命を惜むも夫の為と  
 心ハまよく助け。寔ハ益の殺生も皆見已が心く。脆く見えくも  
 是ハ命根。あつと灸所の深痕も。長物語ハ感心。褒美ハ只一口  
 ちひ。この世の暇を取せんむ。いづくといひく。食ら。鏡子を遠く懐  
 夾め。地上ハ樹ハ小刀を抜ち。閃りと見せ。直ハ血塗序。この刃で  
 とどまよ。けど等一等飽ま。濱路が念成被ち。村雨も。引導せん。豈  
 飲し。と。あ。笑。小刀を拭ハ。鞋ハ納め。腰ハ帯。又村雨の刀を引  
 提。親念せよ。と。ま。かれハ濱路ハ。頭を搥。幾仇人の心。死を。丈夫の

刃ふかゝるハ本望ほんまうこそ。我われハ左母二郎さむらじろは由亦遠よもよほくも。寂期さむらじハかくの如ごとくちうと。  
いせも果たまを眼まなこを瞪とらり。憎にくれ女むすめが雜言ざごん多おほ息いきの根ね輟とんと引ひ著つて。胸むね前まへ刺さん  
と見みりも刃やいばの光ひかりハ先まへぞくく火定ひぢやうの坑やちの邊へらよ。誰たれもあまぞ打うちたれれん煉れん  
の銃てつ鏡きやう愆せんとぞ。左母二郎さむらじろが左ひだりの乳下ちのち裏うらかくまで小打こうち込こり。灸所しうじよの痛いたみ  
雲うみ時ときもゆ堪たび。大刀おほやいばあり落おと苦くと叫こゑぶ声こゑゆる共ともは仰あげり。時ときハ又また怪あやむ  
べ。坑やちのほりふ忽然とつぜんと立た頭あたまる。是これ則すなは別人たれちうと火定ひぢやうハ終つひど  
示しる。寂寞さむ道人だうじん肩柳かたやなぎあり。初はつハ異いちる。形容けいよう亦また是これ甚し麼まろ打うち捨すぞ。  
但見たゞみ膚くハ六む駄だ舌ぜつ南なん蛮まん鐵てつ鋒ほうの纏まと身み腹はら甲かぶを透す間まちる。領りやう具ぐハ細こ小せう墊ちやう  
生なる蜘蛛くま似に似にり。桂けいハ唐たう織しる。段だん筋しんの廣ひろ袖そでの單ひと衣きぬを裾すそ短みぢハ被か  
あつる。秋葉あきばを流ながる。飛泉とせきの如ごとく。腰こしハ朱しゆ鞘せうの大刀おほやいばを跨また足あしも杖しやう藁がうの  
厚鞋あつせんを穴あな。大平金おほひらぎんの細密こま針はりハ十五頭じゆごづつの膈はら楯たてハ濃ぬ紫むらたる。圓まる拈ねん乃なり

帶おび髻かみ高たかハ統とり。齡としハ尚なほ青あお年ねん二十にじゆ左右さうりやうハ中ちゆうやある。人ひと眉まゆ秀ひら眼まなこ清きよく。  
色いろ素すハ唇くちびる朱しゆく。耳みみ厚あつハ齒は細こち。月つき額かぶの迹あと長ながく生なる。髪かみ烏くろハ  
髻かみ蒼あは蒼あはかり。その志こころ望ぞう善ぜん乎や惡あく乎や。その行かみ法ぽう正せい乎や邪じゃ乎や。いさ分ぶん解げせられ  
と。一ひと癖くせあぶ。丸まる壘れい九く庸ようあり。と見えくけり。當あ下げ寂さむ寞ま肩かた柳やなぎハ左ひだり邊へら  
右みぎ邊へらを又また入いり。徐しゆハ歩あむ。程ほどハ左母二郎さむらじろハ呼い吸あ環わん會かいハ敵てき邊へらハ見みぬ。  
と見みくけ。立たち。銃てつ鏡きやう引ひ技ぎ捨す。刀やいばを杖しやうハ身みを起たり。躍とつる。移うつれんと  
進すすむを。うち見みる。此こゝ由よし騷さわぐ。彼あ此こゝ雲うみ時とき遠とほく。駈か惱なうハ衝つと入いり。  
矢や庭にわハ刀やいばを奪うば取とり。身みをむ。礮たうと破やぶる。米こめの牙はハ左母二郎さむらじろハ筋しん斗とを  
撲うく倒たれ。肩かた柳やなぎこれハ目めをうけ。頻しんハ水みづ氣き立たち。水みづ氣き立たち。刀やいばの鞘せうを推お立たち。  
刀やいば尖さり。鐔つば下したハ瞬しゆん也や。信しんと見みく。現げん音おんハ村むら乃なり宝たから劍けん拔ひ玉たま散ちる。  
露つゆ欽きん雷らい奇きハ妙たうハ燒や刃やいばの盡つハ天あまハ虹こう蜺ひの引ひく。地ちハ清きよ泉せんの流ながる。

似より豊城三尺の氷宮一函の霜定は世に稀なるべし。神龍こそかぬま  
 雲は吟ど鬼魅この故は夜哭ん今もよけしこの名刀こそかぬま入る  
 復讐の素懐を遂げた時到来の軟奇入奇と左も小程し右も小程して  
 又さうゆいんとも飽む嘆賞の外は餘念はるけり。紫下某生再説額巻ハ  
 この朝信乃は別とくつと後へ心引きく歩果敢とくを。あうの  
 盛夏の時もは樹蔭求く彼此は休ひつ又走る。千住河を渡を比日と  
 暮果く途いと暗し迷ふべ程のあふぬを。いふしてう外抜く駒込村乃  
 こも又まら。さう小中る心つたてへ立戻るとも途は損あり。本郷坂を横  
 きりく礫川よりととらふ。こが身は假傷造らんも。あうくは迂路とて月の  
 歩をちんてよけれと肚裏小言思ん。初更過る比及は圓塚山を越るよ  
 ん火定ありと途みく。茶毘の滅び。その邊明かりけるよとん  
 れは鮮血は塗れつ。休むる男女あり又白刃をひ小會る。一個の癡者立在る。  
 中こそめめと端く進むと松の樹蔭は躲ひく。その為体を窺ひける。さる  
 程は肩柳の鞋より揚ぐ刃を納めよ。臥る道路がほりふ。つひめて中を引  
 起し。遠く懐中より薬をとり。おろし小衛し女子とて。結する声も薬もま  
 りてや。んは怪しめ抱ふ。さう驚愕る。只管は放さんと。岡嶺も肩柳ハ  
 うほむを放めど。縁故を告む。さう姓名を告む。は仇軟賊と疑ひく。  
 驚たもせん。おそしもさうん。深處る。さう各所はあふ。心を鎮く。さう  
 るをせの。今般小志願を遂よ。いられ。息を吻とつた。さうあふ。何人ぞ  
 と向つ。顔をうち目成。は我うち見て嘆息し。名告む。は憚る。おあふ。ねと  
 夜の繁山外へ入る。さう小圖ら。環會し。さう。則そ。この為。小異母の兄大  
 山道松忠與とゆ。さう。の故。ゆ。さう。の秋。ゆ。姿を。変名を。更。め。寂。寞。院

八世傳三轉卷四

九四

山青堂藏



左母二郎

九六

山崎堂藏



名刀美  
女の存亡  
忠義節  
標乃環會

道松忠興

額藏

乙中

山崎堂藏

肩柳と世小唱とる假修驗中、呀とく火定を示し愚民の錢を促さる軍  
 用の為り、君父の讐を報ふあり。抑も主君煉馬平左衛門尉倍盛朝  
 臣豊嶋平塚の一族共侶池袋もく、鼓もひく父大山負與入道道兼大人  
 自餘の老黨負を竭く、冥土の魂供もくけ、煉馬の館も焼撃せられ、  
 生残るもの絶くあり。これ亦命を惜むるあり、組も死もつら敵も逢ね、  
 不思議な戦場を殺奔て遂に復讐の大義を企家、傳る間諜の秘術、隠  
 形五道の第二法火遁の術を行ひ、修驗者小容を彦或とて、烈火を  
 踏く愚民も信を起させ、又或とて、火定は終を示し、錢を召び財成  
 聚めて軍用小えんと、火を投ると見せ、火も投らざり、全身焼亡と  
 あり、火の外は姿を隠し、これを名つけ、火遁といふ、大約隠形五法  
 の第一を木遁といふ、樹に倚ると、形を隠し、敢亦頭を、第二を火遁と  
 いふ、火に遇ふと、形を隠し、人よきと、第三を土遁といふ、此は是  
 の足地を踏と、人よ形を見せ、壁も破り、穴も隠し、皆土遁の  
 一術、第四を金遁といふ、金銀銅鐵をり、その形を隠し、第五を  
 水遁といふ、水に没り、苦まど、又唯一杓の水をゆり、その形を隠し、  
 め、これを隠形五道といふ、原是張道陵が道術、唐山より、漢末より、今明  
 朝もこの術をよく、つるあり、我朝も、六條院の仁安年間、伊豆の  
 修禪寺に、唐僧あり、此は独木道の術を得、後、竊に兵衛佐頼朝に  
 侍り、石橋山の敗軍に、頼朝伏木の處を、隠し、虎口を、道れ、死といふ  
 其の、実、木道の術を、つるあり、又吉岡紀一は、眼の火遁の術を、つるあり、  
 其の、術、も、人よ、換け、源牛若丸、その、秘書、を、竊、圖、亦、火遁の、術、を、つるあり、  
 文治、高館、落城、の日、長、經、既、戦、勞、城、火、を、放、自、燒、塞、外、逃、去、

去りて火道の術よりする者なり。この後又、所術を傳授せしめられたるを  
 けり。独り家祖先より火道の一書を相傳せり。これたその書奇字隠語に  
 あり。時々の絶てあり。吾侪年十五のとき、これを破るべくその書を披閱し、聊發明  
 するにあり。是より夜とる日とま。讀誦工夫するに三年遂にその奥  
 旨をゆるむ。その法術左道より幻術に相近し。勇士の行ふべし  
 あり。父も告ぐ人も授けず。試するところ。今や君父の讐敵官領扇谷  
 定正ホを撃んとおのふ一人の資あり。人のころ成結んむ。金銭はまぬる  
 と尋思ふ。墓を火道の術より。火行火定と偽り。愚民を欺死彼此。此  
 此の錢を獲るとた。その地を立ち。今茲に下野下経より。武藏の豊  
 嶋を赤縁し。ち不火定の詐欺り。絶て錢を召し。つらくおのふ欲  
 所忠孝はゆる。實入賊あり。幾數の資をゆる。大敵をゆる滅せ。か。不良  
 の古えを一人を欺死物を掠る。小汚名を遂さん。悔く由正。たる。志  
 志。費せり。嗚呼。と。慚愧。堪む。願家。恨む。假髯。ど。め。り。捨  
 り。舊の姿。更めり。弟。と。定正を狙撃んと。ひ。決めて。再び。踏る。圓塚山。こ  
 隊人の聞諍。入る。一。隊。三。人の。悪棍。ハ。を。殺れ  
 たり。残る。一人。敵。の。癖者。いと。艶妓。と。女子。を。拐掣。と。り。ま。く。遍る。色。情。利  
 慾。後。され。ば。怒。は。乗。り。遂。に。女子。よ。を。負。せん。お。小。を。く。多。く。此。彼の。怒。罵  
 哀傷。を。竊。せ。り。小。女子。の。大。塚。の。村。長。墓。六。が。養。女。の。濱。路。と。り。今。の。名。を。う。ん  
 じ。れ。異。母。の。女。弟。あり。乳。母。を。正月。と。り。彼。に。二。才。日。れ。六。才。の。ろ。ろ。る。べ。云。云。の  
 故。あり。豊。嶋。郡。大。塚。なる。村。長。墓。六。と。り。の。小。生。涯。不。通。の。約束。と。り。そ。が  
 養。女。小。遣。し。り。と。父。の。告。を。多。り。は。こ。ま。る。べ。と。お。ひ。い。く。その。危。窮。を。見る。は。君。心  
 ひ。と。銳。親。を。打。け。り。女。弟。が。仇。を。殺。と。り。お。の。ふ。そ。の。幼。稚。より。結。髮。の。夫

あり。そのふり。若節を成す。命を惜む。仇を罵。又其の親同胞をうぐ。慕ふ  
 心操。負め。又孝あり。まれば。本意を遂む。是亦彼如。あり。まがら。  
 救ふ。工の。縫。事の。及。天。鑒。地。知。の。疎。善。惡。を。差。別。似。れ  
 とも。亦是。輪。廻。の。致。と。ろ。欽。脱。と。死。因。果。あ。ん。言。長。く。た。苦。痛。を。え。の  
 び。く。迷。ひ。を。散。り。多。う。そ。の。母。黒。白。と。呼。ぶ。こ。が。父。の。妾。あり。死。こ。が。母。を  
 阿。是。非。と。り。亦。是。父。の。側。室。ある。と。も。男。子。を。産。む。徳。又。依。と。嫡。妻。お。せ。て  
 の。ろ。側。室。を。畜。く。一。兩。年。を。過。し。是。又。孕。む。べ。く。も。あ。ら。ぬ。又。一。妾。を  
 畜。め。初。の。側。室。へ。黒。白。す。後。は。つ。つ。阿。是。非。を。産。む。の。後。妻。を。せん。と。約。し  
 西。妾。又。宣。く。汝。亦。兩。人。難。ぬ。男。兒。を。産。む。の。後。妻。を。せん。と。約。し  
 多。ひ。阿。是。非。有。身。長。祿。三。年。九。月。戊。戌。の。日。男。兒。を。産。て。り。

出生の子の則。これ生ながら。左の肩尖。大死。か。ら。る。瘤。あり。その。形  
 松の癭。似。と。は。と。道。松。と。呼。べ。十五。歳。の。春。元。服。し。名。を。忠。與。と  
 命。せ。る。父。の。欽。ひ。推。て。知。る。こ。が。約。束。あり。け。こ。が。母。を。り。て。正。妻。推。の。不  
 一。身。は。黒。白。の。妬。怨。と。氣。を。い。ふ。あ。こ。が。寛。正。三。年。の。春。渠。の。女。の。子。を  
 産。け。り。臨。月。早。春。あり。け。こ。の。女。の。子。を。正。月。と。名。づ。け。正。月。八。日。妹。を。産。む。こ。の。子。を  
 こ。は。黒。白。へ。り。後。は。つ。つ。阿。是。非。を。産。む。男。兒。を。産。む。日。後。れ。こ  
 女。の。子。を。産。む。六。日。の。菖。蒲。十。日。の。菊。を。産。む。あ。り。こ。が。あ。か。ひ。あ。り。こ。が。あ。か。ひ  
 あり。堪。む。あ。り。けん。寛。正。四。年。の。春。の。ま。あ。こ。が。父。の。主。君。煉。馬。殿。の。使。者。と。り。  
 京都。将。軍。家。へ。祇。候。の。折。う。黒。白。の。今。坂。錠。庵。と。り。醫。師。を。竊。し。相。譚。て。こ。が  
 母。を。毒。殺。し。吾。侪。を。縊。殺。し。時。疫。あり。母。子。も。暴。小。弟。ま。ま。と。依。り。菩。菩  
 提。寺。へ。葬。り。け。り。その。月。の。下。院。こ。が。父。京。都。の。官。務。と。り。こ。が。下。向。の。旅。宿。小。凶。夢



多かり。ことより日毎は月うち騒げ。ころいゆく。安き夜中日は継く煉馬の  
 暇著一様子を問へ。妻子の頓滅葬をせや。廿日あまり一而日とせえ。ふ驚死  
 憂哀。次の日寺へ詣り。墓所は香華をむ向ふ。又下は當り。小  
 児の啼声。くけ。是は更は驚死。怪しく住持は告ぐ。人を聚へ。發せ。んぬ。ふ  
 吾侪は則甦生して啼。たましく甚し。軀は技出。ころ。是れ死ぬ。ふ。異る。こ  
 ろ。只肩の瘤の上よりと黒。ち。ある。悲。生。て。形。牡丹の花。似。く。噫痛  
 ち。た。は。か。母。之。全體。既。は。腐爛。く。い。ふ。も。ま。な。け。は。舊。の。こ。小。埋。葬。  
 父は吾侪を携けり。まづ主君はゆえあげ。俄頃又奴婢を召よせ。る。の  
 の。越。獄。告。る。こ。の。年。吾。侪。は。六。歳。之。奴婢。亦。を。聚。會。ら。せ。一。折。父。は。對。ひ。て。箇  
 様。箇。様。如。此。こ。の。ふ。ふ。母。の。非。命。又。世。代。去。る。の。吾。侪。も。合。葬。せ。れ。り。  
 仇。ハ。則。黒。白。之。代。資。を。癖。者。ハ。錠。庵。と。告。ぐ。父。ハ。再。び。驚。死。怒。り。即  
 座。は。黒。白。を。縛。め。り。み。ぐ。く。鞆。同。志。め。ぬ。も。ち。く。陳。し。り。け。は。物。が。憑。て。や  
 い。ら。せ。けん。小。見。る。と。も。告。訴。明。白。竟。小。脱。路。の。な。れ。ば。黒。白。ハ。罪。ハ。伏。し。り。  
 これ。よ。と。く。こ。が。父。ハ。更。は。主。君。に。訴。せ。り。某甲。某。こ。け。り。錠。庵。と。稱  
 捕。し。て。責。問。ふ。こ。が。首。伏。の。趣。も。黒。白。と。異。る。と。る。け。は。此。彼。齊。一。法。の。ま。ふ  
 ち。小。斬。罪。梟。首。せ。り。と。り。ち。も。父。の。怒。り。を。ほ。か。さ。り。と。正。月。ハ。二。歳。の  
 女。の。子。も。と。も。その。母。大。逆。無。道。之。絶。く。こ。が。子。と。ま。さ。る。と。生。涯。不。通。の。誅。を。め。ん。く  
 ころ。へ。れ。ぬ。と。取。ら。せ。ん。と。い。ふ。人。を。求。め。ぬ。外。聞。を。憚。り。て。世。小。忌。の。四。十。二。の  
 二。才。見。の。ひ。の。り。と。養。育。の。料。と。り。永。樂。銭。七。貫。文。を。齎。り。大。塚。の。村。長。墓。六。才  
 の。ひ。め。小。養。ひ。取。ら。せ。ぬ。と。い。ふ。こ。が。年。十。二。の。春。母。の。七。回。忌。の。折。に。ち。く。わ。く  
 父。の。告。せ。ぬ。死。現。れ。て。六。才。の。と。り。黒。白。が。惡。事。を。告。ぐ。と。一。百。む。ろ。と。も  
 是。を。あ。が。え。む。と。い。ふ。と。母。の。横。死。も。そ。の。こ。の。り。ゆ。巨。細。ふ。り。懐。舊。乃。淚

座は黒白を縛めり。みぐく鞆同志めぬも。ちく陳しり。けは物が憑てや  
 いらせけん小見るとも。告訴明白。竟小脱路のなれば。黒白ハ罪ハ伏しり。  
 これよとくこが父ハ更は主君に訴せり。某甲某こけり。錠庵と稱  
 捕し。て。責。問。ふ。こ。が。首。伏。の。趣。も。黒。白。と。異。る。と。る。け。は。此。彼。齊。一。法。の。ま。ふ  
 ち。小。斬。罪。梟。首。せ。り。と。り。ち。も。父。の。怒。り。を。ほ。か。さ。り。と。正。月。ハ。二。歳。の  
 女。の。子。も。と。も。その。母。大。逆。無。道。之。絶。く。こ。が。子。と。ま。さ。る。と。生。涯。不。通。の。誅。を。め。ん。く  
 ころへれぬと取らせんといふ人。を。求。め。ぬ。外。聞。を。憚。り。て。世。小。忌。の。四。十。二。の  
 二。才。見。の。ひ。の。り。と。養。育。の。料。と。り。永。樂。銭。七。貫。文。を。齎。り。大。塚。の。村。長。墓。六。才  
 の。ひ。め。小。養。ひ。取。ら。せ。ぬ。と。い。ふ。こ。が。年。十。二。の。春。母。の。七。回。忌。の。折。に。ち。く。わ。く  
 父。の。告。せ。ぬ。死。現。れ。て。六。才。の。と。り。黒。白。が。惡。事。を。告。ぐ。と。一。百。む。ろ。と。も  
 是。を。あ。が。え。む。と。い。ふ。と。母。の。横。死。も。そ。の。こ。の。り。ゆ。巨。細。ふ。り。懐。舊。乃。淚

禁後つくと想像は正月もあらず父の子もた母と母と怨敵の親の  
 乗させぬひ女身をこそ豈にえりやと心よ占くこの後父は問ひ  
 父も亦再びひ出さるる如く年を歴くあひひける死今宵の再會且  
 躰ひく竊聞べその心さる実母小似ぞ貞實より孝順然る成薄命か  
 の如く邪世の養父母への事さどもあひ郎小あつと叶はざ無慙の癖者逼  
 迫こそが為る害せざる輪廻よりと解と死の実母黑白が惡逆の餘殃と  
 しとりのべた軟まるとも父の子へ豪奪せざる身を汚さず死に至るまで  
 操をえぎ今般よの親をぞよその貞その孝空ろく不憶兄は環會即  
 坐小仇を殺さ不及びくその數とろ此彼等しく疾左の乳の下へ善必  
 善報あり惡より必惡報あり今生の薄命は実母の故よわくの如死軟來世への  
 身の功德より佛果をばんと疑ひるその孝心を告る由る父の煉馬

家第一の差臣より後妻の横死よりと徳薄と慚愧の遂小主君小  
 仲えあけく祝髪入道志多入の家老職の舊の如く去年他袋北戦ひよ  
 比類る死働死く管領定正が家臣鬼門三宝平小數れ多ひ死享年六十二  
 歳これ復讐の志願成らざ亦復讐の多小死ん苟且ながら修行者小姿を  
 かえり因あれば又世をえの烏髪の入道父が法名を象りて犬山道節忠  
 與と名告るべかれが數とも存命べくあぬ刃の後れ先々眞  
 士の伴侶父尊又勸解有りて身後は親子の對面せんそれを今般の  
 忠ひでせよ女弟こと叮嚀は説示し又勸りて負小熟る勇士の如  
 抱猛く見えても骨肉の誠は小頭と見一回の長物語小十九日乃  
 月生く野火小代りて明く光る亥中へ中深めて子の時近くるり小けり

里見八犬傳第三輯卷之四 終

南總里見八犬傳第三輯卷之五

南總里見八犬傳第三輯卷之五

東都 曲亭主人編次

第廿九回

雙玉を相換く額藏類を識る  
兩敵は相遇て義奴怨成報ふ

濱路ハ事の趣を仕づく小敷丸ハ十寸鏡影を以認ぬ家父家母のたれ名告  
ころ兄道節らいも切あ言の葉小露の玉の緒引とあれて霎時苦痛を忘れ  
よてふ情願ハむら稱へとも又想像る良人のる。こが宿業のまを竟ふか非  
命ハ實の母れ造り罪よ報ひま。妹伏の契里浅芽生れ小野又屍と曝  
らんさ。ハ因果の理り小悟の窓を掲げとも。あふらち曇る胸の月現煩惱乃山  
の袂は碎けく落る涙の塵のちとむらの兄と今さふ面あらはるも恥しく又浅  
ましく哀しさいやく弱る命根の今を限るとあふらるをいづく一言送さんとや屋

八犬傳第三輯卷之五

く小頭を擡ぐ。いと苦いげ。息成。吻。元。来。あ。ん。が。は。こ。ろ。が。家。兄。軟。仇。さ。入。替。く  
 る。あ。ま。り。と。ひ。ろ。く。た。ぬ。抱。へ。あ。つ。を。別。と。の。今。般。の。對。面。現。え。ら。う。き。限。り。あ。つ。り。  
 い。と。慕。く。年。月。と。あ。つ。の。り。今。さ。と。ふ。ゆ。く。小。哀。れ。家。ま。の。陣。歿。た。れ。名。を。  
 ま。つ。せ。あ。ま。の。心。ち。も。あ。つ。る。所。産。の。恩。の。高。た。實。の。親。を。あ。ま。と。過。さ。さ。り。  
 人。と。生。れ。一。甲。燈。火。あ。ら。う。と。い。へ。悲。く。あ。ら。う。く。神。佛。よ。り。然。あ。れ。せ。祈。盡。く。  
 物。体。も。も。恨。ま。る。の。ゆ。え。一。小。絶。え。ん。と。息。の。内。よ。そ。の。願。す。の。稱。ひ。一。を。  
 神。の。眞。助。軟。佛。の。慈。悲。軟。歡。一。は。就。く。亦。哀。し。も。ま。ま。と。こ。が。弟。の。業。因。母。へ。と。  
 同。へ。家。兄。の。為。よ。母。の。讐。る。あ。よ。た。れ。罪。科。家。尊。の。怒。よ。こ。ろ。へ。さ。入。乗。を。  
 ま。へ。あ。つ。け。ら。れ。慈。悲。と。あ。ま。ら。く。外。小。も。訪。せ。ら。ぬ。親。胞。兄。弟。を。心。は。よ。  
 一。と。恨。ま。て。一。ま。ひ。の。暗。く。又。曇。る。涙。の。雨。よ。兼。虫。の。父。と。鳴。げ。ど。鬼。の。子。れ。母。よ。  
 等。し。た。死。後。の。恥。世。に。在。る。程。の。養。親。建。の。貪。欲。邪。懼。は。身。を。あ。れ。ら。う。く。い。く。そ。  
 かくその心成。若。め。偶。結。ひ。妹。と。伏。の。縁。一。果。敢。る。く。中。絶。く。仇。あ。る。人。小。伴。れ。俱。よ。  
 この野の土とる。が。情。死。と。や。世。よ。誰。と。ん。眞。土。の。障。子。と。世。の。と。た。の。う。ご。心。れ。と。あ。れ。  
 る。ゆ。え。こ。ろ。が。丈。夫。の。故。管。領。持。氏。朝。臣。譜。代。の。近。臣。大。塚。匠。作。好。み。孫。  
 大。塚。番。作。一。成。大。人。の。一。子。よ。大。塚。信。乃。成。孝。と。あ。ん。呼。ま。る。弱。冠。よ。つ。り。  
 こ。ろ。が。養。母。の。甥。あ。ま。も。その。心。ざ。ぬ。いと。正。く。文。学。武。藝。よ。暗。う。を。由。緒。  
 ある。氏。士。よ。侍。と。も。な。や。孤。と。あ。り。一。伯。母。夫。許。才。を。寓。せ。く。所。領。の。田。  
 園。を。横。領。せ。し。れ。いと。窶。き。く。侍。あ。ら。う。時。運。よ。任。し。く。人。を。怨。む。家。小。侍。の。  
 名。刀。あり。そ。の。村。兩。丸。よ。侍。の。親。の。送。訓。よ。年。來。の。宿。願。と。摘。果。さん。と。く。  
 件。の。宝。刀。を。携。う。許。我。敷。へ。あ。ら。んと。せ。り。前。の。夜。よ。伯。母。の。夫。婦。の。腹。き。た。  
 る。この。左。母。二。郎。を。相。譚。つ。神。宮。の。渙。獵。よ。假。托。く。宝。刀。を。搦。番。奪。ハ。せ。く。る。小。  
 左。母。二。郎。も。亦。好。智。を。り。く。横。取。く。腰。小。帶。り。さ。ら。と。も。あ。ら。う。く。良。人。の。

許我へ糸をくわく小鹿忽をりひと死なむ。いぞ宝刀をとり復さんとつひよ  
 甲斐ふれ必死の深獲えぬ水のあられよふとくゆく身惜まむ惜むを  
 良人の名ふけり願ふにめん刃の資のよきより直に許我へ赴死そが安否を問ひ  
 定めく宝刀を處与多うふばよふた恩愛ふけり産の母の故を以て家兄  
 うりてそかるる。いとひくく惜まむ外よふべなる死後ぞでの心かす結果  
 させとも大慈大悲の恩徳さうん只願ふにこのるの聴容て家兄の  
 君頼む言葉よ声枯まて霜宵の虫と細らめけり毎は漬る血一平よ  
 まへるるまけり道節ゆめく嘆息一母と母との故をりく。これ老う移くも女弟を  
 思んや夫をわらふ今般の願言推辞づればあなねども。その家事ゆく私之君父の  
 誓を後みく私事を先よまて。これ八月ごろ君父の誓翁谷定正の竹  
 よろく下刀小怨を復さんとあふおろ。その便に復るがと一不思議よふ小

入るこの名刀をばけりく雙小迫つれ宿望遂く餘命あぶその時小しそそか  
 この夫犬塚信乃とやらんが安否を問ひ。あもあて環會へ村雨丸を返さん  
 けはこハ憑まぬるの。あま定ふけり。これり誓のよ小死るがこの  
 大刀も亦分捕せし君父の為ふこの刃を忘る。山豆妹夫のるのとありんや。  
 貞操節義の婦人の道へ忠信孝義へ男子の道へ勇士の本意かくの如し。  
 と埋り迫く喻をふらん濱路の望を失ひく。あま何とやうに双言と討て  
 の後あふけり。と心つた回答は忽地留塞りく。一声苦と叫びけり。  
 そがち息の絶まけり。道節臉をまぶして儔掃る女弟が節操今般に  
 送せ。一條を肯さるも武士の意地せめく。ハあ小亡骸を斂めて眞府の廿七  
 惱を救ん。さうとくをて抱れ揚ぐ。火定の坑へ推おろし。残まる柴を投入る  
 是ハ夜風のまふく埋火の再び燃え。茶毘の煙へ鳥部野の夕もかく

やと想像る歎死はるゝめふいとまにて雲時護アそ合掌一泡影無常。弥陀方
便一念唱名頌生菩提弥陀佛とことと廻向なり。張然とて才を起し彷徨
とてまたほろろと又救回嘆息し。大約法師の終を執る小柴薪を積てみる
とて焚火を火定とらん。唱うるが朝云信濃るる戸隠山の長明法師が鳥部
野に火定せり。又紀國那智山の應照も終を火定ふ執りし。元言
釋書第十二卷忍行篇に載るるめぐり。ことの大義を舒るる。謾
愚民を欺死し。火定の因果眼前妹が身を焚く茶毘とふられ。こと亦
いつきの郷に死し。いつきの野に骨を埋ん定められ世のたまたま以後をそ
先たるも北郎山頭一片の煙とあり。いと果敢なり。とむりむちう天うら
仰死すやれ歎死し。夜の深きころこの山と踰んとて彼名刀を腰に跨ぎ去
んとする程に後方に嶺を覆ひ額藏の濱路道節郎が問答をかちりる。此獨向
負操義烈は感佩し。嘆息の外あり。一うも熱は彼処に到るが節婦乃臨
終を慰むる。うさかるとする。うけと。そが兄とて誠訴す。物を比腰と折らん
躲とてゆめにおぼるる。いと心ひけ。とて端をむ復つくと。ゆめは復る村
雨の一下刀へ左母二郎が横畧せ。成道節郎がゆ小落と。とて廻件乃大刀とめて
雙言と近く便著せんと。濱路が送言をうけ引る事。越え膳洗れ。と。肚
裏小おのひか。定正ぬ。ハ大敵の道爺死力を竭。と。も。怒は報ん。と。報らむ。
渠敷とる。ハ大刀も喪ん。縦彼人雙言を敷く。前諾に負く。と。ある。犬塚生。ハ彼
宝刀を返す。日のあると。いふ。と。火急の難義を救ふ。足る。と。轍の軒。ハ水
と。飼う。日を歴る。枯魚を市に訪ふ。と。亦何の益か。ある。さ。傍ま。く。由。犬塚
生の安否。い。と。心め。と。形一。名告。と。由を告ると。明。地。ハ大刀を。と。と。渠。その
妹。小。許。は。い。ハ。是。ハ。處。与。人。や。組。伏。と。と。復。ん。と。心。ひ。決。め。ん。腕。を

四 山崎堂藏

活人の如

字に

おとせいの

家の

玉

玄同

徳  
印



道松

巖蔵

五

上三巻

振りて瞬もせむ。爾は規とて。其の彼を。濱路を火葬し。村西の大刀を腰に挿し。副  
 左まんとして。一歩も歩かず。瘴者等と。呼ぶ。樹蔭を閃と。走り。出く。刃の端を  
 丁と。扱。西二歩。引戻せ。敵。驚れ。な。が。う。振。之。く。瑞。く。小。拂。以。除。大。刀。と。扱。ん。  
 之。れ。を。横。ぶ。る。引。組。る。技。も。力。も。あ。ら。ぬ。優。者。と。勇。者。の。相。撲。み。  
 寸分の隙あり。ど。ど。送。又。扱。さ。る。以。放。さ。る。曳。く。声。を。あ。り。立。て。ち。り。足。と  
 踏。鳴。し。沙。石。を。飛。し。小。草。を。蹴。む。き。西。虎。の。山。に。戦。ふ。如。く。鷲。鳥。の。肉。を。争。ふ。  
 似。く。も。果。へ。く。も。あ。ら。ぬ。し。う。し。う。ふ。り。志。ん。額。藏。へ。手。来。膚。を。放。さ。る。護。身  
 囊。の。長。紐。糸。ま。く。道。節。が。大。刀。の。緒。の。く。ま。も。あ。く。黄。縁。の。挑。む。め。く。  
 引。離。ら。し。む。囊。の。被。が。腰。に。著。る。を。取。ん。と。さ。る。後。小。さ。ら。ぬ。も。り。や。緩。そ。ん。  
 道。節。忽。地。振。ら。る。大。刀。を。引。抜。る。替。人。と。見。ま。は。る。ろ。ろ。と。扱。合。せ。て。  
 丁。と。抜。失。と。戦。ふ。大。刀。音。電。光。石。火。と。見。め。を。一。上。一。下。の。煉。の。刀。尖。沈。て。拂。へ。

跳。躰。引。ば。著。へ。し。進。め。ば。む。く。樊。噲。が。鴻。門。を。破。り。と。丸。團。羽。が。五。圍。を。越。る。の。日。  
 孰。か。芬。り。孰。か。勝。ん。天。の。隈。る。月。の。照。り。地。に。亦。茶。毘。の。光。あり。真。夜。中。か。が。  
 明。々。と。ば。る。及。相。挑。む。迷。う。と。ま。ま。道。節。俾。て。撃。へ。刀。を。額。藏。左。に。受。流。せ。ば。  
 刀。尖。あ。ら。ま。り。腕。より。流。く。鮮。血。を。物。も。せ。ぎ。と。丁。と。一。せ。り。大。刀。風。尖。く。道。節。が。  
 身。鎖。の。懸。齒。刀。尖。あ。く。裏。徹。く。有。る。瘡。を。砍。傷。ま。ば。黒。血。さ。り。と。潰。了。  
 瘤。の。中。小。物。あ。る。冬。蟻。の。如。く。飛。散。く。額。藏。が。胸。前。へ。破。と。當。る。以。落。し。と。  
 遣。を。左。に。楚。と。握。留。く。右。の。小。刀。を。閃。り。又。透。間。も。あ。く。切。結。大。刀。を。ち。侮。り  
 か。け。道。節。の。受。と。め。又。受。あ。ら。ぬ。声。を。あ。つ。と。立。や。よ。等。一。等。の。り。あ。る。あ。る。  
 汝。が。武。藝。甚。佳。と。復。雙。言。の。大。望。あり。豈。小。敵。と。死。を。決。せん。や。且。く。退。け。  
 と。い。へ。ば。あ。ら。ぬ。額。藏。眼。を。瞪。し。と。さ。ら。本。事。と。あ。ら。ぬ。形。命。惜。く。村。西。乃。宝  
 刀。を。處。子。く。疾。く。去。れ。か。り。こ。を。誰。と。ほ。る。犬。塚。信。乃。が。無。二。の。死。友。大。川



莊助義任は汝が名はゆめり犬山道松鳥髪入道道節忠與宝刀を返せ  
 敦圀へ道節呵々と冷笑ひこが大望を遂げやうへ女弟ふまを引さる  
 大刀を汝と與んや否とてやハとく處とせと再び詰よせ附廻りて跳  
 躓りて丁と撃を左邊に拂ひ右邊に挂る道節は遠を拂りて火坑の中へ  
 飛入るる霞と立ち上る煙とを小往方へあまをさるる小けり額流吐嗟と追  
 かむく俯く見ら又仰く瞻るる原果火道の樹をわく逃去り欽残念と  
 小ても道節が瘡口より飛出くこがふみ入り何あつらんいと不審と燃残る  
 火光よとせと熟視るふ吁不思議や犬塚信乃とこが秘藏せ考義一  
 双の玉小等しく光の形も寸分違はぬこの玉も忠の一字ありこが志生怪  
 しと敬罵くまむ小又とんかすん沈吟に忽地噴く莞尔と笑み此彼どひ  
 日か玉を秘藏せり護身囊の彼が腰刀はかすを取らるるその肉身より出る玉の  
 影ぞこがふみ入りて奇異とやいん微妙とやせん怪しといふもあまのあま  
 これより推したるこが玉も彼宝刀も後ま復る時あらんそふとまれかくそ  
 おも犬塚生が許我の首尾心り飛き限るまどおまはすの因縁あらん  
 彼れも神の冥助あづりいつむるふもふもあまの許我へ十六里今東  
 間よ告るふりまそ中犬塚へまゝり復せんまもあらん豫て假傷を  
 造らんとしつらわら幽損傷負りこれ物怪の幸ひる軟と自問みづる答て  
 る拭をりて瘡を包み又燃然と火坑を見入りさふもも濱路との丈夫中  
 及ぶ心烈節義いと痛ましくも感あつる日ごろの腹心をまもるるあま  
 了らんと死しむ必死あらん犬塚生に再會せむ力が最期の心烈と巨細ふ  
 告て後の世小夫婦一蓮托生の契を固うまらんとこが下言の心向を受て解脱の

八犬傳三輯卷五

山本堂藏





只管外口を庖丁は負せしき羞を暗まとも羨美の龜條がふんを盛一められん  
 まつとく人を叱りもゆるるる座忽地をけりかくと又盃を勧るる賓  
 主の辞讓果しあはれ宮六の中居くよその盃を受る小あん龜條へ添て  
 離婢小節せざる救待態は宮六へ傾んとく半もゆ喫む喫咽里又伏沈  
 會する盃を擲く咳くと其くいと苦いげ小あんへくそそのゆふと龜  
 條の後方よりて背を捺し墓六の湯を勧めく五倍二共侶ゆ抱よ  
 宮六涙を推拭ひ式飲故実うあがれどもよとよ熱醋を飲せしる惜る  
 と怨念は墓六龜條をそれさひく桃子を引よせりその香を觀小果と  
 酷るり再之の鹿忽は愧く婢女們を罵れどもよ亦龜條がふんを節  
 ころのろまば人を外けりよりもち夫婦の冷れ汗を流さ額を席薦ふ掘  
 埋めく辞存く勸解く五倍二又又胃くるさ執るるごとく大なるあざ  
 色入庫一の酒宴るる且六堂研のいごとく混雜の夫婦あらん新人の病者か  
 ら彼人へ障りまへりよとよ小あんは饗食に心なり再度の鹿忽の酒と醋と等  
 類ゆき色も似たりよが束藁子よあまをえれ寛仁大度の殿上人かぶりの  
 ら何うあらんこの盃一巡りく婚姻の席小更めあるるよと搜擲は宮六を稍  
 憤り解く又不血をよと揚りあふ夫婦は飲びく桃子を引よせ更種  
 の酒殺を添て盃を勧め程は夏の夜あま短くてを子の時よりゆりあふれ  
 とも濱路を出さく五倍二頻小焦燥くまづく催促まくこれバ夫婦はあま  
 困り果く軍木を傷く請報は墓六やぶりのひるか婚姻の今よ今よ仔細  
 らくゆとも濱路の甲夜より瘡幾りくゆふともせんまをな一僮僕們をま  
 只管醫師を請来せども小夜のるあまの醫師はさる人橋をけり僮僕們  
 さ一人も帰るま心苦くゆふとも瘡のるゆふともあまの日はあまで瘡

只管醫師を請来せども小夜のるあまの醫師はさる人橋をけり僮僕們  
 さ一人も帰るま心苦くゆふとも瘡のるゆふともあまの日はあまで瘡

「今要時代せぬと真一や小耳落とも五倍二一切け引む。そは亦謂ち新  
 人は病著あるハ豫々美知の婚姻を今さう翌まぐ待よりぬんや。いづれ  
 偽りあるハ新人の臥房へ案内ありその容体を一診せんある馬鹿と。敦園  
 ころ声あびつゝ高き色ハ龜條ハ傷痛く。俱は胃をぞ苦しめる當座脱こ  
 袂彈々夫の袂を引動し今ハ隠きふしゆあをぞ明々地と告ぐまさうと勸  
 解ふまさととあふいと。いづれと墓六嗟嘆ハ腋下より冷汗を推拊て容を  
 更め軍木大人願くハ舊の席は著る人か疑ハ釈やうさんと。いづれハ五倍二  
 ちくむりとあふおろ。請ふ隨小復しを。當下墓六も身を轉し再拜し  
 賢公西所上小在せり。あふ欺れなるとんや濱路ハ甲夜は逐電せりと告る代  
 西人使あを敬篤に怒り声をふり立逐電せりと事済べれや。その彼犬塚信  
 乃とあふんは妻せんとい路遺ア一軟又彼奴がめて走り一軟今速引戻せと

とどののくを聞くを聽んや戻せ返せと膝突進め。西人齊一逼立。かすけれた  
 墓六ハ却小胃を居く平伏。頭を擡縁由をゆ果多くと。あふ腹立の酷いれと  
 視さぬをたつ形を。且某がまうとより。巨細は聞召よ。信乃がらハ豫てより  
 告なり。情由あは渠を出し遣さん。と某夫婦志のびく小肺肝を推き智囊を  
 絞し熱く謀り。速離り渠のふく濱路をゆく。走るといふ死口疑いれハ  
 近鄰る浪人細乾左母二郎の。あひあはさるるあれふしゆゆ。被奴ハ俄頃ハ  
 家材を沽却し嚮は逐電せりと。あふ濱路を誘引出せ。あふんは。その折  
 時。奴親さ。僮僕們を駈立。追せ。と。あふ。返。と。又。さ。ら。あ。ら。を  
 ゆる。土田の土太郎といふのを備遣。間道捷徑漏さ。と。あ。く。追。捕。を。蒐。し。  
 る。あ。あ。は。曉。ま。で。あ。ら。ぬ。と。あ。ら。べ。斯。ま。う。さ。ふ。あ。ら。ぬ。某。が。白。髪。頭。を。取。り。せ  
 る。あ。も。恨。ま。り。枉。く。且。く。俟。せ。ぬ。と。龜。條。共。侶。辞。を。盡。し。く。肝。膽。を。吐。き。実。を

告<sup>つ</sup>く<sup>ら</sup>叮<sup>てい</sup>嚀<sup>ねい</sup>と和<sup>わ</sup>解<sup>げ</sup>とも宮<sup>みや</sup>六<sup>む</sup>五<sup>ご</sup>倍<sup>ばい</sup>二<sup>に</sup>ホも孤<sup>こ</sup>疑<sup>ぎ</sup>もは解<sup>げ</sup>けを俱<sup>とも</sup>小<sup>こ</sup>怒<sup>ど</sup>まる声<sup>こゑ</sup>さぬ  
 尖<sup>と</sup>く<sup>ら</sup>その胡<sup>こ</sup>乱<sup>らん</sup>と辯<sup>べん</sup>を振<sup>あ</sup>りて陳<sup>ちん</sup>はまの<sup>と</sup>と<sup>く</sup>聽<sup>き</sup>よ<sup>ら</sup>あ<sup>ら</sup>んや左<sup>さ</sup>母<sup>ぼ</sup>二<sup>に</sup>か<sup>か</sup>漢<sup>かん</sup>路<sup>ろ</sup>と<sup>と</sup>て  
 走<sup>し</sup>り<sup>て</sup>と<sup>と</sup>の<sup>の</sup>正<sup>せい</sup>に<sup>に</sup>証<sup>せい</sup>据<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>と</sup>密<sup>みつ</sup>夫<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>孰<sup>じく</sup>中<sup>ちゆう</sup>もあ<sup>ら</sup>ず<sup>と</sup>聘<sup>へい</sup>礼<sup>れい</sup>物<sup>ぶつ</sup>を<sup>を</sup>受<sup>う</sup>け<sup>る</sup>女<sup>にょ</sup>兒<sup>に</sup>と  
 走<sup>し</sup>り<sup>て</sup>せ<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>親<sup>しん</sup>も<sup>も</sup>同<sup>どう</sup>罪<sup>ざい</sup>の<sup>の</sup>ひ<sup>ひ</sup>釋<sup>しやく</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>は<sup>は</sup>後<sup>ご</sup>暗<sup>あん</sup>か<sup>か</sup>汝<sup>にょ</sup>ホ<sup>ほ</sup>の<sup>の</sup>初<sup>しよ</sup>より<sup>より</sup>贈<sup>くわう</sup>物<sup>ぶつ</sup>成<sup>じやう</sup>食<sup>じき</sup>を<sup>を</sup>く  
 熟<sup>じゆく</sup>く<sup>く</sup>吾<sup>われ</sup>們<sup>ら</sup>を<sup>を</sup>欺<sup>あま</sup>れ<sup>る</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>む<sup>む</sup>と<sup>と</sup>や<sup>や</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>熱<sup>ねつ</sup>湯<sup>たう</sup>を<sup>を</sup>飲<sup>の</sup>む<sup>む</sup>と<sup>と</sup>六<sup>ろく</sup>世<sup>せ</sup>結<sup>けつ</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>我<sup>われ</sup>  
 熱<sup>ねつ</sup>醋<sup>じゆ</sup>を<sup>を</sup>喫<sup>く</sup>む<sup>む</sup>る<sup>る</sup>戀<sup>こひ</sup>食<sup>じき</sup>心<sup>しん</sup>あり<sup>り</sup>や<sup>や</sup>東<sup>とう</sup>蕪<sup>わ</sup>子<sup>し</sup>を<sup>を</sup>敷<sup>敷</sup>せ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>款<sup>くわん</sup>待<sup>たい</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>汝<sup>にょ</sup>ホ<sup>ほ</sup>が<sup>が</sup>寛<sup>かん</sup>怠<sup>たい</sup>する<sup>る</sup>か<sup>か</sup>の<sup>の</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>は<sup>は</sup>重<sup>じゆう</sup>役<sup>やく</sup>を<sup>を</sup>弄<sup>も</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>村<sup>むら</sup>長<sup>ぢやう</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>加<sup>か</sup>旃<sup>せん</sup>前<sup>ぜん</sup>の<sup>の</sup>日<sup>ひ</sup>こ<sup>こ</sup>も  
 濱<sup>はま</sup>路<sup>ろ</sup>の<sup>の</sup>風<sup>ふう</sup>邪<sup>じゃ</sup>は<sup>は</sup>臥<sup>ふ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>偽<sup>いつはり</sup>り<sup>り</sup>今<sup>いま</sup>宵<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>疔<sup>ぢゆう</sup>が<sup>が</sup>幾<sup>いく</sup>度<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>前<sup>まへ</sup>後<sup>ご</sup>四<sup>し</sup>道<sup>だう</sup>路<sup>ろ</sup>の<sup>の</sup>非<sup>ひ</sup>義<sup>ぎ</sup>  
 乱<sup>らん</sup>言<sup>げん</sup>呀<sup>や</sup>詮<sup>せん</sup>濱<sup>はま</sup>路<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>出<sup>い</sup>で<sup>で</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>目<sup>め</sup>小<sup>せう</sup>物<sup>ぶつ</sup>見<sup>み</sup>せん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>左<sup>さ</sup>右<sup>う</sup>より<sup>より</sup>刀<sup>たう</sup>の<sup>の</sup>瑛<sup>えい</sup>窈<sup>やう</sup>け<sup>け</sup>と<sup>と</sup>謹<sup>きん</sup>責<sup>せき</sup>  
 たる<sup>る</sup>威<sup>い</sup>勢<sup>せい</sup>の<sup>の</sup>墓<sup>ぼ</sup>六<sup>む</sup>の<sup>の</sup>龜<sup>かめ</sup>條<sup>ぢやう</sup>も<sup>も</sup>顔<sup>かほ</sup>色<sup>しき</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>蒼<sup>そう</sup>さ<sup>さ</sup>め<sup>め</sup>く<sup>く</sup>魂<sup>たま</sup>不<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>身<sup>み</sup>小<sup>せう</sup>添<sup>せん</sup>む<sup>む</sup>仰<sup>おほ</sup>せ<sup>せ</sup>  
 實<sup>じつ</sup>に<sup>に</sup>理<sup>り</sup>ア<sup>ア</sup>ま<sup>ま</sup>實<sup>じつ</sup>に<sup>に</sup>然<sup>ぜん</sup>と<sup>と</sup>答<sup>こた</sup>へ<sup>へ</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>齒<sup>は</sup>戰<sup>せん</sup>と<sup>と</sup>止<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>ず<sup>ず</sup>孰<sup>じく</sup>附<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>難<sup>なん</sup>婢<sup>ひ</sup>ホ<sup>ほ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>

其<sup>その</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>は<sup>は</sup>汝<sup>にょ</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>且<sup>かつ</sup>く<sup>く</sup>は<sup>は</sup>墓<sup>ぼ</sup>六<sup>む</sup>の<sup>の</sup>胸<sup>むね</sup>を<sup>を</sup>鎖<sup>さ</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>後<sup>ご</sup>方<sup>ほう</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>服<sup>ふく</sup>挿<sup>さ</sup>の<sup>の</sup>刀<sup>たう</sup>を  
 取<sup>と</sup>り<sup>て</sup>宮<sup>みや</sup>六<sup>む</sup>ホ<sup>ほ</sup>が<sup>が</sup>ほ<sup>ほ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>措<sup>お</sup>を<sup>を</sup>西<sup>せい</sup>君<sup>きん</sup>今<sup>いま</sup>その<sup>の</sup>疑<sup>ぎ</sup>の<sup>の</sup>狐<sup>こ</sup>釋<sup>しやく</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>それ  
 刃<sup>やいば</sup>を<sup>を</sup>御<sup>ご</sup>覽<sup>らん</sup>せ<sup>せ</sup>よ<sup>よ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>尾<sup>び</sup>故<sup>こ</sup>管<sup>くわん</sup>領<sup>りやう</sup>持<sup>ぢ</sup>氏<sup>し</sup>朝<sup>てう</sup>臣<sup>ぢん</sup>より<sup>より</sup>春<sup>はる</sup>王<sup>わう</sup>敷<sup>しき</sup>へ<sup>へ</sup>讓<sup>じやう</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>村<sup>むら</sup>兩<sup>りやう</sup>の  
 下<sup>した</sup>の<sup>の</sup>信<sup>しん</sup>乃<sup>の</sup>が<sup>が</sup>父<sup>ふ</sup>犬<sup>いぬ</sup>塚<sup>つか</sup>番<sup>ばん</sup>作<sup>さく</sup>結<sup>けつ</sup>城<sup>ぢやう</sup>は<sup>は</sup>龜<sup>かめ</sup>城<sup>ぢやう</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>盜<sup>たう</sup>取<sup>と</sup>り<sup>て</sup>脱<sup>だつ</sup>去<sup>そ</sup>最<sup>さい</sup>後<sup>ご</sup>は  
 その<sup>その</sup>子<sup>こ</sup>は<sup>は</sup>與<sup>よ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>某<sup>か</sup>の<sup>の</sup>子<sup>こ</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>故<sup>こ</sup>小<sup>せう</sup>い<sup>い</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>る<sup>る</sup>日<sup>ひ</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>樹<sup>じゆ</sup>を<sup>を</sup>め<sup>め</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>信<sup>しん</sup>乃<sup>の</sup>を<sup>を</sup>神  
 宮<sup>みや</sup>小<sup>せう</sup>欺<sup>き</sup>引<sup>ひ</sup>出<sup>だ</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>刃<sup>やいば</sup>を<sup>を</sup>搦<sup>に</sup>香<sup>かう</sup>取<sup>と</sup>り<sup>て</sup>豫<sup>よ</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>管<sup>くわん</sup>領<sup>りやう</sup>家<sup>け</sup>へ<sup>へ</sup>敵<sup>てき</sup>ら<sup>ら</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>ひ<sup>ひ</sup>め<sup>め</sup>けれ<sup>れ</sup>ど  
 當<sup>たう</sup>坐<sup>ざ</sup>の<sup>の</sup>質<sup>しやく</sup>物<sup>ぶつ</sup>濱<sup>はま</sup>路<sup>ろ</sup>が<sup>が</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>臂<sup>へ</sup>牽<sup>けん</sup>出<sup>だ</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>齒<sup>は</sup>せ<sup>せ</sup>よ<sup>よ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>これ<sup>これ</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>この<sup>この</sup>墓<sup>ぼ</sup>六<sup>む</sup>が  
 誠<sup>まこと</sup>心<sup>しん</sup>あり<sup>り</sup>と<sup>と</sup>真<sup>まこと</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>件<sup>けん</sup>の<sup>の</sup>刀<sup>たう</sup>を<sup>を</sup>さ<sup>さ</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>示<sup>し</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>宮<sup>みや</sup>六<sup>む</sup>此<sup>こゝ</sup>二<sup>に</sup>氣<sup>き</sup>色<sup>しき</sup>を<sup>を</sup>和<sup>わ</sup>け<sup>け</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>刃<sup>やいば</sup>を<sup>を</sup>め<sup>め</sup>て  
 村<sup>むら</sup>兩<sup>りやう</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>正<sup>せい</sup>に<sup>に</sup>証<sup>せい</sup>据<sup>こ</sup>あり<sup>り</sup>と<sup>と</sup>問<sup>と</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>墓<sup>ぼ</sup>六<sup>む</sup>微<sup>ゐ</sup>笑<sup>せう</sup>と<sup>と</sup>陣<sup>ぢん</sup>代<sup>だい</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ご<sup>ご</sup>知<sup>ち</sup>て<sup>て</sup>や  
 ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>村<sup>むら</sup>兩<sup>りやう</sup>の<sup>の</sup>奇<sup>き</sup>特<sup>とく</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>引<sup>ひ</sup>抜<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>忽<sup>たち</sup>地<sup>ぢ</sup>小<sup>せう</sup>刀<sup>たう</sup>尖<sup>せん</sup>より<sup>より</sup>水<sup>みづ</sup>氣<sup>き</sup>雷<sup>らい</sup>り<sup>り</sup>殺<sup>ころ</sup>氣<sup>き</sup>と<sup>と</sup>合<sup>あ</sup>て  
 うち<sup>うち</sup>振<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>その<sup>その</sup>水<sup>みづ</sup>四<sup>し</sup>方<sup>ほう</sup>へ<sup>へ</sup>散<sup>さん</sup>乱<sup>らん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>驟<sup>しゆう</sup>雨<sup>う</sup>の<sup>の</sup>降<sup>ふ</sup>る<sup>る</sup>が<sup>が</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>某<sup>か</sup>既<sup>すで</sup>に<sup>に</sup>試<sup>し</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>何<sup>なに</sup>の<sup>の</sup>疑<sup>ぎ</sup>ひ

父死といふ小宮六もち領死現するよ一灰又彼のり且一見と取揚れハ電條ハ  
 蠟燭の真摘捨くさ一寄る燭臺を又引よほつ五倍二ハ小膝を進め音小  
 のくせのく名刀をよき折るふ一覽せる某さ入福ひあり。そくと勸れハ宮六  
 中より引扱死る刀と火光よさよせく皆ろ共見をよまよさげ檢れだ  
 水氣ハ頭まきどはいつふ。とちらぬ。とんかうんも雪ハる。果ハる。腹立て  
 只管小うち振るハ後方の柱ハ打當く刀尖些曲りぬける。五倍二を中くを  
 氣をえん。天暗名劍水氣ハたど。火氣絨帶ハる焼丸る。んとあざ。笑ハ  
 宮六も怒る。面色朱を汰死。墓六を信と睨ま。この白物膽太。かを  
 うつ。鉛刀を誰ハ村雨の刀とあひ。一度あ。二度あ。と。我侮る  
 老老奴覚期せよ。と罵る。電條遠く。声より絞。つ。か。ふ。言。ふ。も。  
 いぬ。夜水の温。と。紙。と。ハ。側。よ。入。つ。の。め。成。と。ら。せ。も。果。と。宮。六。ハ。合。さ。る。

刀を席薦ハ突立向ふ。小推曲。ハ。獨。蔓。の。如。の。と。と。紙。又。引。扱。て。投。出。し。  
 汝。ホ。か。つ。も。争。ふ。軟。と。五。倍。二。ハ。共。信。ハ。隣。客。の。癖。あ。る。ハ。挿。し。け。ら。と。腰。刀。に。及。ら。ち。  
 うけ。詰。よ。は。吐。嗟。と。騒。ぐ。電。條。ハ。腰。ち。抜。し。せん。と。墓。六。ハ。口。  
 呆。果。く。勸。解。ん。と。と。小。辞。も。ち。原。来。伎。倆。の。裏。を。か。れ。と。この。質。物。と。廻。  
 せ。ハ。信。乃。る。死。軟。左。母。二。奴。軟。二。人。よ。一。ハ。違。ハ。と。と。ハ。物。ち。今。と。小。入。を。  
 外。口。か。の。非。を。し。ひ。釋。へ。く。も。あ。さ。且。あ。そ。且。羞。と。忙。く。刀。を。起。し。逃。  
 んと。と。宮。六。ハ。や。と。怒。る。血。氣。の。勇。偷。兒。等。と。呼。び。免。く。抜。内。を。刀。乃。  
 稻。妻。あ。び。せ。被。る。一。撃。よ。墓。六。も。背。を。破。り。と。仰。ぶ。小。倒。る。紙。再。び。撃。んと。  
 晃。る。と。刀。の。下。ハ。電。條。ハ。轉。り。轉。り。宮。六。ハ。向。牆。を。抱。死。る。老。女。の。ち。ち。ち。も。一。生。  
 懸。命。五。倍。二。ち。見。る。死。鬼。王。妨。げ。と。と。電。條。が。頭。髻。を。左。み。み。か。ま。て。  
 引。放。さん。と。は。と。も。放。さ。ぐ。人。を。咄。ま。と。息。の。根。留。ん。と。刀。を。引。扱。き。肩。尖。



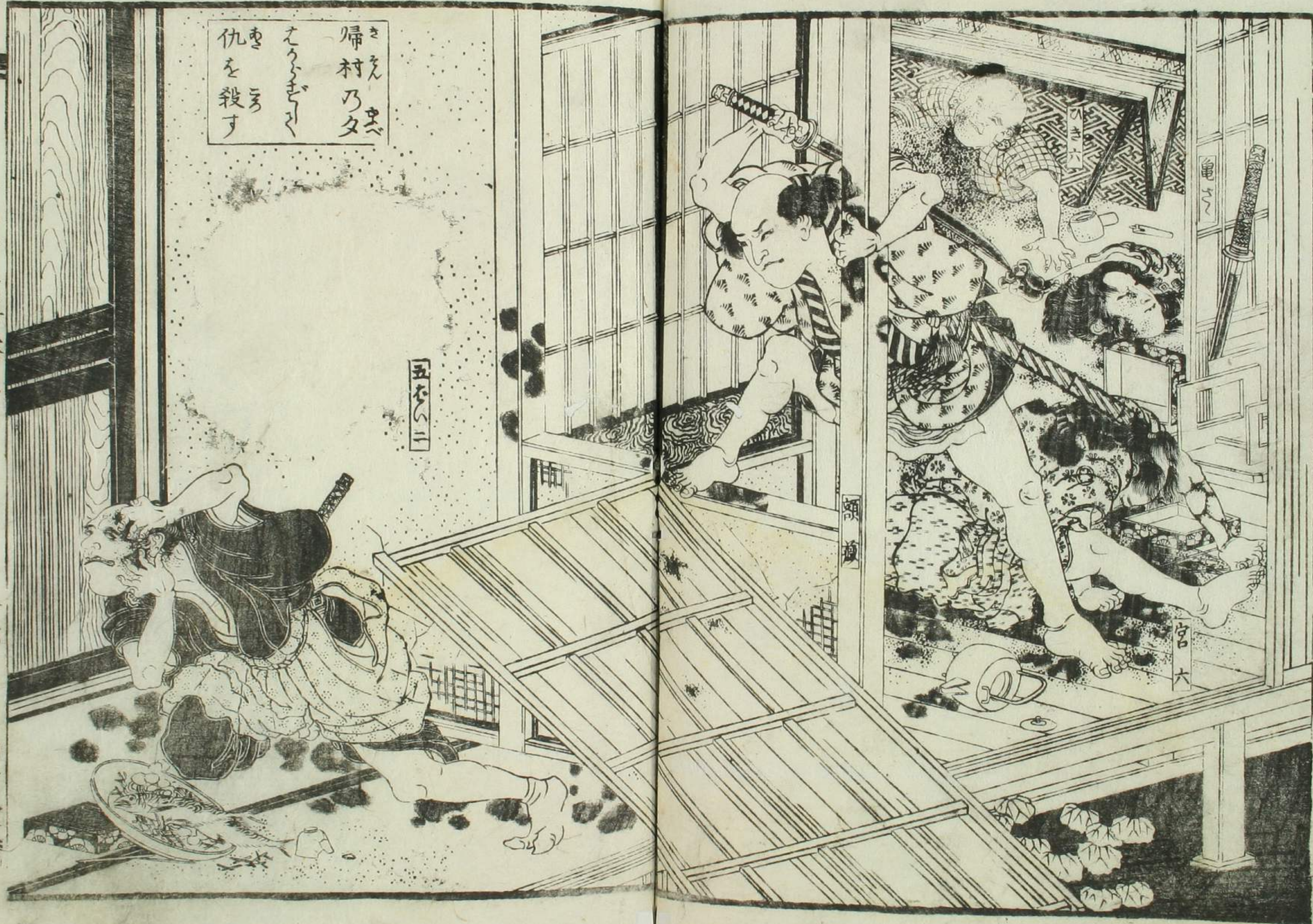


四五寸押砍おしきりよむらうととんと辟ひらかり。龜篠深瘦かめこゝろに霎時せきじも沼堪ぬまにむ。苦くると叫こゝろへむ。  
 宮六みやむも後ごなる小蹴放せきりらるその間まは墓六むらむと桃もも子血こち脊せを投なり。枉かたらる刃やいばを踏ふ  
 直ただし且かつ防戦ぼうえんへとも既すでは痛いたむ杖ぼう負おふとけは進退しんたいいよく不便ふべんへ宮六みやむも  
 さも丁ちやうと弱よわふ出でる騾ろ敷し夫婦ふうふ苦痛くるうの声こゝろへ枯かわまじく鮮血せんけつの泥どろ尾おとぬ  
 龜篠四跂かめこゝろ小墓六せうむらむ逃にげ迷まよひ蛇へびは追おう七摺しちせり八倒はつたうさぐれ命いのちへ惜おぼめらるる月つき脱だつ  
 まんと同どう撥はたく折濱路せつはんにち左母さむ二郎にらうホと追おう。先まを一人ひとりより来る背せぬへ背せ門かど  
 よると衝つと入いりて。庖福ほふくをえりて次の間つぎのまへいゆれとも一人ひとりもとも口宮六くちみやむも  
 後者ごしや四五人ごしやごにん賀酒かすけは酌しやくし。後者ごしや部屋へいは熟睡じゆくすいせる。故ゆゑあつらるる婢女めかけ們らの大おほ刀やいば  
 音ね小戦せうせん慄おそむ。悉しつ皆みな逃にげ亡ならう。背せぬへひらうてをえりて主人しゆじんふよりを告つぐん  
 とく縁えん類るいよると進しんと近ちかづれ書院しやういんの障子せうしを引開ひらき。目め前まへ小閃せうせんとらち被おる  
 五倍ごばい二にが刃やいばの光ひかりは一声いっしやう阿あと叫こゝろびもあむむ。右みぎの小せう鬚しゆ兵へいを砍き裂れき。後ごなる小せう深しん落らく

つ。そがさう養子やうしの下した小せう縣けんまじく苦痛くるうを忍しのびて音ねもせむ。さう後ご小宮六せうみやむは怒おこり  
 乗のりしと墓六むらむは數かず个こ所の痛いたむ杖ぼう肩かたせん。さうひの隨まふ切きるめは五倍ごばい二にも亦また龜かめ  
 篠こゝろが肩かたを砍きり股ももを劈ひれ十二じふに分ぶん小せう苦くるせむ。兩人ふたり齊いっしょ一いつ砍き殪し。ちのく絶命てつめいを刺さ  
 へる。浩こう如に額藏がくざうの圓塚えんさかより殊ことさう小歩せうほををめりてかたり。夜よ中ちゆうあふ  
 諸折戸しよせつこをのりて鎖さる主家しゆけの光景あかりあろめらう。と進しんへる裏面うらの絶てつ  
 人ひと氣きる。書院しやういんのうらへ倒たうる物音ものね嘯せうく人声ひとこゝろへけはひら。驚おどろけむ。  
 草鞋くさぜいを脱だつ捨すて走はしる。其その如ごとく忍しのびて。夫婦ふうふは砍きつれ仇かた人ひとを  
 日ひろ認まる。陣代ちんたい兼かね上宮六じやうみやむと属ま役やく軍ぐん木ぎ五倍ごばい二にのく胸むねは乗のり懸かり  
 刺さる刃やいばを引ひ抜ひけ拭ぬひまひる。と進しんへる額藏がくざう吐つ嗟さと懸かり。市いち所しよ何なに  
 へ逃にげまふ。下司げさもとも主しゆの警けいひらうて。脱だつまふ。とらちせもあむ。兩人ふたりへ信しんと  
 あらまじく諸声しよこゝろを命いのちをあらぬ思おもへる。陣代ちんたいは無な礼れいある。村長むらぢやう誅しゆ伐ばつせられふ。

きえ  
帰村乃文  
えうまぐり  
仇を殺す

五七二



奴婢ハ連坐をわすれし由まづ死に仇人呼り奇怪之汝も主の相伴させんと  
 蔑し誇り歎著る刃を外しく折合させ左右の拳を働しく西人が利腕を楚と  
 ぞんと動せどらんかうんく冷笑ひ莊官不越度あふ同注所てこそ罪を  
 さめ毛撥の折るもあふがる不各夜中の来臨ハ酒喫んとあ為ちる下郎も  
 亦五常市主を撃たせく阿容こと雙言を目送る法あるや推るふて雌雄を決  
 せんかひらひ莊官が庚子に坐りた小額額敵のふ足とせどとも立あられ  
 よと突放つ双るは替力勇悍又西人の膽を冷し捉まると腕ハ腕絶え推る  
 なる不覚が逃るとも脱せどとひいへく双方よりと声を由る復打るる  
 刃の下を閃々と潜りく腰刀を抜合せ二人を柱と戦ふる所要の善悪異るれ  
 とも今額藏が食する刃ハ前の夜ハ電線が信乃を撃てとく投る大塚匠作三  
 成が数戦を経る鋭刀あまのめハ素より稀世の豪傑自得の法範法不稱ひく

秘術を盡し奮撃突戦のまご十合小及むと逃んとする宮六を隅より九の  
 命の下まが幹竹割に砍墮し返る刃は五倍二が肩間を礮と碎けか若と叫と  
 逃走の逃とと進み程の宮六五倍二が後者ホハ後の大刃音ハ驚死覚て庭  
 門より走りまると見まハ簾上と既と撃まると軍木ハ痛いと肩の面ハ面  
 とく巻石ハ礮と跌れ向ひ遙く轉輾ひく脱るべくもあふまは事件の若黨西  
 人ハ己とを得む刃を抜連し額藏を駈隔よりそが間又西三人ある奴隷ハ五  
 倍二を肩小引被け或ハ心を添え足を釣り宿所を投て逃るゆを額藏ハ  
 怒る虎の群と羊を駈るど瞬間は彼若黨と左右へ撞と砍伏せし  
 再び追んと支出る衡門の邊もく濱路左母二郎ハ追ひつとく愈共侶と  
 立かへる僮僕ハ交遭けりこののどもハ額藏が血刀を引提る為体ハ  
 驚駭死く矢庭に持る六尺棒を横かると小連とく出由遣る推禁め

車の様子を問あり或ハ刃をうち落し縛めよと罵あり只置こと叫ぶ  
 の進むあ一人あり額藏へ情由ゆめぬ僮僕們は抑立せられて只管焦  
 燥も同士撃せんはさかして五倍二を撃漏り今ハ追ふも及びく  
 血刃を拭ひ納め且衆人より対ひてあつ夫婦が横死のり仇入敷上官兵を  
 撃留りよを告ぐ引く書院は赴けハ衆は皆更は驚死呆れ是非の分別  
 さらりあり只陣代を替り連坐をわきまなく忙然りそのとれ額藏又ハ  
 かりこも今宵小夜深く下総より飯村をれば事の起ハゆきねた主人夫婦  
 の移り折還りあせくかの如く五倍二脱去とてハ天も明ハ城中より檢察  
 の騎兵あへへ遅くハ回注所へ出訴し復讐の趣を詳し述人の今宵の  
 りハ各位の管るとゆめありは由互も額藏が一己のうみあへけは必  
 一も狼狽あり婢女們的ハ怖迷ひ逃亡りと見えゆを彼亦を索く取會

一人ありともとむとむとむと疑ひ被せん。そこのたのろ肝要と説  
 諭され衆人ハその識量ハ嘆服しつと懸くさひけり。○作者この段と創りて  
 むり謾は賈して之善惡心報果せる彼電條が不孝なり且淫濫する加る小甚  
 六が不義残忍の甚し神ハ怒り人ハ怒り是の奸惡と貪婪女と夫とあり婦とあれり。  
 この故小家は嗣げの子あり外は資べの友あり彼亦が大慾貪て飽て成るる  
 故は日々と煩惱絶るとま一竟りその惡縁を結ぶ必及びく亦許三の心之苦め  
 己が謀る所還る人ハ謀るを最後ふよる辱辱を受て宮六亦は辱戮せられ  
 たり。これなる不幸あり額藏あり一人義勇よく奸を鋤れ惡を拔り。  
 吁義あるも額藏汚吏の家は仕れども清死と泥中の蓮の如く亦くその主の非之  
 補ふく信乃がぬ護る小方あり不仁の主を主とて雪中ハ棄殺せられ母乃  
 為は怨を舒き又一飯は露命を繋ぐ己が為と思ふとせど今その讐言を移し

及びく龜條が授くる。そが親匝作が送刀をのりて人の僕する道を盡く。敢螺綫の外を辞せむ。噫賢なるが額藏宜忠美の人とまべ。

第三十回

芳流閣上小信乃血戦す  
坂東河原見八勇と闘す

却説その曉く小近鄰の莊客村の翁亦聚来と事の縁成同諦め或は同注所へ告訴し或は額藏亦をうち護ると程は天の明く六月廿日也。己の比及みあり小けり。浩如又敵上官六が弟敵上社平軍木五倍二分同僚卒川菴八ホ許りの火兵を招き莊官屋敷又弟の莊客們は業内を各書院の上坐小床几を立させ且此彼の死骸を展檢し了く額藏亦園宅の奴婢を悉召し守り事の顛末を訊問し額藏の主命より一昨下巻る栗橋へ赴け昨夕更蘭へ飯村の折主人夫婦が移りてをみる小田切が當座小

雙小報ふといふも愁は若黨ぞ。拵は刺傍輩小抑留せられ軍木殿へ撃漏し送恨限りたり又濱路左母二郎亦を追うけ僮僕們は官の濱路が婚縁のり并小昨夕婿入のり。又濱路ハ甲夜は逐電せしむ。追苗んとく食彼此へ奔走し終は及ぶとかる折衝門のりち額藏が血刀を引投て走り出ると撞見けむとち敬篤は推留するの。墓六夫婦が移れるも又額藏が陣代を害せしむ一切を成るごとく。當下社平の声をうり立かまは額藏が状始終甚胡乱。是れ既は實をゆる。彼奴ハ龜條が甥ありとち安んずる大塚信乃を竊し資を主の女兒を盗し。更は間戻し主の金銭衣裳を盗し。盗人となる程ふあ。夫婦は外けられ已と。ゆき墓六龜條を砍殖し。逃去るとせ折は。兄宮六ハ属役五倍二共侶は品草濱へ遠足のかつる。たまく湯を乞んとく墓六許立ると。不

意成勢多し命成隕一若黨又害せしむ五倍二人脱去れり。こ  
 五倍二が告辨の疑みし。実説とさふ不足り。いふとさふ。年来村の戸帳  
 載る犬塚信乃がをどる。第一の不審。又兄官六が溪路に聚る  
 る。どのの究める。虚言いふ。とある。陣代、嚴官、村長の卑職。この  
 昏縁相忘る。ど。況城主の免許を請む。堀入とらふる。あらんや。  
 加旗。昨夕圓塚の山中。細乾左母二郎。亦。四人を斃殺。怪しき  
 榜を建する。め。あ。と。亦。信乃。欽額藏奴が。所為。件の濱路を左  
 母二郎。又害せしむ。と。い。底。う。奴。何。且。下郎の分際。て  
 陣代を害する。律。か。大逆。何ぞ仇討。い。あ。ん。や。と  
 今彼奴を八創。兄の怨を復さん。か。も。あ。ぬ。所。あ。ま。ど。も  
 い。ま。ど。主君の免許をぬ。私。成。報。よ。り。る。官。六。が。七

骸をさし。飲。め。且。その。雙。言。を。擲。捕。人。為。率。川。生。を。相。伴。了。額。藏。奴。を。縛。め  
 よ。威。勢。猛。く。下。知。さ。ま。ま。と。心。も。あ。を。群。立。か。る。夥。兵。木。を。柱。額。藏。此。の  
 騷。も。そ。殿。原。の。仰。も。ま。い。ら。む。犬。塚。信。乃。一。昨。の。曉。許。我。へ。と。起。り。ぬ。衆  
 人。の。あ。る。所。當。坐。の。羞。を。暗。め。ん。と。軟。鷺。を。鳥。と。宣。ふ。も。墓。六。夫。婦。が。横。死。の  
 る。の。婢。女。も。も。し。く。知。し。忠。義。小。差。賤。の。差。別。な。し。主。人。の。雙。言。を。終。り。と。て  
 大逆とせし。縛。を。受。か。夥。の。證。入。あり。臆。お。を。り。せ。ん。と。て  
 甘心せざる。所。え。さ。も。公。道。る。べ。れ。や。と。理。阻。る。大。勇。は。夥。兵。木。を。下  
 り。も。阿。容。こ。と。と。護。て。を。り。これ。よ。り。菴。八。の。婢。女。を。推。並。と。その。夜。の  
 為。併。を。訊。問。か。會。社。平。が。氣。色。小。を。果。敢。と。ま。く。回。答。せ。ざ。る。と。て  
 問。れ。二。面。人。大。刀。音。の。か。そ。ろ。し。背。門。よ。り。逃。去。ゆ。り。と。と。て。知。ら。ざ  
 と。答。け。り。社。平。は。冷。笑。ひ。され。ば。丁。を。墓。六。木。が。害。せ。る。を。見。る。の。る。い。

そ成證人とまらうやあらんや彼奴らと鞭むらうでうら実を吐んと縛めつと  
 焦燥折らう篁子の下ふ入あるとく嘯く声くけきど衆皆驚愕怪しく云四  
 人より立ち軀く引出くくふ具則別人のふと墓六が老僕背ぬ昨夕五  
 倍二ふ小髪を破らまう篁子の下へ滾入る遂に息絶さう今漸に甦生しとく  
 幽又声を立ちとく僮僕們この内体は復駭ぶらうのをもあく昨夕和主かか  
 後六の野狐は魅されまうとそまのう一遍索ねらうのふと痠を肩さる縁  
 由をやあげよあま鈍まうやと勅アう縁類へ推上まう菴八回地く立ちりて  
 そめいふぞ成乳明さるふ背ぬへ昨夕傍輩ふ先とらとかりあふ墓六夫  
 婦が替る折らまうと縁類より書院の障子を開く八五倍二ふ小髪と  
 破らまう仰さる小滾落さる篁子の下は懸れく額藏が仇を替らまう  
 為侍いりまうりかア程は金唐痛まうその後のる代えど但敷上被軍

木敷よあが夫婦が戯まうるへ一定相違るといひけを既にこの證人の社  
 平へ今ゆふ証まうかぶらるるふさあまう菴八より対ひ衆人もまう  
 まう獨背ぬが側杖打を聞争のふ体を足らといふ証かまうや座実の  
 ま聞よらうの成渠一人を證とまう察する小背ぬ奴も額藏が支黨らうん  
 さらひひらびやといへ菴八異議申あく現さるるもゆらん且額藏ホと禁獄  
 えて事の越成鎌倉へゆえあが尉の殿大石兵衛尉の殿のち下知は任せ  
 ま退りく老輩と商量し舎兄のふ恥を雪め歩所のふ怨をかへはあありと  
 ままびてま見状を論せんあま外安まう且穩便に退ると耳語媚て和解ら  
 これより社平へ準備の轎子よ兄宮六が亡骸を扛乗させく彼若堂が元服共  
 侶宿野(遣)又額藏の相を被け背ぬを獲まうち乗せて社客ホと昇  
 つ卒川菴八共侶小城の向注所を投くかへま去ま夥兵ホと額藏を牽立





鞭を推拭ひ引抜たてて刃をさすふ村雨よりあざざりけり。是ハのふと驚かた。又  
 とと直しく熟視するその長短の等しけども焼刃ハをトふ似るべくもあらず。  
 心ひらけり。あまの月もち騒だてて駐まど又ついでに想像する。こゝに二の  
 大刀を片响も傍に置ざりし時もある。腰に帯さる日もある。こゝに三の  
 らんらんそと鉄と心ひあはさる。神宮河の船中の。莊官が綱をつられて水中へ  
 陥り。これを害せんぬの。さかづら。左母二郎と相譚。こゝに莊官を救んとて  
 続き水に入ると独彼奴ハ船に在り。そのとれ掲着するらん。彼左母二郎が人  
 と形の遊藝歌曲をよくうたふ。武器をぬりあつて。日下り。由由しく  
 その折刃を抜ても刃を且夜間のる。と。莊官の入水。救ひ。事ハ紛ま  
 疑はど。その宵よる。まきの。こゝに一身の進退。他責をいへる。進まされど。  
 事竟より。小及り。唯前門は虎を禦。後門より狼を遣。めらる。はらへ。

こゝにまがら。愚え既。宝刀を要ひ。父は不孝の子たるべく。君不忠臣  
 なるべし。何とせん。と。怒る。眼先凄しく。刃を撲地と擲。腸を割  
 り。後悔。悔ふ。せん。ま。は。つ。り。け。り。か。く。あ。え。た。あ。ま。ま。バ。刀。を。鞭。に。納。め  
 つ。數回歎息。宝刀ハ贖物。ある。を。あ。ら。ぶ。と。日。の。ま。ど。も。あ。る。今。その  
 る。を。知。る。が。許。我。敷。の。口。を。俵。に。こ。も。亦。ま。入。は。偽。ま。え。を。か。許。ま。う。さん。と。て  
 挿筒をとる。髪と搔拵袴の紐を結び。あまを。兩刀を跨。立。出。ん。と。は。る  
 後。は。忽。地。城。中。より。横堀。在。村。が。使。來。ま。り。信。乃。ま。い。ひ。く。安。う。さ。む。筋。を  
 對面。さ。る。使。ハ。若。黨。兩。人。ハ。奴。隸。を。招。た。く。柵。管。より。一。領。の。衣。裳。を。と。り。出。て。  
 これを信乃は進め。の。か。り。此。度。進。上。せ。と。ま。宝。刀。の。り。今。日。老。臣。達。の。一。覽。と  
 壁。御。所。の。見。系。よ。入。る。べ。け。は。速。に。登。營。を。入。り。て。時。裝。一。領。を。賜。る。の。あり。  
 横堀殿の指揮より。て。あ。ん。迎。ふ。ま。ま。り。と。く。出。入。と。い。ひ。信。乃。は。ま。ま。と。美。諾。し。

仰義のゆゑに某も亦上つたるありて横堀殿まゝに旅宿とせり  
 折よとあると聊ゆゑに日あるに賜められ衣裳は且く領けをせん誘めといひて  
 遠く走り去るに使者の若黨奴隸ホとるゆゑとて喘こぞ後ひる。後程  
 犬塚信乃ハ頼は進み。在村が弟小赴たあ下の對面を請よけしむるや  
 登營し。宿所は在るにせんとせん。又又小件の若黨小導をせられて  
 營中へある程今ハ衣裳を更ざらんも不敬るべし。とて入る局のりり  
 ろく彼礼服は更めり。あより調者の甲乙小償せり。遠侍小赴けハ縛を  
 最重り。在村が在るに成をせり。この故は信乃ハ宝刀紛失の懸念訴ふ  
 よる。心苦めけり。且く件の調者ホ又信乃を償して御見の同  
 赴けハ上壇は翠簾を垂る成氏朝臣の綱を儲。下は横堀史在村。その  
 他の老臣侍坐する。左右ハ鞍の近臣居る。又廊下の邊史

ある武士數十人齊く。非常を警言め整く。列を正せり。そのた体。暗  
 がましく見え。既して成氏著座。多し。翠簾を掲げ。さ  
 當下横堀在村ハ遙小信乃より對ひ結城の城。戦歿の舊臣大塚函作  
 三成が孫。犬塚信乃その亡父番作が遺言小隨ひ當家の什宝村兩の二刀と  
 獻する。神妙と思召さる。且吾們一見とて。大刀を進せり。とて信乃  
 一期の浮沈と多く騒が。頭を擡。小件の宝刀ハ年来盗とんとて隙と  
 空規ふ。ゆゑに某今朝も刃と拭んと。引拔ん。浅くや舊の刃。あ  
 ざり。程ゆ。搦番ら。ひる。且駭れ。且悔と。胸と。嚙と  
 その甲斐。よ。この。代。証。パス。推。せん。と。折。あ。ん  
 使を。慚。愧。は。堪。ど。所。存。齟。齬。せ。り。あ。ら。じ。數。日。の。宿。免。を。蒙。り。て。失。つ。つ  
 宝刀を。穿。牙。鑿。せ。り。復。さ。る。工。の。あ。ら。じ。の。差。を。願。ひ。な。り。と。い。は。せ。の。果。は。在。村。ハ

勿心地怒まる声をより立ち其の甚しき鹿忽失うといふ證據ありといふふそやと  
救圍謹う氣をふ信乃の此も臆せどおん疑ひの理に遠侍は問たる某が持  
余の一刀取よせし御覽せよその刃を村而るるね鏢も鞆も縁頭もその表装の  
舊の俵へて掲ぐるまゝの證よとてその刃の聴く冷笑ひ嘉吉より今に至て  
てや四十年又近一六七十の翁さるるよく認るる稀ある人只その證とまゝに  
刃より立ち水氣の多ふは這奴の敵かこの間謀者も疑ひるゝと生拘れと焦燥を  
廊下小列坐する夥の力士群立ち信乃の横堀在村が漫は權を弄びて賞罰を  
已がまや一人を容るるの器量あるはこれ阿容とて虜ふるも不竟は渠が  
てふ死を脱き去るやと心ひく組んと競ふ力士亦或右に柱え左に投退  
後より或は丁と蹴倒し飛鳥の如く刃を働くはほととよのよ附き翠簾  
の内中成氏朝臣その性烈に短慮の大將相を蹴放ち身を起し彼

數の留よと下知るる人の養つと鞍の近臣かの刃を抜鬃しく透間ゆり攻め  
る白刃の下をくみ潜る信乃も疊薦を蹴揚ぐ箆楯を取て防死留隙を  
揣りて飛く。先は進み一人が刃を奪めく砍墮する不八方へ移り靡非  
けて十餘人は残を負せ八九人を砍伏せし。廣庭は跳出軒端の松を木  
竹のく閃りと屋上は飛登るは或も鎗を突揚ぐ蛭巻より砍割る或も  
矢庭は追登りて深瘡を負りて一雪崩は滾落るゆゑかつけり暫時の  
闘戦その甲斐ある。信乃一人は砍ちらるる。血を涿鹿の野を浸し屍も  
朝歌は累く。信乃も浅瘡を負りければ鮮血を嚙く咽喉を潤し。  
屋根より屋根より登りて脱去るは方を探るる要害の物見と  
おろし三層の樓閣あり。これハ是遠見の爲に建てしと。芳流岡と  
名つけり。信乃は脱る路を思ふと辛く攀登るは城溝を渺こころ

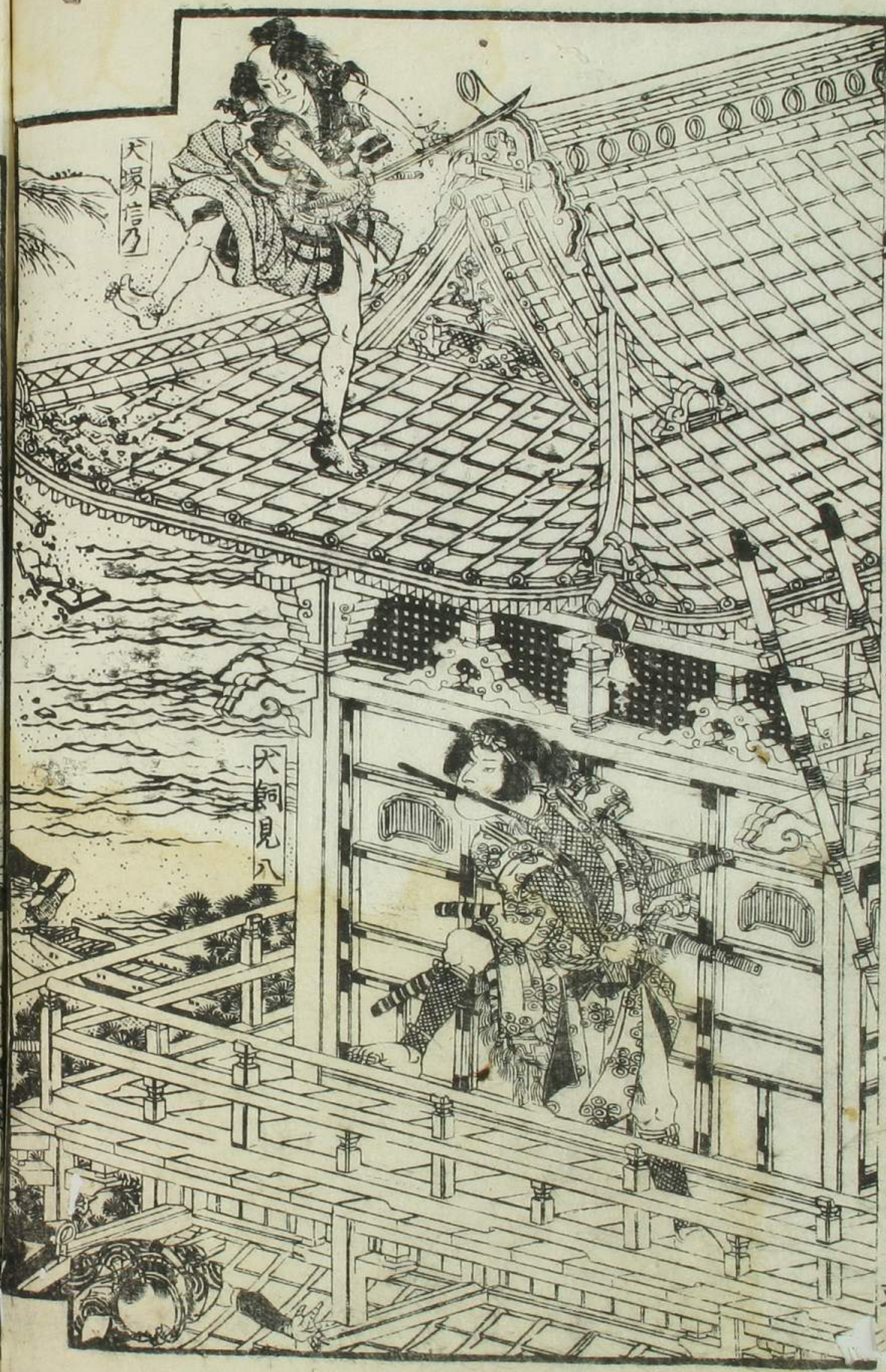


君命おまつて  
 見八  
 信乃と擲捕  
 んとそ

大傳三車卷五

九六

山崎堂藏



天塚信乃

大飼見八

大傳三車卷五

山崎堂藏

大河の中流を岡の下小引らる。水際より快形に懸死し。俗に坂東太郎と  
 唱へて八洲第一番の大河より。その下流に葛飾あり。行徳の浦曲より。巨海に朝  
 日。咽喉より更な後方を足久。是首の廣庭彼首の城戸に数百の士卒  
 屯し。射て落さんと弓杖樹より。進退ほしく究る。よれ敵あふ登りて  
 才よ組と戦殺せんめのをと。心外他する。とけり。さる後小前管領成氏の  
 夥の士卒を移せし。まをく怒りて力士を取會信乃を搦捕る。めのお  
 加恩千貫文を賜ふ。とちちのあ。詢させし。とも彼武藝小者懲て  
 美らんといふめ。當下執權在村に成氏は。獄吏大飼見八信道の  
 かん抜萃の職役を固辞ま。膺強く身の暇を乞ふ。外小の月。さ  
 林示獄せし。渠を古人二階松山城。武藝允可の高弟。就中捕  
 物巻法の本藩無双の力士。且くその罪を寛め。信乃を搦捕せし。功

成らば見八は。死罪を赦え。又信乃は。惜む。死め。小の。さ。誅へ  
 つ。と。真。と。ち。薦。ま。う。せ。う。ち。領。死。女。が。意。見。究。て。よ。と。く。と。仰。さ。る。そ  
 在村の時を授。件の大飼見八を獄舎より牽出させ。その縛を釋放。君  
 命を運送。大刀身甲。脇指。脇指。小十。を添て取せ。見八。辞。ふ  
 ね。る。を。謹。て。領。兼。一。生。と。禮。ひ。居。縮。ち。う。足。踏。試。に。在。村。に。辞。別  
 去。二。間。階。子。を。走。登。る。梯。の。妙。を。傳。ふ。如。孫。相。の。あ。る。さ。う。芳。流。閣  
 の。管。棟。は。血。刀。引。扱。て。立。つ。信。乃。を。送。ら。う。ち。膽。く。些。も。擬。殺。せ。し。雲。と。凌。る  
 樓。閣。の。毫。を。踏。く。進。む。程。成。氏。に。在。村。水。老。堂。近。習。習。お。く。廣。庭。小。床  
 几。を。立。て。さ。ら。仰。死。膽。り。主。後。に。陪。さ。る。め。の。さ。う。口。を。畢。竟。天。塚。大。飼。西。雄。の  
 勝負如何。編を嗣死巻を更。第四輯の端。解人出像を現。餘韻と味。へ。个  
 里見八犬傳第三輯卷之五 終

八代傳三車卷五

# 編述

## 曲亭馬琴稿本



淨書

千形仲道騰寫

# 出像

## 柳川重信繪画



棗人

中村喜作

## 家傳神女湯一包代百銅

婦人諸病の良劑なり。第一産前産後ちの  
まゝ用ひてその功神の如く又うぢまふりぢぢ  
用ひて急ぐ人をとらふ一六一の包紙はまらせり

## 精製衣奇應丸

偽薬をのぞききり真物をとらふに如くもつて分量うぢは  
まゝの製方なりとあらふとてその功神の如く別な能書あり今思ふ  
大色三品餘人代代中包千六粒入代をなす小包十一粒入代五  
婦人つらむ乃乃強藥 毎月つらむ小包あり又産後をうぢるも  
小包代六十四粒 小包代三十二粒

## 製薬弘所

江戸元留町中坂下南側四方を本店向瀧澤氏製

同家出張所 昌平橋通神田明神石坂下向町東新道滝 澤 宗伯

取次所 浅草神明前ゆりや市兵衛 大坂心齋橋筋唐物町 ゆりや太ゆ

著作堂隨筆玄同放言 三卷天地部草木部人事部の上より出版 全九冊

前北齋爲一画狂老人畫圖

# 新編 漢楚軍談

全部四十卷 近刻

蓬廬青々山人著

# 俳家奇人談

前後六卷 出来

蕙齋紹真臨圖

天保十二辛丑孟春新刻

大阪心齋橋通博勞町

河内屋茂兵衛

# 書林

江戸大傳馬町二丁目

丁子屋平兵衛

漢楚軍談の序文  
漢楚軍談の序文は、漢の武帝が楚を討つた時に、  
楚の将軍が漢の将軍に手紙を書いた事から始まる。  
この手紙は、楚の将軍が漢の将軍に、  
楚の土地を漢に譲りたいと申し附けた事から始まる。  
この手紙は、楚の将軍が漢の将軍に、  
楚の土地を漢に譲りたいと申し附けた事から始まる。  
この手紙は、楚の将軍が漢の将軍に、  
楚の土地を漢に譲りたいと申し附けた事から始まる。

